
王様と喪女

舘野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Nコード】

N2323R

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。

漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとって結婚しろとはるかに迫るが……？

ものぐさ主人公に突然訪れた人生の転機。一度完結しましたが、一

部削除してもう一度書き直します。すみません。

登場人物紹介（挿絵有り）

■ 只野はるか（ハルカ）

> i 3 0 1 0 1 — 3 8 6 8 <

27歳、元工場系事務員。

漫画を描くことと、預金通帳の残高を確認することが趣味。自分はモテないとかたくなに思い込んでいる。たぶん天然。

■ カレヴィ

> i 3 1 2 1 0 — 3 8 6 8 <

異世界、オルデリード大陸・ザクトアリア王国の国王。24歳。イケメンだが、あっち方面がちよつと……（なんだ）。

自分の結婚に対しては政略が当たり前と思っている。

■ 千花（ティカ、旧姓：佐藤）

27歳。はるかの幼なじみ。真っ直ぐの長い黒髪が印象的な美女。美人で出来がいいと近所で評判。はるかは幼少時から千花と比べられて育った。

実は異世界では世界最強の魔術師。

1話 喪女の身の上

「よし、下書きまでは完成ーっ」と

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかったので、その事に浮かれていた。

「しかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分にあてがわれた部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

恋人はいない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。いわゆるもてない女——喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思う。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないことはなかった。

友人やら周りの上司や知人やらに、男性を紹介すると言われたり、親に見合いを勧められたりしたからだ。

だが、わたしはそれを今はそんな気はないからと断り続けた。それを続けているうちに周りも諦めたのか、紹介すると言ってくる人も稀になった。

なぜ、わたしが周りの親切を断り続けたのか。

……それはひとえによく知らない男に合わせるのが面倒くさいのと、趣味に生きたかったからである。

趣味……それは、オリジナルの漫画を描くことである。とはいっても、どこかの出版社に投稿する気もなく、ウェブの自サイトに載せているだけという完全に自己満足のものであった。

今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、それでもわたしは上機嫌だった。

わたしは原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめると、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、もう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。

しかし、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いつてえ〜っ！」

二十七の女の叫び声としてはどうかと思うが、本当に痛いのでしようがない。

だが、原稿一式は死守。
どうあっても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまっており、あんなふうには散らばることはないはずなのに。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさるうとした。……がな

んだこれ。

「おい、やめろ！」

なぜか馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて、呆然とする。

——どこだ、ここは。

さっきまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、こっちはそれどころじゃなかった。

——いったい、なに？　なにが起こったの？

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動してくるなんてありえない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……もしかしてこれは、ひょっとしてひょっとすると、ウェブ小説とかでよくある異世界トリップってやつですか！？

2話 完全なる不審人物

馬鹿でかい机の上からとりあえず降ろされたわたしは、目の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだがどこから来た」移動魔法とか言われても、よく分からない。

でも、目の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここが異世界じゃないならだけど。

「それじゃ、ジャパン」

「……ジャパン？」

美形男は首を捻つてる。それでも通じないのか。

「……恐れながら」

今まで気がつかなかったけど、近くには五十代くらいのおじさんがいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だったかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぼかんとしてしまった。

……そうすると、その最強の女魔術師って、日本人なの？

「……そうか。異世界召喚でこつも自然に言葉が通じるのは疑問だったか、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなければなと呟いた。

「……あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

「それはそうだろう。……おまえはまったく行っただことのない大陸で話を通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまった。

「言われてみれば、そうですね」

……でも、なんで召喚されたのがわたし？

こんな枯れた地味女じゃなくて、もっと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「……しかし、召喚されてきたのは分かったが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！？」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまった。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだったのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるって……、再発行してもらえばいいだけでは？」

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもらうわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたこと重大さに血の気が引く思いだった。

「す、す、すみません！」

わたしは頭を下げて美形に謝ったけど、こんなことでは許してもらえないだろうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗くと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言ったことで、わたしは許してもらえたのかと思って

頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思ってもいなかった彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。
「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まっていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり俺の花嫁にされる姫が気の毒だ」

この人今、姫って言った？

……そんな人を花嫁に出来る目の前のこの美形はいったい何者！？

「姫？ あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「カルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなってくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメパンチ派だ。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

美形がわざわざゆつくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……って、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかった。

だって、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれって言われてるってことじゃない！

3話 とりあえず着替える

「国王の花嫁なんて無理ですって！」

わたしは必死で訴えたが、カレヴィ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「えええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般人ならともかく、王様って事はいろいろとめんどくさいことがあるってことでしょ？

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「今すぐ着替える」

着替えるに当たって、わたしはお風呂に入れてもらうことになってしまった。

侍女の一人に大事に持っていた原稿一式を奪われて、わたしはちょつと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ぜったい、絶対だよー！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら

困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるといいうピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまったものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になって一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。

ちよつとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなつたわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へと移動させると一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええつ、ちよつと、ちよつと！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまった。

……なんというかちよつと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

お湯で全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねえと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、台の上に横になってくだ
さいと言われて、わたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサ
ジを受けた。

あー、肩と首のこりがちよつと酷いんだよね、と言ったらそこを
重点的にマッサジしてくれた。うへへ、極楽極楽。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪
磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、エステってこんなのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといってもタダだし。
……ここが異世界ってんじゃないなら、もつといいんだけどね。

全身マッサジも終わって、ちよつと休憩と言うことで、出され
たジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をい
くつか出してきた、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。
まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちよつと地味な素材はないの？　せめて着る人に衣装は合わ
せて欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれ
しかないらしい。ちえっ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……っか、これを着るのか？　普段だらけきつた生活をしてい
るこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそうす
るわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装
を着せられた。

お腹周りとか心配だったけど、それはなんとか帯を巻いてしのい
だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

ここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあっ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせず冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さっきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよねー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまた王の前に連れて行かれた。

4話 超非凡な友人

着替えさせられて、カレヴィ王の仕事場(?)に戻ったわたしは、そこに見知った人物がいたので驚いた。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になっているけど、間違いない。

「ち、千花っ!？」

「はるか、ひさしぶりー。元気だったー？」

千花に抱きつかれてわたしはちよつと呆然とする。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

確か、結婚して外国にいるって聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だって聞いてなかった？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だっていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うつそ、そんなことありなの？」

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思うけどー……」

千花はそう言つと、困つたように頬に手をやった。なんというか、どこことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだったのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花がカレヴィ王とおじさんに頭を下げる。

「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどこなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……

まあ、千花は友達の鼻屑目を引いてもとっても美人なだけだね。

「……それにしてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

「うん、この大陸の人には千花って呼びにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごくない？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちよっと困った顔をした。

「うーん、はるかにはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思う」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言うんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィ王が遠慮がちにわたし達の話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だつていうのに堂々としている。

ひょっとして、最強と言われるほどの魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだろうか。

さっきのおじさんもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでいたし。

「ハルカが突然現れたことで、隣国のディアルスタン王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になった。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりません、ディアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしということになります」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまつてある。どうしたらいい」

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込んだ。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもらうことになりますね」

「ああ、それでいい」

カレヴィ王は頷いてるけど、ちよつと待つてよ！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちよつと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこうなつたんじゃない。

「うん、本当にごめんね。でも、カレヴィ王に酷いことはさせないつて約束する」

それつて、結婚しても手は出させないつてことだよな？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやつてるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよな。それは残念ながらやめることになりそうだけど……」

「そんなあ……。わたし、せつせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはその事務員つてことにするよ。給料も今よりはずむし」

「ええつ、本当！？」

魔術師つてそんなことまで出来ちゃうの？

つていうか、会社設立つて、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われてわたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。

「ええー、それなら結婚する！」

そんなわたしをカレヴィ王とおじさんが呆れた顔で見っていたけど、わたしはそんなこと構ってなかった。

多少問題ありだけど、趣味に没れるって素敵じゃない？

5話 子を成す覚悟

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はっと我に返って言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないですし……。その件については、わたしがどうかしますから、カレヴィ王はもう少しお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィ王が言ったことはごく当たり前のことなんだよね。

形だけの王妃なんて、もらっても困るだけだろう。
そしたら、わたしはおいしただけの話に食らいついてちゃ駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」

「え……。はるか、本当にいいの？　もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もそんな可能性が高い。

……なら、別にカレヴィ王と結婚しちゃってもいいかなあって思うんだ。

まあ、成り行きつつや成り行きだけだ。

わたしがそう言つと、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からない感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてると思つてるかもしれない。

「はるかがOKなら、わたしが口を挟むことじゃないよね。……でも、なにか困ったことがあったらすぐに言ってよ？ 出来るだけ協力するから」

千花がわたしの手を取って、それでも心配そうに言ってくる。

うん、持つべきものはやっぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくてもいいや。……今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィ王がそこに割り込んできた。

「……話は済んだか？ ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かったぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言うと、カレヴィ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？ てっきり二十歳そこそこか……」
「……っていうことは、カレヴィ王は今二十四なのか。」

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じゃ嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知っているんじゃないのか？ 王妃になるなら、清らかでなければならぬぞ」

うんまあ、そう思うのが普通だよな。

「ああ、それはいいですから。わたしはとっても清らかですよ。……なんといつても、わたしはもてない女ですから」

わたしは事実を述べただけなのに、三人にものすごく微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そうか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳ということにさせてもらう。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思うけど、王妃にするにはこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言つてた男を知っている云々と言つてくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願いします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対して敬語もいらない」

今まで気が付かなかったけど、この王様はかなり気さくらしい。

この先の人生、ずっと付き合っていかなくちやならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかった。

わたしはほっとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かった。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがな」
う、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。

「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ〜っ」

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ」

「ごめん、こればかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

……やっぱり、そうそううまく話は転がってないよなあ……。
そう考えながら、わたしは深く溜息をついた。

6話 召喚の真相

カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言っても間に共同スペースみたいなものがあって、王と妃と一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

とりあえず今は、わたしと積もる話があるから泊まっていくと言った千花と一緒に寝室にいる。

で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにされていて、友達のわたしでも惚れ惚れする。

「まず、はるかに謝らなきゃいけないことがあるんだ」

千花は真剣な顔をしてわたしに向き合った。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていうのは嘘なの。わたしは、わざとあそこにはるかが現れるようにし向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとカレヴィと結婚するようにし向けたってこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事実に呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィ王と結婚する予定だったディアルスタンのリリーマリー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど」

——なにに、王女と騎士の恋！？

わたしは素早くそれに反応して千花に詰め寄った。

なにを隠そう、今わたしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にもものすごく興味を引かれてしまった。

「——詳しく聞かせて」

わたしは千花の肩をがしつと掴むと、目を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらも説明してくれた。

「王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想っていてね。そのうち王に思い切って結婚したいと申し出るつもりだったらしいの」

「あらー……」

わたしは思わず気の抜けた声を出してしまった。

だって、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

「でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかったから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃったのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせっつかれて、そろそろ結婚しないともずいと思っただらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」

「政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろって言うてくるくらいだもんね。それくらい平気でするよね」

カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかったってことがわたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。

……けど、王なんだから、結婚するに当たって相手のこと少しくらい調べない？ わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

「それで今回、リリーマリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思っ

てただけど、婚礼契約書にカレヴィ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに目を付けたの」

「……それはわかったけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」

「突然召喚されてきたことにすれば、契約書が滅茶苦茶になっても不自然じゃないかなと思って。それにはるかなら、カレヴィ王とうまくいくかもしれないなって思ったし」

「ええっ？ 千花、なに言ってるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思ったし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持っていないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィ王に手を出させるつもりはなかったんだよ？ それだけは信じて」

「うん、分かってる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言うと、千花はちよつとうろたえた。……図星かあ。そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちよつと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じゃないから。はるかが不幸になることはないと思っただ。本当にごめんね、はるか」
そう言うと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいいよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かったし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑って言うと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

7話 異世界に嫁入りするにあたって

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これからのことを話していた。

「とりあえず、一回家に帰って事情を話しておきたいんだけど。会社にもやめるって言わなきゃいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくって言ったら正気を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィは忙しいらしいんだけど、わざわざそう言ってくるのは、かなり気を遣ってくれてるんだろうな。

「どうしても必要だったら出てきてもらうかもしれないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらって理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかった娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよな。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「ああ、そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたって訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたって言ったら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえなさそうな気がするの

は、わたしの気のせいだろうか。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」

おお、力強いお言葉。カレヴィがそう言つと、なんとなく可能な気がしてくるから不思議だ。

「そう？　じゃあ、そうしようかな。カレヴィ、その時はお願いね」

「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいたのがわたしだからなんだろうけど。

そして、なんとなくもやもやしつつも、わたしはとりあえず帰宅することにした。

こちらの世界の服に着替えた千花と一緒に自分の部屋に移動したわたしは、適当な服に着替えた。昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頓着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替えたわたしは、家の鍵とバックを持って家の外に移動した。

……なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど、仕方ない。……「ただいま」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛び出てきた。「……はるか？　連絡もしないで、今までどこ行つてたの。携帯は通じないし、まったくあんたって子は」

……心配してくれてるのは分かってるけど、わたしもいい歳なん

だし、いい加減子供扱いはやめてほしい。

おかんのその上からの物言いに、わたしが思わずむっとしてると、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかはわたしの家に泊まってたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は外国に行ってることになってるからね。

「まあ、千花ちゃん、また綺麗になって。いつ帰ってきたの？」

近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会って、おかんはころりと機嫌がよくなった。

「……ちよつと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる気もするけど。」

「つい、夕べです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃったんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしょうがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らうとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「さ、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよ！」とリビングに戻っていった。

「……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しすぎる。確かにわたしは出来の悪い娘だけどさ。」

「……おばさん、相変わらずだねー……」

千花が同情するように言ってきたのをわたしはただ苦笑いして受け止めた。

改めて自分の評価を突きつけられた気がして、非常に情けなかった。

8話 話すよりもまず実行

「……それにしても、ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかったね」

千花が眉を下げて申し訳なさそうにわたしに謝ってきた。

美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ」

……とはいえ、連絡の一つもすればよかったな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だったなと思う。

まあ、過ぎてしまったことは仕方ない。次は気をつけよう。

「それより、千花上がったよ。千花には説明頑張ってもらわないといけないし」

——そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上がると、わたしの後に付いてリビングに入った。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちょっと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。夕べははるかをお借りしちゃってすみませんでした」

「うん、いいんだよ。こういうことがないとはるかは家にひきこもってるんだから」

……おとももなにげに毒舌だね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとおかんにいろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ」

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょうね。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが口ごもると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。

「じ、実は今度結婚することになったんだ」

すると、おとおかんがうるんな目でわたしを見た。

……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言うことを二人が信じられなくても仕方ない。

「本当です。あの変なことを言うと思われるでしょうけど、聞いてください。はるかには異世界の王様の花嫁になることになりました」

評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん？ どうしちゃったの？ はるかならともかく、千花ちゃんそんなこと言うなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついてるぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔術師をしています」

見てください、と千花は言うと、その手から明るい球体を出した。
……もしかして、これが昨日千花が言ってたあかりを灯す魔法なのかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになって見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取っても不思議じゃない。

「違います。言うなれば、魔法使いですね。……よく見てください」

千花は椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぼかんとして見る、おとんとおかん。……まあ、信じられなくても無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかった。

千花はテレビの傍からもう一度元の場所に戻ってくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じった目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんがまだ信じられないように呟いたが、千花がそれに対して強く頷いて言った。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらっていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください」

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきゃ」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まりを開始した。

「おじさん、おばさん、信じられないかもしれませんが、これは本

当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かって右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返ったようだった。

すっかりよそ行きの格好になっている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「こ、これはいったい……」

「千花ちゃん、どうなってるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいと狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、ここはどこだろう……？

9話 謁見

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなったところにある豪華な椅子にカレヴィが悠々と腰掛けていた。

「ここは……？」

わたしが疑問を口にするのと、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほど納得した。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

「うん、そう」

カレヴィの改めての確認にわたしは頷いた。

そこで初めておとんとおかんは我に返ったらしくて、見慣れない豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていた。

「そうか。……俺はザクトアリア王国の国王カレヴィだ。この度はるかを花嫁に迎えることになった。今後、よろしく頼む」

「は、はあ……」

威風堂々としたカレヴィに対し、おとんは気の抜けた返事をした。……まあ、今まで一緒に暮らしていた娘が、突然異世界の王様の花嫁になることになったわけだし、この反応は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかんにいたっては、呆然とカレヴィの端正な顔を見ているだけだった。

「ハルカ、隣に座れ」

カレヴィに隣の席を示されて、わたしは驚いてしまった。

だって、あれって王妃の席じゃない？ わたしはまだ王妃になつてないぞ。

「え、いいの？」

「構わない。おまえは一月後には俺の妃になる。遠慮するな」
そう、それじゃ遠慮なく。

わたしはカレヴィの言葉に従って、一段高くなったところに上がり、カレヴィの横の豪華な椅子に座った。

そしておとんとおかんの方に向くと、二人は並んで座っているわたしとカレヴィを呆然と見ていた。

「今言った通り、一月後にはハル力は俺の花嫁になる。そなたらもそのつもりでいてくれ」

「……はあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……そういうことですから、今現在はあるかが勤めている会社は辞めてもらうことになります。その代わりと言ってはなんです、わたしが新たに会社を設立して、はるかをその事務員とすることになりましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぼかんとするおとんとおかん。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだが、ハル力にかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。はるかには王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろうな。

でもそうになると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かってないけれど。

「……ハルカの父母はなにか質問はないか？ あれば答えるが」
カレヴィのその言葉に、おとんはつとして言った。

「お、恐れながら、どうしてはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？ 容姿は普通ですし、性格もけして気の回る方ではない。友人には恵まれています、そう社交的でもない。それなのに、なぜですか」

今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもっと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによってはるかなんです？」

……二人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。二人が普段わたしのことをどう思ってるかよく分かったよ。

わたしが思わずむっとしていると、カレヴィが椅子の肘掛けに置いてあったわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハルカを選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィが威圧的にそう言うとおとんとおかんはかなりびびったようだった。それ以上言う気もなくなったようで、口を噤んだ。

「……もう質問はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハルカの父母は別の間で休むように。……ハルカ、来い」

わたしは立ち上がったカレヴィに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

……なんか、カレヴィ結構怒ってるみたいなんだけど。

ひよつとして、おとんとおかんの話を聞いて、変な女を掴まされたとも思っているのかなあ……？

10話 憤るカレヴィ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィに、そのまま謁見の間の控え室みたいなところまで強引に連れていかれた。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」

……あれ、わたしに怒っているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対してハルカの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかった、父と母が怒るの？」

わたしはカレヴィの思ってもいなかった言葉に思わずぽかんとしてしまった。

「普通は、異世界などという訳の分からないところには大事な娘をやりたくはないだろう」

「ああ、そうか。今まで一緒に住んでたんだしね。……でもたぶん、二人ともまだ状況がはつきり把握できていないだけだと思うよ」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としてることがほとんどだったものね。

「それがなんだ。娘のことをあげつらうような真似をして。親なら娘の長所くらい分かっていそうなものだろう」

「あー、カレヴィわたしのために憤ってくれてるんだね？」

彼に惚れるまではいかないけど、これにはちよつと感動した。

カレヴィ、なんだかんだ言っているいい人だなあ。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙っているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所って自分でも思いつかないなあ。だからうちの両親がそういう物言いになったのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言つと、カレヴィは顎に手を当てて少し考え込んだ。
「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか？ たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈？」

カレヴィの言っていることがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分はもてない女だと豪語していたじゃないか」

ああ、あれね。

「いや、実際もてなかったし。だから、そう言っただけなんだけど」
「それはやめろ。おまえの容姿はおまえが言っただけ酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろう」

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィのその言葉にくくりと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこういう気遣いができる彼は、結婚相手として、これ以上の贅沢はないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしを王妃に据えようとすることから、結婚に対するやる気はほとんど皆無だけど。

わたしが頷いたことで、カレヴィはほっとしたように少し息を付く。

「……それでは、ハルカの両親と合流するか。ハルカはまた着替えてこい」

「え、このままでいいよ」

いちいち着替えるの、めんどくさいし。

わたしは断ったけれど、カレヴィがそれを許さなかった。そして、有無を言わさない口調で言った。

「ハルカ、着替えろ」

カレヴィの命令で大急ぎで自分に与えられた王妃の間に戻ったわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

それで、おとんとおかんのいる部屋に通されると、既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんか置いてある。それを目にしたら、なんだかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとんとおかんは真っ赤な顔でふらふらとわたしに近寄ってきた。

「おおっ！ はるか、そういう格好をするとまるで別人だぞ！ さすが未来の王妃だ！」

なにがさすがなんだかよく分からないけど、おとんとおかんは既に出来上がっていた。

……誰だよ、こんなに飲ませたの。立派なよっぱらいじゃないか！
「はるか、よくやったわ！ まさかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをあおる。

その様子をカレヴィは呆れたように見ていた。

「はるか、ごめん。ちよっとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しようとしたら、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃって、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝ってくるけど、どう考えてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だったそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィは、強いと言うわりにはそのルルア酒なるものをくいくい飲んでいる。

わたしはカレヴィの隣に座って彼にルルア酒を注いでもらうと、一口それを含んだ。……なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

「正直、おまえにはまったく期待していなかったがぁー、世の中には不思議なこともあるもんだなぁ」

……うっさい、おとん。

「それもこーんなハンサムな王様とぉー。わたしがもうちょっと若かったら代わりたかったわ」

……もうちょっとつて、それでも歳取りすぎだろう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わっているな」

カレヴィは溜息をついてしみじみと言う。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いったいなにをやったんだ。

千花に聞くと、二人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

なんだかさつき二人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをあおった。

——その後。

見事に出来上がってしまったわたしは、カレヴィを床に正座させて「適当に結婚相手を決めるのはよくない」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかった。

11話 突然ですが結婚します

とりあえず、おとんとおかんにはわたしがカレヴィの妃になることは分かってもらった。

でも、問題はまだ残っている。

ザクトアリア王妃になるには、その準備期間もあるから、わたしはすぐに会社を辞めなければならない。

ただ、これが社会人として、周りに非常に迷惑をかける行為なのは分かっている。それは本当に申し訳ないと思う。

わたしの直属の上司である主任も今すぐ辞めることには渋るだろう。

それを考えると気が重かったが、とにかくわたしは休み明け早々主任に話をする事とした。

わたしはいつもより早めに会社に出勤して、主任に話を切り出す準備をしていた。

今のわたしは、あか抜けない水色の事務服と白いスカートというこの会社ではまあ標準の格好だ。

ただし、化粧はファンデをごく薄く塗って、リキッド口紅を軽く塗っただけという手抜きぶり。髪はうねるくせっ毛を簡単に後ろで一つにまとめただけだ。

そんな格好してるからモテないのよ、と会社の人に言われたことがあるが、作業員のおばちゃん達相手に巻き髪とか、つけまつげバチバチやる気は、わたしにはまったくくない。

「悪いけど、しばらくここで待機しててね」

「……俺も一緒に行かなくていいのか？」

千花に異世界召喚されてきて、この世界の服装をしているカレヴィ

イが少々心配そうに言ってきた。

初めてきた世界だというのに、カレヴィはそのことに動揺する気配もない。うむ、肝の据わったやつだ。さすが王様。

……とは言っても、まだ車とか電車とか、立ち並ぶビルとか見た訳じゃないから、その辺りはまだピンときていないだけかも知れないけど。

「うん、まだ大丈夫。必要になったら呼びにくるから。……ちょっと殺風景なところだけど、我慢してね」

今カレヴィや千花という備品倉庫は滅多に人が来ない穴場だ。

もし万が一人が来ても、千花がいるから隠れることはできるし、まあ大丈夫だろう。

「はるか、頑張つて。駄目そうならすぐそっちに向かうから」

「うん、じゃあ後でね」

わたしは千花とカレヴィに手を振り、職場の事務所に向かった。

始業四十分前の事務所にはまだ誰も来ていなかった。

そこでわたしは謝罪と今までの感謝の意味も込めて、みんなの机の上をいつもより綺麗に水拭きしてから、床を箒で掃いた。

ちりとりでゴミを集めていたところで、主任がやってきた。

「おはよう。なんだ、只野ちゃん、今日はやけに早いな」

まあ、いつもは二十分前とかだもんね。主任がそう言うのも当たり前だ。

「ええ、まあ。主任、おはようございます」

わたしは適当にはぐらかしつつ彼に挨拶すると、とりあえずちりとりゴミを捨てに行った。

それから給湯室で手を洗って、お茶の準備をする。

お湯で急須と主任の湯呑みを暖めてからそのお湯を捨て、お茶を淹れる。

わたしは主任の湯呑みをお盆に乗せて運びながら、結婚話をなんと言って切り出そうかと考える。……あ、もう着いちゃった。

「どうぞ」

「ありがとう」

わたしが机にお茶を置くと、主任はまず一口啜ってから唸った。

「うーん、やっぱり只野ちゃんの水が淹れたお茶が一番旨いなー。なんというか、春山ちゃんは淹れ方が適当だからな」

ちなみに、主任が言った春山ちゃんというのはわたしの後輩に当たる事務の女の子だ。

まあ、わたしの淹れ方もごく普通なので、そんなに褒められるようなものではない。

「ところで、主任。お話があるんですが」

「ん？ なんだ、困ったことでもあったの？」

「いえ、そういうことではないんですが……」

むしろ困るのは、わたしじゃなくて会社の方なだけだね。

「実はわたし、今度結婚することになったんです」

そう言った瞬間、お茶を飲んでいた主任が思いきり吹き出した。

ちよつとその反応はベタすぎるだろ、と漫画描きの視点から、つい心の中でつつこんでしまう。

とりあえず、わたしは急いで給湯室から布巾を取ってきて、惨憺たる状況の主任の机を拭いた。

「あ、ああ、ありがとう。……けど、只野ちゃん結婚するって本当なのか？」

「本当です。あと急で申し訳ないのですが、すぐに辞めさせてもらいたいんですけど」

わたしがそう言うと、案の定主任は渋い顔になった。

「すぐって一ヶ月後くらい？」

「いえ、できれば今日にでも」

かなりの無茶を言ってるのは自分でも分かっている。主任も渋りきった顔になった。

「それは困るよ、引継もあるし」

そりゃ、そうだろうな。

「一応、春山さんにはわたしの仕事を教えてはありますが」

「でも、いきなり仕事量二倍じゃ、とても春山ちゃん一人じゃさばききれない。次の子を入れるにしても、只野ちゃんにはしばらくいてももらわないと」

「すみません。でも、外国の人に嫁ぐことになったので、それは無理なんです。本当にすみません」

わたしはここぞと主任に誠心誠意頭を下げて謝った。……こんなことしても会社に迷惑をかけるのは変わりないんだけど、やっぱり気持ち的にすごく申し訳なかったし。

「只野ちゃんが外国人と……」

主任はモテない女のわたしが急に結婚すると言ってきた、そしてその相手が外国人だということにショックを受けたようだった。

その時だった。

「おい、ハルカ。まだ説得できていないのか」

呼んでもいないのに、なぜかカレヴィがそこに現れてわたしは驚いた。

さらに間の悪いことに事務所の他の人達や作業員のおばちゃん達が出勤してきて、どう見ても外国人で、飛び抜けた美形のカレヴィを目にして大騒ぎになった。

「……えーと、彼がわたしの結婚相手です」

仕方なくわたしは、カレヴィを手で示しながら紹介する。

——その後の騒ぎは、もちろん先程の比ではなかった。

12話 寿退社

ちよつとした大混乱の後、わたしとカレヴィは主任から報告を受けた係長、課長と一緒に応接室にいた。

「ほう、それではカレヴィさんはフランスの方なんですね」

どうやっているのかは分からないけれど、わたしとカレヴィの耳元には千花の指示が随時届いている。

わたし達はそれに従って、目の前の課長と係長に結婚に至る嘘の説明をしていた。

最初にカレヴィをフランス人という設定に言った千花に、浅黒い肌のカレヴィははたしてそう見えるのか不安を覚えたわたしだったけれど、まったく問題なかったようだ。

フランス人といったら今まで白人のイメージしかなかったけれど、実際は色々な人種の混血が進んでいて、見た目も様々なんだそうだと。課長と係長もそれは初耳だったようで、カレヴィのどこの国とも知れない容貌に興味深げに見ていた。

「俺の家はそこそこの格式のある旧家だ。そこで、はるかには花嫁修業がてら、言葉を習得してもらう。その為には今すぐ日本を飛たなければならぬ」

課長と係長相手にどこまでも偉そうにカレヴィは言う。まあ、一国の王様だから仕方ないのかもしれないけれど。

ちなみに、課長と係長には最初にカレヴィは教わった日本語が偏っているの、偉そうに聞こえるのは勘弁してくださいと断っている。

でも、課長と係長もカレヴィの威風堂々とした態から、その口調もあまり気になっていないようで、むしろとても偉い人を迎えているような態度になっている。

「そうですか。只野さんは仕事もできるし、本当は抜けられると困りますが、そういう事情ならいたしかたありませんね」

おお。課長、今のはお世辞でも嬉しいよ。

カレヴィの言葉に頷きながら言った課長の言葉にわたしはちょっと感動する。

「確かに、今度から只野さんに急ぎの文書を上げてもらうことができなくなるのはちょっと厳しいな。只野さんのタイピングのスピードは貴重だったからね」

「すみません」

自分では駄目駄目な人間だと思ってたけど、会社の人達はこんなわたしを評価してくれてたんだ。

そう思うと本当に申し訳なくて、わたしは二人に深々と頭を下げた。

「まあ、こんな事情ならしょうがないから、只野さんは自分の幸せを優先して。慣れない海外生活、体に気をつけて頑張ってね」

「あ、ありがとうございます」

課長がわたしに激励の言葉をかけると、係長も続けて言った。

「溜まっている有給休暇はちゃんと消化するからね。仕事のことなら、みんなで分担してなんとかするから、後のことは気にせず、自分の幸せのことを考えてね」

「本当にすみません。ありがとうございます」

暖かい二人の言葉にわたしはつい涙腺が緩んで、ちょっとだけ泣いてしまった。

「ハルカ」

カレヴィがわたしの肩に手を置いて、心配そうに覗きこむ。

課長と係長はそんなわたし達を微笑ましそうに見ながら、心から祝福してくれた。

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカ―の整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達に

用意してあったお菓子を配って回った。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張ってたね」

「只野さん、いなくなっちゃうなんて寂しいですうっ」

そう言っただけ抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちょっと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろうと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね」
わたしがそう言っただけ、奈緒ちゃんは真っ赤な目をして、はい、と頷いた。

「せっかくのおめでたいことなのに、只野ちゃんにお祝いをあげられなくてごめんね」

主任が申し訳なさそうに言ってきたけれど、こんな無茶を聞いてくれただけでも充分ありがたい。

「いえ、そんなこと気にしないでください。急に無理を言っただけです。それから……、今まで本当にお世話になりました」

わたしは事務所の人達に深々と頭を下げてから、失礼しますと言っただけ、後ろ髪を引かれながらも踵をかえす。

わたしはカレヴィに肩を抱かれて、その背に「只野さん、お疲れさま」「体に気をつけてね」「お幸せに」等々、ありがたい言葉を受けながらその場を去った。

わたしが備品倉庫まで戻ってくると、その場に待機していた千花は笑顔で迎えてくれた。

「あつ、はるか！　よかったね、うまく説得できて」「うん」

千花のその笑顔を見たら、なんだか急に泣きたくなくて、わたし

は彼女に抱きついた。

そしてぼろぼろ涙をこぼすと、千花は慰めるようにわたしの背を優しく撫でてくれた。

「……こういう場合は、普通、夫になる俺に抱きつくものじゃないか？」

とかなんとか、カレヴィがぼやいたらしいけれど、その時のわたしはもちろん聞いてはいなかった。

13話 花嫁修業……なのかな？

めでたく寿退社したわたしは、またザクトエリアに戻ってきていた。

その前に、サイトには私事が忙しいので更新が滞ると告知しているので、しばらくは安心だろう。

これからわたしには、怒濤の花嫁修業が待っているんだよね。…

…それを考えると、ちよつと気が重い。

千花もいろいろ忙しいらしくて帰っちゃったし。

わたしは王と王妃の共同の間で晚餐をとった後、香り高いコーヒを飲みつつ、少し溜息をつく。

それを耳聴く聞きつけたカレヴィが言ってきた。

「なんだ、ハルカ。……不安かな？」

「……まあ、不安といえば不安だけど。わたしは庶民だし、ちよつと気が重いよ」

「そうか、それもそうだな。だが、それは徐々に慣れていけばいい。

……そういえばおまえには決まった侍女を付けていなかったな。代々王妃には三名付くことになっているが」

「え、そんなにいらないよ」

わたしに三人も付くとかそんな大げさな。

「そうはいかない。王妃となればそれなりに体裁を整えなければならぬ」

「そうなの？」

王妃の体裁とか、なんか面倒だなあ。

「侍女長と相談して、若くともしっかりした者を選ぶようにしよう。そうすればハルカのいい相談相手になるだろう」

「うん。ありがとう」

ちよつと重いけど、カレヴィはわたしのことを思っていてくれるんだから、そこは感謝しなきゃいけないよね。

カレヴィが侍女長のゼシリアを呼ぶと、彼女は既にわたし付きの侍女を決めてあったらしく、すぐに紹介された。

新しくわたしに付く侍女は、赤毛で水色の瞳、褐色の肌のイヴェンヌ、日本人のそれよりもずっと濃い黒髪黒目、象牙の肌のモニール、白っぽい金髪、緑青色の瞳、白い肌のソフィアと見た目様々だった。

この国は他の国よりもいろいろな見た目の人が多いらしいから侍女もそんな感じな人達になったらいいけれど、これだったら名前も間違っこともなさそうなのでよかったのかもしれない。

侍女達を紹介された後、わたしは自分の居室に戻って、下描きまでしていた漫画のペン入れでもしようかと思っていたけれど、なぜかそれをゼシリア達に止められて、湯殿まで連れていかれた。

まだ寝るまでに時間はあるし、今はいいよと断ったんだけど、「だからこそです」という謎の言葉を受けて、わたしは首を捻る。

そんなこんなでわたしはゼシリア達に洗い上げられ、香油を使ったマッサージも丹念にされて絹の寝間着を着せられた。

「それではおやすみなさいませ」

「ハル力様、頑張ってくださいませ」

……頑張るってなにを？

年若い侍女達から赤い顔で言われた言葉に、わたしは天蓋付きのベッドに腰掛けつつも首を傾げる。

そうしているうちに、侍女達は明朝伺いますと言って寝室を出ていってしまった。

なんだかよく分からないながらも、寝るにはまだ早いし、家から持ってきた漫画でも寝ころんで読むかと、居室に置いてあるそれを取りに行こうとして立ち上がった。

その時、いきなり寝室のドアを開けてカレヴィが現れたのでわたしはびっくりしてしまった。

「ハルカ」

「カ、カレヴィ？ どうしてここに」

まさかとは思うけど、アレをしにきたんじゃないよね？ そうであつてほしい。

「おまえを抱きにきた」

はい——っ！？

嫌な予感的中してしまったわたしは思わず飛び上がってしまった。

「な、なに言つて……、だつてまだカレヴィとは婚約期間中でしょう！？」

カレヴィからなるたけ離れようと後ずさつたわたしは、自分からベッドにダイブしてしまった。

思わず悲鳴を上げたわたしをカレヴィは呆氣にとられたように見ていたけれど、わたしが体を起こす前に手首を押さえつけてそれを阻んだ。

「だ、駄目だつて！ だつて、花嫁は清らかじゃないといけないつて言つてたじゃない！」

必死に足をじたばたさせながら訴えたが、カレヴィはまったく気にしたふうでもなかった。

「夫になる俺なら別だ。……それにこれは花嫁修業の一環でもある」——そんなの、聞いてないよ！！

そう叫ぼうとした途端、カレヴィの唇に口を塞がれた。

「ちょ……、カレ、……ヴィ……ッ」

文句の一つも言つてやろうと口を開くも、その度にカレヴィの深い口づけを受けてわたしは息も絶え絶えになる。

「こんな、急に……、酷いよ……っ」

なんとかそれだけ言つたけど、彼から返ってきたのは容赦のない言葉だった。

「おまえは俺の妃になると決めたのだろう。だつたら我慢しろ」……そう言われると、わたしはなんにも言えなくなつてしまふ。

最終的にザクトアリア王妃になることを決めたのは他でもないわたし自身なんだし。

「……分かったよ」

わたしが諦めて体の力を抜くと、カレヴィは無駄に色気を振りまいてふっと笑った。

けれど、その笑みは経験ゼロのわたしには恐怖でさえあった。

思わず息を飲んでしまったわたしをカレヴィは見下ろすと、いらん宣言をしてくれた。

「いろいろと仕込んでやるから覚悟しておけ、ハルカ」

14話 不機嫌な朝

「……そう怒るな、ハルカ」

少しばかり遅い朝食の席で、カレヴィはわたしにちょっと後ろめたそうに言ってきた。

昨夜は結局合意の上でそういう行為に至ったわけだけど、なぜか起き抜けにまでアレを無理矢理されて、わたしは機嫌が悪かった。

「おまえが思いの外よかったので、つい我を忘れた。すまない」
うるさい、このエロ王。……いや、野獣。

わたしを結婚相手に選ぶくらいだから、アレの方も淡泊なのかと思ったら、実はとんでもなかった。

カレヴィは、恥ずかしがるわたしにさんざんエロいことや言葉責めをし、そしてあるうことが、わたしにまでそのエロいことをするように強要してきたのだ。

「……言っておくけど、わたしは初めてだったんだからね？」

カレヴィは最初はなるべく痛くしないように配慮してくれてたみたいだけど、でもやっぱり初めてだから痛かったし。……まあ、でもそれは仕方ない。けど問題はそれからだ。

カレヴィはなにかたがが外れたしまったようで、わたしは何回もやられてしまった。そしてわたしは、今腰が痛くてたまらない。

「それは悪かったと思っている。しばらくはあの手の無理強いはいはない」

「……なら、いいけど。それにしてもいやに手慣れてたけど、過去にそういう人でもいたの？」

わたしがそう聞くと、カレヴィはちよつとろたえてた。

……カレヴィは美形だし、王様だし、そういう人がいてもわたしは一向に気にしないけど。

「いや、王宮付きの高級娼館からの娼婦としかそういうことはして

いない」

「……へー……」

意外と言えば意外。

まあ、その方があとくされもないのかもしれないけど。

そうか、だからわたしに対してでも高級娼婦相手にするような行動に走ったんだ。

「あれ、普通の姫だったら、びつくりしすぎて泣いてたんじゃない？　いくらなんでも初めてであんなこと強要するとかないでしょ」

わたしの代わりに別の姫がカレヴィの結婚相手となった場合を想定してみても、言ってみる。

うん、結婚に夢を持ってる姫ならあまりの扱いにショックを受けるかもね。

わたしは、夢も希望も持っていない歳だった女だからまだましだけど、それでも初めてであれば酷いと思う。

「……だから、すまないと……、そうだ、ハルカなにか欲しいものはないか」

それまで居心地悪そうな顔をしていたカレヴィが突然思いついたように言った。

ふーん、カレヴィがせっかくそう言うならねだってみようか。ちようど、欲しかったものがあるんだ。

「それじゃ、腕力バーが欲しい」

わたしがそう言つと、なぜかカレヴィの目が点になった。

「……腕、カバー……？」

「漫画描くのに衣装の袖が汚れそうなんだよね。腕まくりしてもいいけど、腕が汚れるのは変わりないし」

わたしの描いている漫画はカレヴィには既に見せてある。

最初カレヴィは漫画特有のデフォルメした描き方に戸惑っていたけれど、すぐにそれに慣れて漫画の読み方について聞いてきた。

基本的には一頁の右から左に読んでいくんだよと言ったらすぐ理解したらしくて、わたしの描きかけの原稿にすいすい目を通していった。……こんなことなら今まで描いた原稿も持つてくるんだったな。

そういう訳でわたしの漫画を読んだカレヴィだったけれど、女らしくないわたしにしては、中身がかなり少女趣味だったので結構驚いていたみたいだ。

人は見かけによらないものだな、としみじみ呟いてた。……失礼な。

ちなみにわたしの描く漫画は、千花に魔法をかけてもらってあるから、こちらの世界の人にも理解できるようになっている。

……本当に千花の魔法は便利だなあ。

わたしがつくづく感心していると、カレヴィがちよつと困った顔をして聞いてきた。

「……そんなものでいいのか？ 首飾りとか腕輪が欲しいとかないのか？」

「ううん、腕力バーがいい。それも木綿で黒くて汚れが目立たないやつ」

わたしがきつぱりはつきりそう言つと、カレヴィは仕方なそうな顔で大きく溜息をついた。

……なんだ、腕力バーじゃいけなかったのかな？ でも当面欲しいものもないし、もしあつても千花が持つてきてくれるし。

わたしが首を傾げながらそう思っていると、カレヴィがちよつと呆れたような顔で言つてきた。

「本当に、おまえの考えることは俺には分からん」

うーん、庶民と王様の考え方の違いは結構大きい、のかな……？
なんだか、それだけじゃないような気もするけど。

15話 非難ごっこ

それからカレヴィは、イヴェン又達に腕カバーをすぐ持ってくるように言いつけると、ソフィアが代表してそれを持ってきてくれた。

——これだよ、これ。

構造は簡単だから、たぶんあるんじゃないかとは思ってたけど、やっぱり異世界にもあったよ、黒い腕カバー。

ちよつと感動しながら装着したら、カレヴィに今着けるのはやめると言われてしまった。

これくらいいいじゃん、けち。

仕方なく腕カバーを外してカレヴィと食後のコーヒーを飲んだら、千花が様子を見にやってきた。

「千花っ！」

昨夜のことを報告しようと千花に駆け寄ろうとしたら、途端に腰に痛みが走ってわたしはよろけた。

「危な……」

「ハルカツ」

バランスを崩したわたしに、千花とカレヴィが声を上げる。

その途端、見えないなにかがわたしの体を支えて、どうにかわたしは転ばずに済んだ。……もしかして、千花が魔法で受け止めてくれたのかなあ。

「はるか、どうしたの？」

瞬間的に千花がよろしてるわたしの傍に移動して尋ねた。カレヴィも椅子から立ち上がって、わたしの傍に寄ってくる。

「あ……、うん。ちよつと、腰が痛くて」

「……腰？」

千花が首を傾げながらもわたしの肩に触れると、さっきまでわた

しを苦しめていた腰の痛みが急になくなった。

「あ、あれ……？」

「治癒魔法を使ったの。それにしてもはるか、腰が痛いってもしかして……」

千花が眉を寄せて言いづらそうにした。

「あ、うん。昨夜カレヴィとそういう事になったんだ」

わたしがそう言った途端、千花がきつとカレヴィを睨んだ。

「……どういことですか？ まだはるかとは婚約期間中でしょう」

千花のその厳しい視線にも特に堪えた様子もなく、カレヴィはこともなげに言った。

「我が国では、王及び王太子に輿入れする花嫁は、婚約期間中に伽の習いをするしきたりがある。俺はそれに従ったまでだ」

「え……」

千花はザクトアリアのその風習を初めて知ったらしくて、愕然とした顔になった。

「は、はるか、ごめん。わたし、この国にそんな風習があるなんて知らなくて。……大変だったでしょう？ ごめんね」

千花がうるたえながらわたしに縋りついて謝ってきたけれど、これは彼女が悪い訳じゃない。まあ、あえて言うとしたら悪いのは――
――。

「うっん、千花が謝る事じゃないよ。結局王妃になるって決めたのはわたし自身だし。だから気にしないで」

「でも……」

わたしは笑って言うてみたけど、千花はまだ申し訳なさそうだ。

……仕方ない。千花は最強の魔術師で忙しいのは分かってるけど、その時間を少しもらってしまおう。

「じゃあ、午後の礼儀作法が始まるまでわたしに付き合ってよ。久しぶりに千花に漫画のアシしてもらおうから。それで今回の件は帳消し。ね？」

わたしがにつと笑って千花の肩を叩きながらそう言うと、彼女は

ちよつとだけ泣きそうになりながら、うん、と頷いた。

「……まあ、俺も事前に言っておかなくて悪かったが」
それまでわたし達の会話に入りづらそうにしていたカレヴィがわたしに謝ってくる。

だからわたしは、ここぞとばかりに言ってやった。

「本当だよね!!」

「……おまえ、ティカ殿と夫になる俺との扱いが違いすぎるぞ」
「そりゃ、千花は幼なじみの友達だもん。昨日今日会ったばかりのカレヴィとは歴史が違うよ。……それよか、カレヴィ執務に取りかからなくていいの？ わたしもいい加減漫画描きたいし、女同士の話もしたいから、もう自分の部屋に戻るね」

わたしはカレヴィの抗議を軽くあしらうと、千花を促して、共同の間から自分の居室へとさっさと移動する。

「おい、ハルカ」

カレヴィがなにか言いたそうだけど、無視。
腕力バーはもらったけど、やっぱりまだカレヴィにはアレのことでいろいろと怒ってるんだよね。

「……ねえ、はるか。カレヴィ王が呼んでるけど」
千花が気遣わしげに言ってくるけれど、いいのいいの、気にしないで。

「それよか、聞いてよ千花。カレヴィったら酷いんだよー!」
わたしは完全にカレヴィをしかとして千花に話しかける。
わたしのあからさまな無視にちよつと呆然としているカレヴィを気の毒そうに見ながらも、モニーカ達三人もわたし達の後についてきた。

——それから。

カレヴィはすごすごと自分の執務室に戻っていき、わたしは昨夜のカレヴィの所業を千花と侍女達三人に暴露した。

「まあ、そんなことが」

「それは酷いね」

「陛下、あんまりですわ」

「女心を解さない方ですのね」

……等々、わたしに対する同情が一心に集まった。

ふふふ、そうでしょ、そうでしょ。

カレヴィったら酷いよね。

それでわたしは下降気味だった機嫌もすっかり治ったけれど、今回女性陣の非難が集中したカレヴィは執務室でちよつといじけていたとかなんとか。

……まあ、でもこれはゼシリアからの聞きかじりなんだけどね。

16話 アシスタント

昨夜カレヴィがわたしになにをしたのか暴露した後、わたしは居室のテーブルに漫画の原稿を広げていた。

ちなみにわたしは腕力バー装備、アシスタントの千花は魔法で防御するから腕力バーはいらないと言って綺麗なドレスの格好のままだ。

「それにしても……、さっきのはるかのカレヴィ王への態度はまずかつたんじゃないかなあ」

千花がペンで枠線引きをしつつそう言ってきたので、ちょっと納得できなかったわたしは反論する。

「だって、あれくらいいしないときつと反省しないよ。カレヴィは王だからあまり強く言う人間もないだろうし」

「まあ、そうかもしれないけれど……。でも、あまりやりすぎると二人の仲に関わるかなって思って。できればはるかとかレヴィ王は仲良くやって欲しいし」

……うーん、そう言われるとなにも言えなくなっちゃうなあ。仕方ない、ここは譲歩するか。

「分かった。わたし後でカレヴィに謝るよ」

確かに、結婚生活が始まる前から問題起こしちゃまずいものね。「うん、そうした方がいいよ」

わたしの言葉に千花も頷く。……それにしても、千花っているいろいろ気遣いの出来るいい友達だなあ。わたしにはもったいないくらい。

「……それにしても、ハルカ様は大した技術をお持ちですね。素晴らしいですわ。わたくしもなにかお手伝いすることができればよろしいのですけれど」

イヴェンヌがふいに溜息をついて言ってきたので、わたしはペン入れをする手を止めてうーん、と考えた。

まったくの初心者でも枠線引きとか消しゴムかけならできるかも。
「……もしよかったら、やってみる？ それじゃ千花、ベタ塗りに変わってくれるかな？」

「うん、分かった」

千花は頷くと、すでにペン入れし終わった原稿を魔法で乾かし、
×印の付いたところを筆で塗りつぶし始めた。

「え……、でもわたくしに出来るのでしょうか。足手まといにならなければよいのですが」

彼女にとっては思ってもいない事態だったらしくて、イヴェンヌがうつたえる。……ちよつと自信がなさそうだ。

そこでわたしは、紙にシャーペンで線を何本か引き、その上をペンでなぞらせて練習させることにした。

「……出来ましたわ！」

千花の隣に座って、しばらく定規とペンで紙相手に格闘していたイヴェンヌは充実感で瞳をきらきらさせて言った。……うお、ちよつと眩しい。若いっていいね。

肝心の枠線引きの出来は……どれどれ。うん、きちんとシャーペンで描いた線の上を一発でなぞれてるし、これなら合格かな。

それでわたしは原稿を一枚イヴェンヌに渡し、枠線引きを開始してもらった。

それに時折、千花の的確なフォローが入り、イヴェンヌは少し緊張しながらも、綺麗に枠線を引いていた。

……ありがと、千花。さすが千花は気が利くなあ。

わたしは千花の存在をありがたく思いながらも、ペンを走らせる。千花は仕事が速いから、おちおちしてられないのだ。

「イヴェンヌばかりずるいですわ。わたくしもお手伝いしたいです」
ソフィアがそう言うと、モニター力も負けじと言う。

「わたくしもハルカ様のお役に立ちたいですわ」

うーん、道具もそんなにないから枠線引きの練習してもらうわけにもいかないし、後は消しゴムかけぐらいしか残ってないな。

……今度元の世界に帰ったときは、もう少し、ペンとか定規とかも補充しておこう。

「……じゃあ、ソフィアは消しゴムかけして。モニーカは悪いけどイヴェンヌとソフィアの分の腕力バー持ってきてくれるかな。あとみんなのお茶淹れて。あ、モニーカの分もね」

わたしがそう言うと、ソフィアはぱっと顔を輝かせ、モニーカはがっかりしたような顔になった。

「ごめんね。モニーカにも明日手伝ってもらうから。ソフィアは、わたしの隣に座って。今から消しゴムかけしてもらうけど、紙を破らないように、文字の書いてあるところだけは残して綺麗に消して

……こんなふうに」

わたしは千花がベタ塗りして乾かしてくれた原稿に慎重に消しゴムをかけて手本を示した。

「分からなかったら、声かけてね」

「はい、かしこまりました」

ソフィアは使命感に燃えた瞳で頷くと、教えた通り綺麗に消しゴムをかけてくれている。さすがに王宮付きの侍女だけあって、仕事が丁寧だ。

「腕力バー、頂いてまいりましたわ！」

そこで、一時わたしの居室から出ていたモニーカが戻ってきて、侍女二人に腕力バーを渡した。

すると、二人はわたしが指示するまでもなく、腕力バーを装着した。

見ると、モニーカも自分の分を確保しているようだ。大事に居室の隅っこに置いていた。

それで、モニーカにお茶を淹れてもらってみんなでほっこりと一

休み。

そこで、今描いている話の前の話の原稿はないのかと侍女達に聞かれたので、わたしは午後の礼儀作法が終わった後、画材の調達を兼ねて家から今までの原稿を持ってくることにした。もちろん、これは千花頼みなんだけどね。

わたしが彼女達にそう伝えたと、「楽しみですわー」とうきうきしながらまた作業に入ってしまった。

「ハルカ様、これで完成なのですか？」

ふと、消しゴムかけまで終わった原稿を眺めていたモニターが聞こえてきた。

「ああ、まだ。トーン貼りとか写植とかが残ってるよ」

わたしが簡単にトーン貼りと写植の説明をすると、侍女三人が感嘆したように溜息をついた。

「ハルカ様は随分と細かい作業がお得意ですね」

「絵もお上手ですし」

「お話も素敵ですわ」

「……ありがとう」

侍女三人が口々に褒めてくれるので、わたしはちよつと照れながらも礼を言った。

いやー、恥ずかしいけど、やっぱり褒められるのは素直に嬉しいね。

それに、三人の新たなアシスタント候補が増えたことも嬉しいし。わたしがそう言ったら、千花にすかさず突っ込まれた。

「……はるか、王の婚約者付きの侍女だよ。そこは間違えちゃ駄目だよ」

う、そうだった。彼女たちは王宮付きの侍女だった。だとしたら、そうそう荒使いはできないよなあ。

わたしがそう思っていたら、ソフィアが言った。

「まあ、ティカ様、わたくしは侍女兼アシスタントがよいですわ」

そうするとイヴエンも言う。

「わたくしもそれがよいです。なんだかおもしろそうでわくわくしますわ」

「わたくし、ゼシリア様に正式に許可をいただきますわ。そうすれば、なにも問題ないでしょう」

モニーカもわたしや千花にっこり笑いかけながら言う。

……この三人、マジだよ。

マジでわたしのアシやる気だ。

わたしは感動しながら、千花はちょっと呆れながら三人を見ていた。

でもまあ、これで効率が上がって趣味のサイトの更新頻度も上がってめでたしめでたし、なのかなあ？

けど、その前にカレヴィの花嫁修業という難関が立ちふさがってるけどね。

17話 仲直り

千花や侍女達と和気あいあいとしていた時は過ぎて、今はお昼。千花をお昼に誘ったけど、ちょっと用があるからという理由で断られちゃった。……しょぼん。

「それより、はるかにはカレヴィ王に早く謝ったほうがいいよ」という千花の言葉を受け、わたしは侍女経由でカレヴィに昼食の誘いをしてみた。

それに対して、カレヴィはすぐにお昼の用意してある共同の間までやってきた。

「先程は俺を無視していたのに、どういう了見だ」

わたしと向かい合って座ったカレヴィは幾分機嫌悪そうにしていた。

「……ありやゝ……。やっぱりわたし、彼の機嫌損ねちゃったんだ。いや、それはやりすぎたよ。ごめんね」

慌ててわたしがカレヴィに頭を下げると、彼は不機嫌そうに言うてきた。

「おまえがそんなに簡単に自分の考えを翻すと言うことは、おおかたティカ殿に諫められでもしたのだろう」

うつ、カレヴィ鋭い。

思わずわたしが絶句していると、彼はふん、と皮肉げに笑った。

む、感じ悪いぞ。

「……千花にカレヴィと仲良くやってほしいと言われたのは本当だよ」

「おまえはティカ殿の言うことなら聞くのか」

なんだ、やけにつつかかってくるなあ。

「だって、千花の言うことはいちいちもっともだし。これから嫌でもずっと顔を合わせることになるんだから、少しはわたしも譲歩し

なきやと思っただ」

「……譲歩か。まあ、いい。食事が冷める。早く食べる」

わたしはカレヴィに大皿の料理を取り分けてもらったので、慌ててありがとうとお礼を言った。

「……ああ。そういえば、おまえは昨夜のことを侍女にまでばらしたのだな」

わたしはそれで、フォークにすくっていたポテトグラタンを皿にぽとぽと落としてしまった。

うお、思い切りばれてるよ！

ふと周りを見ると、わたし付きの侍女達は少々心配そうに、カレヴィ付きの侍女達は興味津々にわたし達の様子を窺っている。

「……い、いけなかった？」

つい、興奮してその場にいたみんなに暴露しちゃったけど、やっぱりまずかったかな。

「いけないに決まっているだろう。そんなことを公にするやつがあるか。……おかげで俺は女心の分からない王というそしりを受ける羽目になったぞ」

「……事実じゃない」

わたしが小声で言うつと、カレヴィにじろつと睨まれた。

「なにか言ったか」

「う、ううんっ、なんでもない！」

うるたえたわたしは、慌ててポテトグラタンを口にする。おいしいけど熱い。

わたしはそれでちょっと涙目になりながらも、カレヴィに謝った。

「ご、ごめん。気に障ったのなら謝るよ。だから機嫌直して」

「……まあ、いい。おまえは今度からそのことを周りにやたらと口にするな。慎みがないと思われるぞ」

「あ、うん。ごめんなさい」

それでわたしはちよつとしょんぼりしてしまった。

確かに、怒りのままにアレのことを暴露してしまったのははした

なかったかも。

わたしがずーんと落ち込んでいると、カレヴィは料理が冷めるから早く食べると再度口にした。

それでわたしは、酸味の効いたソースがかかった鳥の唐揚げをナイフとフォークで切り分けて口にする。そうしたら、これからのこととかじわじわと不安になってきた。

「わたし……、王妃失格かな？」

美人じゃない上に憤りもないし、カレヴィがいくら適当に決めたとはいえ、愛想を尽かしても不思議じゃない。

せつかく、職場の人達にも祝福されたのに。

おとんとおかんも、さぞがっかりするだろうな。

……自業自得とはいえ、ちよつと泣きそうだ。

「……夜の習いまでしているのなら、そう簡単に婚約は解消されない。安心しろ」

カレヴィにそう言われて、わたしはなんだか泣きたくなくて涙をぼろぼろとこぼしてしまった。

……ああ、とりあえずは大丈夫なんだ。よかった。

「ハ、ハルカ、なぜ泣くんのだ。俺はそんなにきつく言ったか？」

ちよつと慌てたように言ってくるカレヴィに、わたしはうつんと首を横に振ると溢れてくる涙をハンカチで拭いた。

「……恐れながら陛下、ハルカ様は慣れない環境におられるのですから、あまり不安を煽られないようにお願いいたします。淑女の慎みについてはわたくしからもハルカ様にお伝えします故、なにとぞ広いお心で見守りくださいませ」

代表するように侍女長のゼシリアがそう言うと、周りにいた侍女達も頷いた。

「……まいったな。ハルカはこの短期間のうちに侍女達を掌握したのか。やりにくくてかなわん」

そう言いながら、カレヴィはソースのかかった茹で野菜をフォ-

クに刺して溜息をつく。

う、うーん。掌握とかは違うと思うなあ。

いうなれば、女心の分からないカレヴィの相手のわたしに対する同情心からだと思うけど。

でもわたしは、あえてそれをカレヴィには伝えなかった。

おまえに泣かれると調子が狂う、と言って目元を染めて不機嫌そうに食事を進める彼がちょっとおもしろかったからだ。

……うーん、こうしてみるとわたしって結構いい性格してるかもしれない。

18話 礼儀作法とその他諸々

カレヴィとの昼食を終えて迎えた、礼儀作法の初授業。

ああ、一番恐れていた時間が来ちゃったよ。

千花からも、礼儀作法の先生は厳しいものと覚悟しておいた方がいいよ、と言われていたので内心どきどきだ。

でも実際に現れたのは上品で優しい感じの先生だった。名前はシレネだって。

「それではハルカ様、立ったまましばらく静止してみてください」
そうシレネ先生に言われたので、わたしはその通りにしてみる。
すると、シレネ先生の細かいチェックが入った。

「ハルカ様、頭が揺れてます。もう少し我慢してください」
そう言いつつ、肩の位置やら、立ち方やらの矯正が入る。

……あ、さつきよりは大丈夫な感じ。

「……はい、今の姿勢がすべての基本ですから忘れないください
ね。……それでは略式の礼の仕方に入ります」

略式の礼と言われて、わたしはこっちの礼の仕方をぜんぜん知らないことに気がついた。

教えてもらった略式の礼は、膝を軽く降り曲げつつスカートの両側を摘んで、小首を右に傾げるというもの。ちなみにこれは大陸共通のものだそうだ。

わたしはそれを何度か繰り返した後、ようやく合格点をもらえた。

「それでは少し休憩にいたしましょうか」

それですっかりわたしは安心してしまつて、いつも通りテーブル席に腰掛けたら、シレネ先生から座り方のチェックが入った。

う、これも礼儀作法の一環なんだね。

その後も、カップの持ち方やらなんやら指摘されて、それも正す

ように言われた。

……うーん、シレネ先生は礼儀作法の教師にしては優しい方なのかもしれないけれど、やっぱりチェックは厳しいや。

そして休憩という名の礼儀作法の時間がすぎて、本日のシレネ先生の授業は終了となった。

「今日習ったことの復習を忘れないでくださいね」

「はい、ありがとうございました」

シレネ先生の礼に、わたしは習った略式の礼で返す。

わたしはシレネ先生を笑顔で見送った後、こっそりと溜息をついた。

一応、あつちでは事務職で接客することもあったから、そういうセミナーを受けたことはあるんだけど、やっぱり一回二回の付け焼き刃じゃ駄目か。

そこで、テーブルマナーや礼の復習はカレヴィに見てもらいながらやろうとわたしは決意する。……王であるカレヴィなら作法に関しては完璧だろうし。

そんなことを思いつつ、長椅子に座ってくつろいでいたら千花がやってきた。

これからあつちの世界で足りない画材の買い物があるのだ。……

千花、お世話になります。

ちなみに、千花に礼儀作法の先生は割と優しくかったと言ったら、ずるーい、と返された。なんだ。

……ひょっとしたら、千花の礼儀作法の先生は余程厳しかったのかもしれない。

わたしは百均と画材屋で画材をしこたま買い込んだ後、スーパーに寄ってスナック菓子やお煎餅を千花と二人でたくさん買った。

「向こうはお菓子って言ったら、甘いものだもんね。だから時々塩気の利いたものが無性に食べたくなるよ」

千花のその言葉に、確かにあっちでは甘いものしか出てこなかったなと思り返す。

とりあえず、今日買ったお菓子は明日のお茶受けに出してもらいうことにしよう。

カレヴィやイヴェン又達も珍しがるだろうな。ふふ。

わたしは大量の買い物袋を下げ、ザクトアリア城に戻り、そこで千花と分かれた。千花、今日は（も？）ありがと。

「買い物というのは随分と時間がかかるのだな」

わたしが城に着いたのは既に晚餐の時間に近くて、カレヴィが共同の間でわたしの帰りを待っていた。

「ごめんね。目的のものを買ってすぐ帰ってきたつもりなんだけど」カレヴィは王様だから、女の買い物にどれだけ時間がかかるかなんて分からないだろうな。

ウィンドーショッピングなんてうっかりしなくてよかった。……

まあ、以前からあまりしてなかったけど。

とりあえず、わたしが帰ってきたことで晚餐ということになり、わたしはカレヴィに礼儀作法の授業のことについて聞かれたので、その内容をざっと説明した。

「千花に礼儀作法の先生は厳しいから覚悟しておいた方がいいって聞かされてたからどうなるかと思ってたけど、実際は優しい先生でよかったよ」

ステーキを切り分けながら笑顔で言うと、カレヴィがとんでもないことを言いだした。

「そうか。……おまえにはもっと厳しい教師を付けた方がよかったか？」

「え、えっ？ いや、今のままで結構です！」

「……冗談だ」

見ると、カレヴィはおかしそうに口元を押さえている。

うう、おもしろがられてるよ、わたし。ひょっとして、これは朝の仕返しかな？

まあ、それに関してはわたしにかなり非があるので強くは言えない。

……実はわたし、カレヴィにとんでもない借りを作っちゃったんじゃない？

ふと浮かんだ恐ろしい考えを振り払って、わたしはカレヴィに礼儀作法の復習のことについて言ってみた。

「そ、それで、先生に復習してくださいって言われたんだ。だから、カレヴィ後でわたしがきちんと出来ているか見てほしいんだ」

「ああ、いいぞ。しっかり見てやる」

わたしのそのお願いにカレヴィは笑顔で快諾してくれた。

うーん、カレヴィ、いい人だ。……夜は野獣だけど。

「その代わり、おまえには夜の方も頑張ってもらうぞ」

……結局そのオチか！

いい人と思っただのは撤回。カレヴィは王様の皮を被った野獣だ。

「……なら、侍女達に見てもらうからいいよ」

「礼儀作法なら俺が見た方が確実だぞ。遠慮するな」

そんなこんなでカレヴィに押し切られたわたしは、礼儀作法の復習を彼に見てもらうことになって、確かにその人選は間違ってたなかつたんだけど。

「……約束は守ってもらうぞ」

とかなんとか言われて、結局わたしは夜のカレヴィとのアレを何回も付き合わされることになってしまったのだった。

19話 喪女と野獣

——外が明るい。

「……ハルカ、朝だぞ」

耳元でゾクゾクするような美声が響く。

こないない声の知り合いなんかいたっけ、とわたしは寝起きの働かない頭で考える。

ふと、隣で人が起き出す気配がした。……ああそうだ、カレヴィだ。

段々頭が冴えてきたけど、わたしはシートにくるまったまま彼を観察する。

浅黒い体は引き締まっていて、すごく綺麗な筋肉の付き方をしていた。

腹筋とか割れてるし、ああ、今すぐカレヴィをデッサンしたい。

「……カレヴィ」

自分で思っていたよりもけだるい声が出て、それにカレヴィが反応する。

「なんだ」

「カレヴィって、いい体してるよね」

褒めたのにカレヴィは目をむいて絶句。

……あれ？ わたしはなにかいけないことでも言っただろうか。

「……おまえは俺を誘っているのか？」

「えっ、えっ？ 違うよ、綺麗な体だからデッサンさせてもらおうと……んうっ」

皆まで言わないうちにカレヴィが覆い被さって、わたしに口づけてきた。

彼の舌がわたしの唇の間から侵入してきて、逃げようとする舌を捉えられた。

「ん……っ、ちが……、ご、かい……っだって……ば」

口腔内を犯されて頭がぼうつとしてくるけど、それでもなんとかそう言った。

このままでは二日連続で朝からされてしまう。

「……そうだとしても、もう遅い。ハルカ、覚悟するんだな」

カレヴィはふつと笑うと、今度は唇に軽いキスをしてきた。

ええー、嫌だよ朝っぱらから。

そして、カレヴィはわたしにかかっていたシーツをはぎ取ると、嫌がるわたしを無理矢理襲った。

それからしばらくして、わたしはカレヴィと一緒に共同の間で朝食を取っていた。

「……もう、信じられない。嫌だって言ったのに」

二日連続で朝からやられてしまったわたしは、またも不機嫌だった。

「すまない。ハルカがそんなに嫌だとは思わなかったんだ」

実はカレヴィは、わたしが誘ったものの、照れて嫌がっている振りをしていると思いこんでいたらしい。

「それに、なんで朝っぱらからなの？ 夜さんざんしたじゃない」

かったるいし、また腰も痛い。

礼儀作法の時間までに痛みが引けばいいけど。

加減ということを知らないのか、この男は。

「……それは朝だからだ」

「……はあ？」

カレヴィの気まずそうな言葉に、わたしは一瞬目が点になる。

「朝……？ ……ああ、分かった。そういうことね」

そこでようやく、カレヴィの言いたいことが分かったわたしは納得して頷いた。

でもアレって放っておけば元に戻るんじゃないの？ わざわざわたしとやることもないのに。

「……そんなに持て余してるなら、娼館の人を呼んで相手してもらったら？ いくら花嫁修業とはいえ、毎日こんな調子じゃわたしの体力が持たないよ」

なにせわたしは、特に運動もしていないただのオタクな女なのだ。それに対して、カレヴィはちよつとむつとしたように言い返してきた。

「おまえという婚約者がいるのに、そんな不実な真似が出来るか」

……これ、聞く人によつちゃ、感動ものの台詞なんだろうな。

現に部屋の隅に控えていた年若い侍女達がきやあつ、と嬉しそうな声を上げている。

だけどわたしはそれに動じることもなく、焼きたてのパンにバターを塗っていた。……ごめんね、こんな枯れた女で。

でもそうになると、こんな毎日がこれからも続くってことだね。頼むから程々にしてくれないかなあ。

「……そういえば、こういうことしてて婚約期間中に子供が出来たりしないの？ それって、あんまり外聞がよくないような気がするんだけど」

わたしは常々聞こうと思っていた質問をカレヴィに投げかけた。

「おまえは知らなかったのか？ この期間中は俺が避妊の薬を飲んでいるから、子は出来ない」

……なんと。

初めて知らされる事実には私は目を見開いた。

カレヴィが言うには、この期間は婚約中の二人のお楽しみ期間でもあるんだって。……でも、主に楽しめるのはカレヴィのような気がしないでもないけど。

「ふーん、そうなんだ。まあ、朝からこんな話題もなんだし、もうやめるね」

わたしがそう言ったら、カレヴィは明らかにほっとしたような顔になった。

カレヴィ、昨日の再現になるとでも思っていたのかな？ でもいくらわたしだって、同じ過ちは繰り返さないよ。

わたしはふわふわのオムレツを味わいながら、そんなことを考える。

「ハルカ、この食事が終わったら庭園に散策にでも行かないか？ 確か王宮の外を見たことはなかっただろう」

……そう言われてみれば、見たことない。

カレヴィが急にこんなことを言い出したのは、朝のアレの罪滅ぼしのつもりなのかなあ。

でも、せっかくカレヴィがこう言ってくれてるんだし、断る理由もない。

それでわたしが頷くと、カレヴィは楽しみにしておけ、と爽やかに笑った。

20話 思わぬ副産物

カレヴィに庭園に誘われたのはいいんだけど、わたし、腰が痛いことをすっかり失念してたよ。

それで、そのことをカレヴィに言ったら、すぐに王宮付きの魔術師を呼んで治癒魔法をかけられた。

「ティカ様ほど完璧にはいきませんが、これでいくらかは痛みが引かれると思います」

「ありがとうございます」

その魔術師に言われた通り、少し痛みは残るけど、だいぶ楽になった。これなら庭園に行けそうだ。

ちなみに治癒魔法って言うのは、完全に治癒させるものじゃなくて、正式には「治癒させる為の魔法」って言うんだって。

千花みたいに完璧に治癒させるのは、むしろ一般の魔術師的にはものすごく非常識な部類に入るらしい。

「……ですが陛下、ハルカ様にあまりご無理なことをなされないようにお願いいたします。治癒魔法もあまり頻繁には使えません故」カレヴィに苦言を呈した魔術師曰く、痛いからってあまり治癒魔法に頼っていると、人体本来の治癒能力が鈍ってくるからなんだそうなの。

……それなら、仕方ない。次からは湿布とかで我慢しよう。本当はカレヴィが自重してくれるのが一番いいんだけどね。

「……ああ、分かった。一応頭に入れておく」

「一応じゃなくて、ちよつとは自重してよね」

本当に分かってるんだかどうか分からないカレヴィにわたしは文句をつけたけど、ここまで言っても夜には忘れられてそうだよなあ。

ああ、と言ったカレヴィの目が泳いでるし。

「……まあ、それはともかく庭園まで移動させてくれ。ハルカの体

のこともあるしな」

む、ごまかしたな。

けど、なんでカレヴィがわたしの体にそこまで執着するのか本当に分からない。

カレヴィに命令された魔術師は頷いて、わたしとカレヴィ、それにお付きの者達を庭園の入り口まで移動させた。

カレヴィに案内されたのは、南国ムード溢れる庭園だった。

南国の植物が茂っているそばに人工の川やら噴水が絶妙に配置されていて庭園自体が涼しくなるように配慮されているみたいだ。

それでも、快適な温度だった王宮内と違ってここは少し暑い。

「ちよつと暑いね」

額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながらそう言つと、カレヴィはいつもと変わらない涼しい顔で肩を竦めた。

「この国の気温はこんなものだ。……城の中は魔術で快適な温度に保つてある」

ふーん、常時クーラーが作動しているようなものか。

こんな快適な環境で趣味に浸れて、最強の魔術師が友達で、王の婚約者としてみんなにかしずかれてる。

……こう考えるとわたしがつくづく恵まれてるよなあ。

元はただの一般庶民のわたしは、ザクトアリアの国民に対してちよつと罪悪感を感じてしまう。

それでわたしが少し溜息をついてると、カレヴィが「どうした」と聞いてきた。

わたしがさっきの自分の考えをカレヴィに話すと、彼はわたしの肩を抱き寄せて笑った。

「おまえが気に病むことはない。おまえは王妃の務めを果たすこと

だけ考えていればいい」

「……うん」

王妃の務めっていったら、まず子作りだね。カレヴィがあの調子だったら、結婚してすぐできるかなあ。できるといいな。……ちよつと大変だけど。

そんなことを思いつつ庭園を見回していたら、巨大な黄色い房が垂れ下がっているのが目に入った。

……これって、もしかしてバナナ？

付いてきた庭師の説明によるとやつぱりバナナで、鑑賞用に植えてあるそうだ。でも本来は食用の品種なので食べられるんだって。

「へえ……」

わたしは食べごろサインの黒い斑点、いわゆるスイートスポットの出ているバナナを房から一本もぐと、皮を剥いて食べてみた。

うん、濃厚な甘みがあつてとってもおいしい。

にこにこしながらバナナを食べるわたしをカレヴィが呆気に取られて見ているけど、なにか変だったかなあ。

「おいしいよ」

わたしはバナナをもう一本房からもいでカレヴィに渡すと、彼は仕方なさそうに苦笑した。

「……ああ、確かにうまいな」

わたしと同じようにバナナにかじりついたカレヴィもちよつと驚いたように瞳を見開いた。

「でしょ？ これ少し持つて帰っていいかなあ」

わたしがそう言ったら、庭師が気を利かせて房の一部を切り落としてくれた。

「ハルカ様、よろしかったら他にも果物がありますよ」

庭師はわたしがバナナをおいしいと言ったことが余程嬉しかったらしく、パパイヤやアップルマンゴーなんかを山ほど取ってくれた。ふふふ、庭師の人、気が利きすぎで嬉しいぞ。

とりあえず、これは今日の食後のデザートにしよう。

でも、ちよつと量が多いかなあ。まあ、後でモニー力達や近衛兵に分ければいいか。

にやにやしながら大量にゲットした南国フルーツを見ていたら、カレヴィがちよつと呆れたように言った。

「おまえは庭園に散策に来たのか？ それとも果実狩りに来たのか？」

「え？ もちろん散策に来たんだよ」

思わぬ副産物で、果実狩りもできたけどね。

21話 見学希望

とりあえずゲットした南国フルーツは厨房に届けてもらって、残った分を今いるみんなに分けることにした。

そして引き続きわたしはカレヴィと南国ムード溢れる庭園を巡った。

よく見ると庭園には色鮮やかな鳥達もいて、それに負けない花々と相まってとても素敵だった。

うーん、こういうのを見ると、本当にザクトエリアが熱帯性の気候の国なんだなあって実感が湧いてくる。

そして、カレヴィに次に案内されたのは、薔薇の花とかが咲き乱れる庭園だった。

「あ、涼しい」

ここはさつきと違って魔法が効いているのかな？

そう思ってたら、カレヴィがそれを肯定してくれた。

「ああ、ここは城と同じような気温になっている。花の管理にはもっと複雑な魔法を使っているらしいが」

そう言われてみれば、この庭園には薔薇の花の他、いろいろな季節の花が咲き乱れていて、桜まで咲いている始末。……いや、綺麗だけどさ。

薔薇と桜と一緒に咲いてるのは、日本人の感覚からしたら、ちょっと異様に見える。

それを直接言うのはなんだったので、濁しつつそれを伝えたら、カレヴィはそういえばおまえの国には四季があるのだったな、と肩を竦めた。

「この庭園は、ガルディアのものを模して作ってある。あそこは一年中春だからな」

へえ、千花がいる国ってそんななんだ。

それにしてもこの世界の気候ってどうなってるんだろ。まさにファンタジー。

「過ごしやすそうだね」

人が住むには少々暑いザクトアリアの王であるカレヴィはどこか憧憬をこめた瞳で頷いた。

「ああ、そうだろうな。ガルディアは大陸一の魔法大国で教育体制も整っている。おまけに特出した魔術師が二人もいる。大陸中の人間が移住したいと思っている国だろう」

「ふーん、こここの大陸の人には憧れの国ってことかあ」

「それにガルディアは魔術師団もさることながら、騎士団が近衛含めて三つもある。……ガルディアは魔法大国と言われているが、他の軍備も群を抜いている」

騎士団が三つ！？

騎士が出てくる漫画を描いているわたしは、思わずその言葉に反応してしまった。

「えっ！？ そうなの？ だったらぜひ、その騎士団を見学してみたいなあ」

うまくいけば漫画のネタになりそう。

カレヴィがあんまり褒めるので、かなり興味を引かれてそう言ったら、彼にがしつと肩を捕まれた。

ちよ、ちよつと痛いよ。

「駄目だ」

「なんでよ」

カレヴィの上からの言葉に、わたしは思わずむっとして言い返す。「おまえは俺の婚約者なんだぞ。いずれ王妃になる者が気安く他国に出かけるな」

う、まあ、それを言われちゃうと苦しいけど。

「じゃ、じゃあ変装して行っていくのはどう？ これなら婚約者ってばれないでしょ？」

「あそこの王弟は鋭いぞ。もしばれたらどうする」

その王弟って人は怖い人なのかな？ 弱味を握られると国として後々困るってこと？ うーん、それはまずいかも。

……でも行きたい。

「なら、こっそり行けばいいじゃない。……千花がいればどうにかなるって！」

困った時の千花頼み。……千花にはいい迷惑だろうけど。

「……おまえはティカ殿、ティカ殿と……まあ、いい。騎士団と言えば聞こえはいいが、要はむさい男の集団だぞ。そんな中に俺の婚約者を放り込む真似ができるか」

……さっきは褒めてたのに、今度はむさいときたか。

カレヴィは強硬に反対するけど、その理由、狼の群に羊を送り込むみたいな例えだな。

カレヴィ、見学するくらいで大袈裟すぎる。

「だから千花がいるから大丈夫だって！ 紹介くらいしてもらっても別にいいじゃない。減るもんじゃなし」

「減る」

なんだその答えは。お子様か。

「けーち」

対するわたしも随分と大人げない反応で返してしまった。

しばしわたしはカレヴィと睨み合う。

やがてカレヴィがわたしから目を逸らさずに言った。

「いくらティカ殿がいたとしても、駄目なものは駄目だ。どうしても行きたいと言うなら俺を連れていけ」

「ええ！？」

わたしはびつくりしすぎて思わず飛び跳ねちゃったよ。

王であるカレヴィがついてくるって、いったいどういうこと？

「やだよ、そんな大袈裟にするの。そんなことしたら、いろいろとめんどくさいじゃない」

「なら諦める。それ以外は認めん」

うつ、そんなあ。

カレヴィ頑固そうだし、騎士団取材は無理なのか。

……しかたない、千花に騎士団のことを聞くだけにとどめとこう。わたしががつくりしていると、カレヴィは良心が咎めたのか、「後でおまえの部屋にガルディアの騎士に関する本を届けさせる」と言ってきたけど、わたしが会いたいのは生身の騎士なんだよ。

わたしがそう言ったら、カレヴィにすかさず反対された。

「生身は駄目だ、生身は」

「……結局、カレヴィはわたしが生の騎士に会うのが嫌なわけ？」

なんとなく、カレヴィが国とかそういうレベルで言ってる訳じゃなくて、実はまったくの個人的な意見だったように聞こえたので、わたしは彼に突っ込んでみた。

すると、カレヴィは瞳を見開いてから、ちよつとろたえてた。

「……まあ、そうかもしれないな」

なんだ、その曖昧な言い方は。はつきりしないなあ。

でも、庭園から帰ってきたら、早速部屋にガルディアの騎士の本が届けられていて、わたしはカレヴィの行動の早さに思わず舌を巻いた。

なにがカレヴィをそこまでさせるんだ。

せつかくだから読むけど。

……ああそれにしても、生の騎士見たかったなあ。

22話 逆鱗に触れたかもしれない

「え……、今日礼儀作法の授業ないの？」

わたしは侍女長のゼシリアから、礼儀作法の中止の知らせを聞いてちよつと驚いた。

カレヴィもみつちりやると言っていただけに、午後のその授業は当然あるものだと思っていたのだ。

「本日はハル力様の花嫁衣装のために、急遽時間を取らせていただきました。本来でしたら、もっと早くに取りかかるのですが、陛下からの婚礼のお話も急なことでした故」

「あー……そうだね」

言われてみれば確かに衣装は緊急になんとかしなきゃいけないわ。王妃ともなれば、既製のもので済ますってわけにもいかないだろうし。

言われて気づくわたしも女としてどうなんだ。

そんなわけで、午後からは花嫁衣装の採寸と仕立ての打ち合わせが予定に入ることになった。

うーん、花嫁衣装とか聞くと、ぐつと現実感が出てくるなあ。なんかどきどきしてきた。

「ハル力様はゆったり構えられておられればよいのですわ。なにも心配なさることはありません」

わたしが家から持ってきた原稿を読みながらイヴェンヌが微笑んだ。

「う、うーん、でも気持ち的に焦るというか」

落ち着かない気分でペン入れしながらわたしがそう言うと、梓線引きを練習中のソフィアとモニーカも微笑む。

「まあ、ハル力様が焦られることなどなにもありませんわ。陛下に愛されておいでなんですもの」

モニーカのその言葉に、思わずわたしの手元が狂った。

うお、危ない。もう少しで線が歪んじやうところだったよ。

とっさにペン先を原稿から離れたことが功を奏して大事には至らなかった。

「な、なにそれ。いつの間にそんな話になってるの？」

わたしは急遽決まった花嫁だとみんな知ってるはずだぞ。愛とか全然関係ないから。

「庭園で、陛下はティカ様とガルディアの騎士に嫉妬なされていたではありませんか」

「え……」

ソフィアに言われて、わたしは瞳を見開いた。

それでペンを置いてしばし庭園での出来事を思い返してみる。

そういえば「おまえはティカ殿、ティカ殿と」とか、騎士に会いたいって言ったら「生身は駄目だ」とはカレヴィに言われたな。

あれって嫉妬だったんだろうか。

……うーん、でもカレヴィのあれは、ただの執着じゃないの？

わたしの体に対する執着みたいな。

その証拠にアレの時以外キスしてこないしな。……これってわたしに愛情がないことの最たるものじゃない？

そんなことを思ってたらず突然部屋にカレヴィが現れた。

「ハルカ」

……そういや、カレヴィいつもわたしの部屋に入るときノックして来ないな。

「カレヴィ、今度から突然入ってくるのはやめてよね。共同の間じゃないんだからノックくらいしてよ」

わたしは文句を言いながらも椅子から立ち上がってカレヴィを迎える。

「おまえは妃になる者だ。それくらいいいだろう」

「駄目」

むうっとわたしが睨んだら、カレヴィは仕方なさそうに小さく溜息をついた。

「……分かった。次からはそうする」

「うん、そうして。……で、どうしたの突然」

テーブルの上は散らかっているの、応接セットの方に座ってもらおうと思ったけど、カレヴィは動かない。

どうしたんだろと思って見ていると、やがてカレヴィが言った。

「いや、おまえに謝ろうと思ってな。ゼシリアに言われるまで婚礼衣装のことをすっかり忘れていた。すまない」

「わたしも衣装のことなんて全然思いつきもしなかったよ」

自分のことなのにね、とわたしは笑って言うと、カレヴィもほっとしたように笑った。

「衣装の手配をしたゼシリアには感謝だな」

「そうだね」

話がひと段落すると、今までわたし達を見守っていた侍女達が嬉しそうに話しかけてきた。

「まあ、やはりお二方は仲がよろしいですわ」

「先程陛下は嫉妬までされてましたものね」

「嫉妬……？」

一瞬カレヴィがなんのことだというようにわたしを見た。

だ、だから違うんだって！

慌ててわたしが彼女達の口を閉じさせようとする前に、ソフィアが高らかに言ってくれた。

「陛下は、ティカ様やガルディアの騎士に対してされておられたではないですか。ですからわたくし達、ただいまハルカ様に『陛下に愛されておいでですね』と申しておりましたの」

思ってもいない言葉だったのか、呆然とカレヴィがわたしを見つめる。

わたしは顔に血が急激に集まってくるのを感じた。

うわあああ、すごい居たたまれない。

だって、それは三人の勘違いなのに！

もしかしたらカレヴィ、わたしのことを自意識過剰だって呆れて

るかもしれない。

「そ、それは違うつてわたしは分かってるから！ カレヴィがそんなふうになんかわたしを思うわけじゃない！ わたし達は政略結婚以外の何物でもないよ？ その証拠に、カレヴィは寝室以外でキスしてこないし！ わたしもカレヴィのことはなんとも思っていないから！」

一気にそこまで叫ぶように言って、わたしを息を切らせた。

「……口付けしてほしかったのか？」

なぜか怖いくらい無表情になったカレヴィからとんでもない言葉が出てきたことで、わたしは自分が余計なことを口走ったことに気づいた。

慌てて否定しようとしたけれど、わたしはカレヴィに腕を引っ張られて、次には彼の腕の中にいた。

そして、無理矢理上を向かされると、カレヴィの口づけが唇に落とされる。

「ん……うっ」

人前でキスされるという異常事態に対して、わたしはなんとかカレヴィから逃げだそうとしたけれど、彼はそれを許さずに益々深く口づけてくる。

やがて膝の力が抜けて立っていらなくなると、カレヴィはわたしの膝裏を浚い、抱き上げた。

「――邪魔をするな」

「は、はい……」

侍女三人がカレヴィの言葉に真っ赤な顔で頷く。

彼女達が息をのんで見守る中、カレヴィは真っ直ぐに寝室へと向かっていった。

えええ、なにかカレヴィ怒ってるみたいなんだけど。

わたし、なにかまずいこと言っちゃったのかなあ。

それはともかく、わたしはこれからどっとなっちゃわけ!?

23話 嫌がらせ

わたしはベッドの上にドサリと少々乱暴に降ろされると、カレヴィがのしかかってきた。

「カ、カレヴィ、落ち着いて、ね？」

わたしはなんとかカレヴィの怒りを鎮めようと必死でそう言うけれど、彼は無表情のままわたしを見下ろした。

「あ、朝したし、そういうことしないよね。そうでしょ？」
ぜひともそうであってほしい。

「カレ……ッ、んん……っ」

わたしは再びカレヴィに唇を塞がれて、思わず身を擦る。

カレヴィはそのままわたしの首筋に唇を移動させて、強く吸い上げた。

「……やつ、だめっ」

そんなことされたら、痕が残ってしまう。

わたしの抗議にもカレヴィは耳を貸さず、鎖骨から胸元にかけて花びらのような痕を散らしていく。

「やだ……！ 今日、衣装の採寸があるのに、こんなことやめてよ！」

そのことはカレヴィも知っているはず。……もしかしてこれ、わざと？

カレヴィはそれには答えない。

間違いない、これは絶対にわざとだ。

カレヴィの手が衣装の裾を乱し、太腿を伝う。もう片方の手はわたしの胸元に手をかけ、それを一気に引き下ろした。

「やだああっ！」

わたしは拒絶の叫びを上げたけれど、カレヴィには聞き入れられず、結局は彼にされるがままになった。

わたしはあれから、カレヴィに体中いたるところにキスマークをつけられた。そしてそれは、かなり際どいところまで及んだ。

それからまた彼にされてしまったわたしは、けだるい体をベッドから起こした。

……衣装の乱れはある程度カレヴィが整えてくれたみたいだ。

……けどなんで、こんな時に嫌がらせみたいなのをするの？

わたしはそこまで彼の気分を害するようなことを言っただろうか。わたしがベッドの上で呆然としていると、侍女達がノックして現れて、わたしを湯殿まで連れていく。

「あまり時間もありませんし、急ぎませんと」

イヴェンヌ達はわたしの体に散っているキスマークを見てちよつと眉を寄せたけれど、手早くわたしをお風呂に入れてくれた。

「……ねえ、この痕、治癒魔法かなにかで消えないかな」

お風呂からあがったわたしはカレヴィに付けられたキスマークを指し示して、モニターに聞いてみた。

ようはこれって内出血なんだし、治癒魔法なら治るんじゃない？すると彼女は、申し訳なそうに謝ってきた。

「ハルカ様、申し訳ありません。それは陛下から禁じられております」

「え……」

信じられないことを聞いて、わたしは思わず呆然とした。

……なにそれ、それって、キスマークを消すなこと？

「じゃ、じゃあ、ファンデーションかなにかでごまかして……」

「それも陛下から禁止令が出ております。痕を隠させるなど」ソフィアも困ったようにわたしに頭を下げる。

「なにそれ……」

あまりのことに愕然とするわたしを侍女達が気遣わしそうにしたけれど、それでも手早く衣装を着付けていく。

昼食の用意ができておりますという、イヴェンヌの言葉に、後で食べると言い残して、わたしは速攻でカレヴィの執務室へと向かった。

「カレヴィッ」

乱暴に扉を叩いた後、執務室に飛び込んだわたしに、カレヴィがゆっくりと席を立った。

彼の傍には驚いたようにこちらを見つめる宰相のマウリスの姿もあった。

「……マウリス、席を外せ」

「はっ」

マウリスは胸の前で腕を掲げて礼を取ると、執務室から出ていった。

「カレヴィ、なんでこんなときにこんな痕をつけるの？ しかも、消すなって命令したって……、なんで、そんな意地悪するの？ ひどいよ」

わたしはカレヴィに詰め寄って、彼の服をぎゅっと掴んだ。

「どちらがひどいんだ。……おまえは俺のことをなんとも思っていないそうだな」

「え」

確かにそんなことを言ったような気はする。

「……少なくとも俺は、おまえが慣れない環境で少しでも快適に過ごせるよう尽力してきたつもりだ」

「そ、それは分かってるし、とっても感謝してるよ！ わたしが言いたかったのは、カレヴィのこと、男としては見てないってことで――」

そこまで言った途端、カレヴィは大きな音を立てて、執務机を叩いた。衝撃で幾枚もの紙が辺りに舞う。

わたしは今まで見たことのない彼の剣幕に体を震わせた。

「カ、レヴィ……」

「――出ていけ」

絞り出すようにカレヴィが言う。その表情は彼が俯いているため、よく分からない。

「カレヴィ、でも……」

「出ていけというのが分からないのか！ これは命令だ。また襲われたくないならとっと出ていけ」

ぎらぎらとした肉食獣のような瞳で見つめられて、わたしは動けなくなる。

控えていたゼシリアが見かねたように、固まったわたしを居室まで連れていつてくれた。

その間、わたしはよく分からない恐怖に体を震えさせていた。

それは、彼の機嫌を損ねたことによるのかもしれないし、これらの不安のことからくるものかもしれないし、なかった。

「……陛下は少し気が立っておいでなのです。ハルカ様、今はまだ陛下をそっとしてさしあげてくださいませ」

ゼシリアは慰めるように言っただけで、あれはどう考えてもわたし自身がカレヴィを激昂させたとは思えなかった。

昼食が並んだテーブルの席についたけれど、とても食欲は湧かなかった。

「……どうか、召し上がってください、ハルカ様」

ゼシリアに促され、鬱々とした気分でなんとか食事を押し込む。

朝庭園で取ったフルーツがデザートに出てきて、わたしはなんだか泣きたくなってしまった。

……本当なら、カレヴィと一緒に食べるはずだったのにな。

それなのに、どうしてこうなっちゃったんだろう。

甘くておいしいフルーツを食べながら、わたしはいつの間にか涙を流していた。

「ハルカ様……」

侍女達の気遣わしげな声が聞こえる。

いけない。これじゃ、周りに心配かけちゃう。

慌ててわたしはハンカチで溢れる涙を拭った。

カレヴィは基本的に人がいい。

それをあそこまで怒らせたのだから、わたしに対する怒りは相当なのだろう。

でもたぶん、わたしはそこまでカレヴィを怒らせても婚約者という身分は剥奪されないだろうと踏んでいた。

それは伽を既に済ませているという事実もある。

けれど一番の理由は、わたしが千花の友人だということだ。

その気になれば、この大陸を掌握することも可能と言われる最強の魔術師と繋がりを持てば、国としては相当の強みになる。

——そして、その繋ぎがわたしのだ。

だから、カレヴィにどれだけ嫌われようが、離縁だけはされない。

……それに千花もそれを簡単には許さないだろう。

「ハルカ様、こちらへ」

憂鬱な昼食を終えたわたしは、仕立屋や宝石商が待つ別室へと移動し、手始めに採寸をされた。

「……ハルカ様は陛下にとっても愛されておいでなのですね」

仕立屋がわたしのあちこちについたキスマークを見て、感心したように溜息をついた。

それにわたしは曖昧に微笑みで返す。

——愛されているなんて、とんでもない。

それどころか、わたしはカレヴィに嫌われているのに。

そう思うと、キスマークの嫌がらせもなんとなく納得できた。

そうか、わたしはカレヴィに嫌われてるんだ。

なんとか涙はこらえたけれど、今度はなぜか胸が苦しくて仕方なかった。

わたしがそんな自分の気持ちを持て余している中、仕立屋と宝石商や侍女達の楽しそうな声が響いている。

それで気をまぎらわせることができて、今はただただそれがあったがたかった。

24話 厳かな夜

結局その日は、晚餐もカレヴィとは別々だった。

……衣装のこととか聞いてくると思ったのに。カレヴィにはそれほど興味ないってことなのかな。

まあ、いいや。今日は疲れたし、早めに寝てしまおう。

カレヴィのあの剣幕じゃ、たぶん今夜は来ないだろうし。そう思っただけでベツドに横になったわたしは、昼間の疲れもあつてすぐに眠りについた。

「ハルカ、起きろ」

ゆさゆさと体を揺さぶられて、わたしは無理矢理起こされた。

もー、なによ。せつかく人が安眠しているのに。

で、起きたら目の前にカレヴィがいて、わたしは思わず口に出してしまった。

「……なんでカレヴィがいるの？」

まだ少し寝ぼけた頭でそう言うと、カレヴィがむっとしたような顔をした。

「伽に来たんだ。おまえはまだ花嫁修業中だということを忘れるな」

「えっ、まだあるの？ 昼もあつたからてつきりもう終わりかと……」

「勝手に終わりにするな。俺はそのつもりはない」

あれで終わりじゃないのか、いったいどんな体力してるんだ、カレヴィ。

「うわあ……」

「なにが、うわあなんだ」

「いや、わたしの体力持つかなあ、と」

そう言うと、カレヴィはちょっと眉を顰めた。

「おまえは俺のことを男と違ってないらしいからな。今日はその認識を改めるようにみつちり仕込んでやる」

「えええ、それ、そういう意味じゃない！」

「ではなんだ」

「う、えと、カレヴィのこと恋愛対象に見てない、みたいな？」

うー、こういうこと説明するの苦手なんだよ。それも自分のことだし。

それをカレヴィはじつと見つめていた。

「……そうか、おまえにはやはりしつかり仕込まなくてはな」

ええ、これでも駄目なのか。

困った、なにがカレヴィをこんなに怒らせたんだろう。

「気を悪くさせたのは悪かったよ。謝る。ごめんなさい」

……もしかしたら謝ってももう遅いのもかもしれないけど。

ちくりと痛む胸を押さえて、わたしはカレヴィに頭を下げる。

人に嫌われるのは、こんな歳になってもやっぱりこたえるな。

「……謝られても困る。おまえには俺の婚約者として、いずれ王妃の務めを果たす覚悟をしてもらわなければならない。そのことだけは忘れるな」

「——はい」

いつもとは違う厳しい口調に泣きそうになるのをこらえて頷くと、一瞬だけカレヴィが動いた。けれど、結局彼は途中で固まったままだった。

「……カレヴィ？」

不思議に思っただけ声をかけると、カレヴィははっとしたようにわたしを見下ろした。

「……いや、なんでもない。それよりハルカ、先程の俺の言葉を忘れるな」

「うん、わたしは王妃の務めを果たすよ」

わたしが頷くと、カレヴィはゆっくりとわたしをベッドに倒した。

……嫌われてはいるけれど、なぜかカレヴィはわたしの体には執着している。

これはこれで、決定的に仲が悪くなるよりはいいのかもな、とわたしは彼にのしかかられながら考える。

「……なにを考えている？」

「うっん、なんでも」

嫌われていることを彼自身に言うのはためらわれた。わたしはただ、首を横に振る。

それをカレヴィは目を細めながら見つめてくる。

「——おまえに口づけてもいいか？」

「うん」

いつもはそんなこと聞かないのに変なの、と思いつつも頷くと、カレヴィはそつと啄むようにキスしてきた。

「ハルカ、俺はおまえを抱く」

「……うん」

男はたとえ相手を嫌っていても抱けるって言うよね。

そう思ったら、なぜか涙が流れてきた。……わたしおかしい。

「泣くな」

カレヴィがわたしの頬に流れる涙に唇を押し当てわたしを抱きしめる。

いたわるようなその仕草にわたしは余計泣きたくなくなって困ってしまった。

「……いい人すぎるよ、カレヴィ。」

嫌いなのに、なんでわたしに優しくするんだ。

「——ハルカ、おまえは俺の子を成せ」

「……うん」

カレヴィの子だったら産んでもいいよ。

……あ、子供は可愛がってもいいよね。それくらいは許してもらえるでしょう？

まるで厳かな契約のようなやりとりの中、わたしはカレヴィに抱かれた。

それはなぜか泣きたくなるような不思議な感覚だった。

25話 桜の下で

朝起きたら、既にそこにはカレヴィの姿はなかった。

ゼシリアに聞いたら、カレヴィは既に朝食を終えて執務に入ってるそうだ。

なんとなくもやもやしながら支度をしていたら、ゼシリアが「陛下からでございます」と言っ、白の紗に金の繊細な刺繍の入ったストールを持ってきた。

どうやら、これをかけてキスマークを隠せということらしい。

それにしても随分と高価そうなのだなあ。

ストールの両端に金の小さな平たい飾りがいくつも重なって付いていて、しゃらしゃらと音を立てている。

こういうものにまったく詳しくないわたしが見ても、これが特級品なのは分かった。

わたしは早速モニーカにそれを緩く首に巻き付けてもらい、端を後ろに流してもらった。

「まあ、とても素敵ですわ」

ソフィアがそれを見て溜息をつく。

「こういう素晴らしい品を贈られるなんて、やはり陛下はハルカ様のことを……」

イヴェンヌが感心したように言った台詞をわたしは慌てて否定する。

「そ、そんなことないから！　だって、カレヴィは昨日からわたしと食事を取ろうとしないじゃない。カレヴィが贈り物をしたのは、わたしが婚約者だからってだけだよ！」

そう、たったそれだけのことだ。それなのに、みんな大袈裟すぎ。

……確かにこのストールはともいいものだけどさ。

そう考えながら、わたしはストールにそっと触れた。

これ、カレヴィにお礼に行った方がいいのかな。

……でも、うるさがられるかもしれない。

なら、お礼は会った時でいいよね。どうせ、夜には会っただし。わたしは無理矢理自分をそう納得させると、朝食を取り、腹ごなしに庭園まで散歩に行った。

今回、わたしが行ったのは、ガルディア式の庭園の方。

なんというか桜を無性に見たかったんだよね。

……わたし、早くもホームシックかもしれない。

駄目だなあ。一昨日買い出しに行ったらばかりじゃない。

……そういや、あの時に買ってきたお菓子、カレヴィとまだ食べてないなあ。

後でゼシリアに言ってカレヴィのお茶受けに出すようにしてもらおう。

異世界のお菓子を珍しげに食べるカレヴィを見てみたかったんだけどなー……。でもカレヴィはわたしのことを嫌ってるなりにできる限りのことをしてくれているだし、今更一緒にお茶会なんて酷だろう。……

今でさえ、食事にも顔を合わせないんだから。

わたしが鬱々とした気分を紛らわすように、風に揺られて花びらを散らす桜に手を伸ばす。

……ああ、そうだ。

ここでお花見するのもいいよね。なんとかしてここでできないかなあ。

千花か魔術師の誰かに魔法で明かりを灯してもらってさ。

夜桜見物なんてしたら綺麗だろうなあ。

……ただ、その時間帯はカレヴィのアレに重なるんだよね。どう考えても、彼がいい顔をするとは思えない。

わたしが溜息をついていると、突然目の前に千花が現れた。

「千花ー！」

わたしは彼女に駆け寄って抱きつく。すると、自然に涙が出てきた。……あれ？

千花は分かっている、というようにわたしの背中をぽんぽんと叩くと、いったん体を離れた。

「……はるか、カレヴィ王とうまくいつてないんだって？」

「……うん。なんかわたし、カレヴィをすごく怒らせちゃったみたいで、食事も今別々なんだ。わたし、カレヴィに相当嫌われたかも」
わたしがしゅんとして言うと、

「そんなことはない！」

というカレヴィの声が近くで聞こえた。えええ？

「王や侍女達の話の聞いたら、双方に誤解があるみたいだから、カレヴィ王連れて来ちゃった」

千花はいたずらっぽく舌を出すと、とん、とわたしをカレヴィの方に押し出した。

すると、自然とわたしはカレヴィに寄りかかる形になり、彼がそれを支えた。

「え、と……」

思ってもいない時にカレヴィが登場して、わたしは少し混乱する。

……あ、そうだ。

「あ、あの、このストールありがと。大切にするね」

「ああ、おまえが気に入ってくれればいいのだが」

「うん、とても綺麗で気に入ったよ。でも、わたしには高価すぎるかも」

似合っているかどうか分からないし、本当にもらっちゃってよかったのかな。

「そんなことは、おまえが気にすることじゃない」

のんびりとストールの話をしていたら、千花が呆れたように話に

入ってきた。

「……そうじゃないでしょう、カレヴィ王。まずは、はるかがあなたに嫌われていると思っ
ているところから誤解を解いていきま
せん
と」

「あ、ああ、そうだったな」

カレヴィは咳払いをすると、わたしを抱きしめた。

「おまえに誤解を与えるような言動をしてしまったのは悪かった。
すまない」

わたしは慌ててカレヴィから身を起こそうとするけれど、強い力
で抱きしめられていて、それはかなわなかった。

「そんなこと……。わたしもカレヴィをすごく怒らせちゃったし、
ごめんなさい」

カレヴィはなにを言う気なんだろう。

こうやって侍女や近衛兵士がいる中で公然と抱きしめられている
と、恥ずかしいやらなんやらで、顔に血が上ってくる。

「カレヴィ、わたしを嫌ってないってのは分かったから、とりあえ
ず離してくれないかな。みんな見てるし」

「駄目だ」

わたしの頼みもカレヴィはすげなく返してくる。

「なんでよ」

思わずむっとしてわたしが言うと、カレヴィも負けじと言い返し
てくる。

「離したら、おまえは逃げ出しそうだ。だから離さない」

逃げ出さないよ、と言おうとしてわたしが上を向くと、カレヴィ
に顎を捉えられて、口づけられた。

「ハルカ、俺はおまえが好きだ」

わたしは信じられないことを聞いた気がして固まった。

——カレヴィがわたしを好き？ 本当に？

そして、そのままわたしは角度を何度も変えられて、カレヴィにキスされる。

——異世界の庭園で、桜の花びらが幻想的に舞い落ちる。
その中で、わたしは呆然と彼の口づけを受け続けていた。

26話 二人でお茶会

べたべたべた。

いちゃいちゃいちゃ。

今のカレヴィとわたしを表すとしたら、こんな感じだろう。
でも、わたしはしたくてそうしているわけじゃない。

ひとえに今の状況はカレヴィのせいだと声を大にして言いたい。

カレヴィの庭園での告白を受けてから、共同の間に戻ってきたわたし達は、応接セットに陣取っていた。

「これがハルカの世界の菓子か。……塩辛いが旨い。癖になりそうな感じだな」

カレヴィは塩味のポテチをパリパリとつまみながら、時々興味深そうにそれを眺めている。

「これはここでも作れるのか？」

「ポテトチップスくらいなら作れるよ。薄く輪切りにしたジャガイモを水にさらした後、水分をよくふき取ってから油で揚げればいいんだよ。後は好みで塩とか調味料で味付けすればいいだけ」

控えていたゼシリアがわたしの言ったことをメモにとっていく。
厨房で作る気なのかな？

フライドポテトは既にあっし、今までなかったのが不思議なくらいだけど。

「そうか、今後こちらで作らせよう。……ハルカももっと食べる」
カレヴィにポテチを口元に持ってこられて、わたしは仕方なくそれに食いついた。

……うう、お行儀悪い。

ポテチなんてただでさえ食べ散らかりやすいのに。
礼儀作法のシレネ先生が見たら、なんて言うだろう。

「あの……、カレヴィ？　せめてこの格好だけでもやめていい？

すごく恥ずかしいんだけど」

「俺は恥ずかしいぞ」

「わたしが恥ずかしいんだって！」

わたしはカレヴィの膝の上に乗せられたまま主張した。

するとカレヴィはちよつと残念そうな顔をした後、おしぼりで手を拭いてからわたしを隣に降ろした。

「おまえは俺の婚約者なのだから、なにを恥じることがある。それに伽まで済ませているのは周知の事実だろう」

いや、そうなんだけどさ。

でも、それとこれは別のような気もする。

千花に助けを求めようにも、カレヴィのあまりのべたべたぶりに呆れたのか、それとも遠慮したのか速攻で帰っちゃったしなあ。

まあ、千花も忙しい身なので、あまりひきとめられないんだけどね。

そんなことを考えていたら、カレヴィに肩を抱き寄せられてキスされた。

うー、お茶の時から自重してほしい。

「カレヴィ、お茶の時間なんだから、そういうのはなるべく遠慮してよ。おちおちお茶も味わえないじゃない」

普段はコーヒーが多いようにも思えるけれど、今日はミルクティーだ。ザクトアリアではコーヒー豆の他に、お茶の生産もしてるんだって。

ちなみにカカオの生産国でもあるので、ココアも選べたりする。チョコレートも食べ放題だし。……ただし、これは太るという事情で程々にしている。

でも千花なんかは喜んでお土産にもらって帰って行くんだよな！。もちろん家族にも配るんだろうけど。それでも、いくら食べても太らない体質なのは、まったくもってうらやましい限りだ。

そんなこんなで、大陸中の嗜好品の生産国であるこの国は、実は結構なお金持ちだったりする。

「ああ悪い、ついな。……それはそうと、ティカ殿からおまえに支払う金額を聞いたが、下手したら城の使用人よりも低い金額じゃないか。俺はおまえにそんな金額を払いたくないぞ」

「えええっ」

わたしはその言葉に驚いて思わずカレヴィにすがりつく形になってしまった。

すると、すかさずカレヴィがわたしを抱き寄せる。……ちよつと、どさくさにまぎれてなにやってるんだ。

「……払いたくないって、払わないってこと？」

あああ、わたしの楽しい貯蓄計画がガラガラと音を立てて崩れていく。

「払わないとは言っていない。ただ金額が少なすぎると言っているだけだ」

でも、千花は今までよりも給料は弾むって言ってたし、そんなはずはないんだけどなあ。

単にここの給料が法外なだけじゃないの？

「普通の事務員がいきなり高額な給料になったら、税務署に怪しまれるよ。わたしは満足してるんだから、それでいいじゃない」

カレヴィの腕からやっと思えたわたしは、ミルクティーを飲みつつ言う。

けど、カレヴィは不満そうだ。

「……だがな、王妃ともなる者にそのような少額を渡すなど、俺の沽券に関わる」

うー、カレヴィってば、強情だなあ。当のわたしがいいって言うてるのに。

「衣装とか、装飾品とかでもかなり使ってるでしょう？ その一部と思えばいいじゃない」

「それでも俺は納得できないぞ。……では、おまえの父母に金品を渡すのはどうだ」

「面倒なことになりそうだから駄目」

一回や二回なら、「まあ記念に」ということで丸く収まるだろうけど、カレヴィのこの調子だと、一回許してしまったらこの先ずっと続く可能性がある。それこそ、税務署のお世話になりそうじゃないか。

「なんだ、面倒なこととは」

カレヴィが不思議そうに眉を上げて聞いてくる。

「向こうにはいろいろあるの。下手したら不正を疑われるかもしれないし」

「それは困るな」

さすがにカレヴィも事の重大性に気づいたらしく、渋い顔をしたけれど、なにかを思いついたようで、次には笑顔になって言ってきた。

「それならば、おまえのために離宮を造り、そこにおまえの好きな桜を植えさせよう。そうすればおまえがしがっていた夜の花見もし放題だぞ。……どうだ？」

……どうだ？ ってそれ、いったいいくらかかるんだ。

王様の金銭感覚って、本当に庶民には理解不可能だ。

27話 恋情への憧憬

「いや、どうだって言われても……。わたしのためにそんなにお金使うなら、むしろ国民のために使ってほしいんだけど」

あまりにも庶民とはスケールの違う話に啞然となりつつも、カレヴィになんとかそう言ったら、なんだかよく分かんないけど、国民にまで気を遣うとは、おまえはやはり王妃にふさわしいのかなんとか、ものすごく感激されてしまった。

「俺はおまえとの婚礼の記念に離宮を建てるぞ」

とかカレヴィに言われてしまって、結局は彼に押し切られる形になっちゃった。

えええ、本当にいいのに。

「……わたしは、庭園の桜で充分なのに」

「本当におまえは欲がないな」

いや、だって、カレヴィのいうことがあまりにも並外れているから……。

第一、離宮建築なんていったいいくらかかるんだ。

王宮の豪華さから察するに、日本円で数十億、いや数百億だろうか。……はつきりとした金額はあまり想像したくない。

「欲がないわけじゃないけど、今までだって随分と良くしてもらってるし」

わたしはこの世界に来て、カレヴィの婚約者になったことを宝くじ一等を引き当てる以上の幸運だったと思っている。

もちろん元をたどれば、なぜか異世界で魔術師をしていた千花とわたしが幼なじみの友達だったということが大きいだろうけど。

結婚相手のカレヴィは心の広い王様で、王妃の一番の仕事は子作成することだから、その他の細かいことは問わないとまで言っている。

おかげでわたしは贅沢三昧の上、漫画描きという趣味にも没頭で

きている。

まあ、もちろん王妃になるならば、それなりの気品を対外的に身につけなくてはいけないから、礼儀作法の授業は受けている。けれど、千花からするとそれでもかなり生ぬるいそうだ。

王妃になるなら、国の歴史と世界情勢くらいは把握しておかないといけないよと千花に言われて、納得したわたしは、合間をみて関連の本を読んだりしているけれど。

それでも今のままでいいんだろうか、と時々妙な焦燥を感じてしまふ。

「これ以上なにかしてもらうなんて悪いよ。ただでさえ、わたしは恵まれすぎなんだから」

「おまえがそんなことを気にすることはない。ただ俺がおまえになにかしてやりたいだけだ」

カレヴィは微笑むとわたしを抱き寄せた。

わたしは彼にされるがままになつていたけれど、その胸の内は複雑だった。

わたしは、カレヴィにここまでしてもらう理由がわたし自身に見つからない。

これが千花みたいな美人だったら分かるよ？

それなのに、なぜわたし。

しかも、イケメンのこの王様はなぜかわたしのことを好きらしい。今まで男にもてなかつたわたしにしてみたら、カレヴィは相当の物好きとは思えない。

ああ、せめてカレヴィのこと好きになれたらなあ。

もちろん彼のことは人間として好意を抱いてる。でも、男として好きかと聞かれたら、よく分からない。

……ひょっとしてわたし、人格的に欠陥があるのかもしれない。カレヴィみたいに性格よくてしかもイケメンにここまでされて、

好きにならない人間なんていないんじゃないかと思うんだよね。
カレヴィに嫌われてると思ってた時は、確かに苦しかったけど、
でもそれは愛とか恋とか関係ないと思うし。

カレヴィの逞しい胸にもたれながらわたしが溜息をついていると、
カレヴィが「どうした？」と言ってわたしを覗きこんだ。

ちよつとためらったけれど、わたしは正直に自分の気持ちを話して
みることにした。

「わたし、カレヴィのことを人としては好きだけど、恋愛感情がある
かどうかは分からない」

「……そうか」

それだけ言つて、カレヴィは苦く笑つた。

……ああ、罪悪感。

こんなによくしてもらつて、こんな残酷な言葉言えちゃうわたし
はどうかしてる。

「おまえとは元が政略のようなものだから仕方ないのかもしれない
な」

少し寂しそうに笑うカレヴィに、わたしは慌てて言つた。

「ごめん、ごめんね。わたし、そういう感情が実はどういふものか
よく分からないんだ。もしかしたら、感情に欠陥があるのかも」

「ハルカ」

カレヴィがわたしの唇に指を置いて、それ以上なにかを言つのを
阻んだ。

「ハルカ、俺は言つたはずだぞ。自分を卑下するのはやめろ。おま
えは確かに少し変わつてはいるが、俺にはどこかに欠陥があるとは思
えない。……それに、おまえが俺に恋愛感情を持てないからとい
つて気に病むこともない」

「カレヴィ、でもそれじゃわたしあなたに申し訳ないよ」

好かれたなら、出来ればその相手には返したいじゃない。まして
や、相手は婚約者だ。

「申し訳ないという気持ちで、好きな振りをされる方が余程残酷だ。俺が勝手におまえのことを好きなだけだ、ハル力は気にするな。…もちろん、おまえに好きになってもらうために俺も努力するつもりだがな」

再びわたしはカレヴィの膝の上に乗せられて、狂おしいほどの熱情を込めた瞳で見つめられる。

その途端、わたしの背筋をなにかがぞくりと走り、わたしは思わず固まった。

カレヴィはわたしを強く抱きしめると、そのまま唇にキスしてきた。

——ああ、本当にカレヴィに恋できたら、すごく幸せなんだろうな。

そう考えながら、わたしはなおも続くカレヴィのキスを受け止める。

今は無理でもいつかそうなることができるのかな。

……出来るといいな。

わたしはどうすることも出来ない自分のふがいなさにやりきれない気持ちになりながら、それでもカレヴィの愛の言葉と口づけを受け続けていた。

28話 有効手段

しばらくわたしはカレヴィに抱きしめられたりキスされたりしていたけれど、宰相のマウリスがカレヴィを呼びに来たことで、この恥ずかしいお茶の時間はお開きになった。

わたしの趣味の時間も少なくなっていたけれど、カレヴィの気持ちを考えたら文句は言えない。

とりあえず、お昼までの時間、趣味にひた走ろう。

「それにしても、素敵でしたわー」

「本当に陛下はハルカ様のことを愛していらっしゃるんですね」

「陛下があればハルカ様に執着しておられるのなら、ザクトリアの将来は安泰ですわね」

ベタ塗りの練習をしてもらいながらの侍女三人のおしゃべりに、わたしは原稿のペン入れをしつつ曖昧な笑みを浮かべていた。

ちなみに、わたしの侍女アシスタント養成計画はいい感じで進んでいる。

さすがに背景とかモブとか描いてもらうことは無理だろうけど、この調子でトーン貼りまで覚えてもらえたらすごく助かるな。

「……うーん、でもわたしがカレヴィのことを好きにならないと、なんとなく悪いような気がするんだよね……」

もやもやしながらわたしがそう答えると三人はいきなりトーンダウンした。

「ま、まあ、それはいきなりはどうしようもないことですし」

「あれだけ陛下に愛されておられるのですもの、そのうち陛下のことをお好きになれますわ」

「そうです、そうです」

「……そうかなあ……」

カレヴィのことはもちろん嫌いじゃないけど、彼に好きとか言っ

てる自分が想像できない。

まあ、カレヴィには悪いけど、この点は我慢してもらうしかないかな。自分でもすごく残酷だと思うけど、今すぐどうこう出来るものでもないし。

「それにしても、ハルカ様が今まで描かれた原稿は本になされないのですか？　せっかくのハルカ様の力作を他の方がご覧にならないのはもったいないですわ」

モニーカにそう言われて、わたしは一瞬ペンを止める。

「うーん、まあ、いずれ本にしたいなあとは思ってたんだけどね」
だいぶ枚数も溜まってきたし、ここらでまとめとくのもいいかなあ。

「まあ、そうなのですか？　ではぜひ、そうしてくださいませ。わたくし絶対に購入しますわ」

「え、ええっ!？」

イヴェンヌの言葉にわたしは驚いて、思わず大声を上げてしまった。

「そんなことしなくても、ただであげるよ」

いずれアシになってもらうんだし、お金取るなんてとんでもない。
「ハルカ様、ただなんていけませんわ。このお話にはハルカ様の技術と努力と情熱がこもっているのです。そんなことは絶対に駄目です」

ソフィアの反対に他の二人も頷いた。

うーん、悪いような気もするけど、せっかくこう言ってくれてるんだし、仕方ない、譲歩するか。

「そうだね、そうする」

わたしが頷くと、三人は笑顔になって他の侍女達にも宣伝しますと力強く宣言してくれた。頼もしいなあ。

……けど、本作るとなったら、コピー本は労力的にたぶん無理だから、オフセットでサイト通販分併せてとりあえず百部くらい刷れ

ばいいかなあ。

もし、売れ残ってもそれも記念としてとっておいてもいいし。とりあえず、千花にも相談して印刷所とか決めよう。それと、装丁とかも懲りたいなあ。

実際に作ると決めると現金なもので、ああしたいこうしたいと次々欲が出てくる。

でも、本頼んでる時間あるかなあ。通販も手間がかかるし、向こうにちよくちよく行かなくちゃいけないかもしれない。

今は礼儀作法とかあるから、時間的に無理かもしれないなあ。そうすると、本を作るのは結婚後しばらくしてからになるかもしれない。

その辺りはカレヴィや千花によく相談しよう。そんなことを考えているうちに、昼食の時間になって趣味の時間はとりあえずお開きとなった。

今日はカレヴィと一緒に食事を取る約束があるから、その時に本のことをちよつと聞いてみようかな。

「ハルカ」

共同の間に行くと、既にカレヴィはわたしを待っていた。

わたしが来るのを待ちわびたように、カレヴィはわたしの手を引くと抱きしめて、キスしてきた。

……カレヴィ、本当に躊躇しなくなってきたね。純粋な日本人のわたしとしてはちよつといや、かなり恥ずかしい。

まだいちゃいちゃしそうなカレヴィをゼシリアが止めてくれて、ようやく昼食となり、わたしはほつとした。

早速わたしは昼食の席で、カレヴィに本作りたい、そのために時間取りたいけど、大丈夫かなあと一応確認を取ってみた。

「今は駄目だ。……せめて婚礼後、落ち着いてからにしろ」
ちえつ、やっぱり駄目か。

「……でも本は作っていいんだよね？」
ちらりと窺いながら聞くと、カレヴィは渋い顔をして頷いた。

「……ああ。だが、おまえには本よりも優先して作るものがあるだろう」

う、子作りのことだね。

わたしはひきつり笑いをしながら頷いた。……ここです承しておかないと、本は作るなど言われかねない。

「もちろん、それは分かっているよ。自分の責務は果たすから」

わたしが真面目な顔をしてそう言つと、カレヴィはちよつと苦笑した。

「……俺はそんなに早々と子は作らなくてもいいと思っているがな。楽しみは長い方がいい」

「ええ？」

カレヴィ、それじゃさつき言つたことと違うじゃない。子はそんなに早くいらないうてなにごとだ。

「それじゃわたし、いつまでも本作れないじゃない」

楽しみにしていた分、わたしはかなりむつとしてしまった。

けれど、カレヴィは肩を竦めてこともなげに更に言ってきた。

「時間を取るなら、無理に本にしなくてもいいだろう。別に今のままでもいいじゃないか」

「カレヴィ、ひどいよ。子を成すなら趣味に没頭してもいいって言つたじゃない」

……正しくは、「趣味に没頭する前に子を成してもらわなければ困る」だったけれど。

わたしが立ち上がつて抗議すると、カレヴィはちよつと動揺した。
「なんでわたしの楽しみを邪魔するような意地悪言うの。そんなこと言つなら、カレヴィなんて嫌いになるからね！」

わたしが年甲斐もなく涙目になりながらそう訴えると、カレヴィ

は明らかにうるたえた。

「……いや、ただ俺は、おまえという時間が減るのが嫌なだけで、意地悪をしたいわけじゃないんだ」

とかなんとかカレヴィがいろいろ言い訳してたけど、約束はきちんと守ってもらわなくちゃ困るよ。

……ただ「嫌いになるから」攻撃はかなり有効なことを確認できたのは、今回唯一の収穫だったかもしれない。

29話 夜桜見物……だったはず

「カレヴィ、お花見のお願い聞いてくれてありがとう」

「いや、おまえの願いならこのくらいさやかなものだ」

本当だったら、共同の間でカレヴィと晚餐の予定だったのだけれど、わたしは今、彼と一緒に桜の大木の下で雅やかに花見をしていた。

カレヴィの告白後にここでお花見出来ないかなあ？ って聞いてみたんだけど、言ってみるものだねえ。

桜の傍には魔法でいくつも明かりが灯され、なんとも幻想的な雰囲気醸し出されていた。

そんな中で中央にテーブルセットが準備されて、わたしとカレヴィは一緒に晚餐を取っている。

「ハルカ、口を開ける」

「え……、は、恥ずかしいよ」

「それでは入らない。もつと口を開ける」

言われて仕方なく、わたしはあーんと口を開ける。

その中にカレヴィがフォークに刺したお肉を投入し、わたしはそれに食いついた。

その傍で見ていた侍女達が、「今のは意味深ですわーっ！」と身悶えていた。……いつたい、なにを想像しているのやら。

おいしいお肉をもぐもぐしながら、わたしは周囲の浮かれ具合にちょっと呆れていた。

未だに信じられないことに、カレヴィが明らかにわたしに夢中なので、このお花見の間にも、これはきつと結婚早々に御子を授かりますわとか、どんな美しい姫君とも浮き名を流さなかった陛下がハルカ様をこんなに愛しておいでで素晴らしいです！ とか侍女達に

お祝いの言葉をいろいろもらった。

夜桜の下というのも手伝って祝賀ムードいっぱい、わたしはなんだかいたたまれなかった。……カレヴィは嬉しそうだったけど。

わたしがカレヴィのこと好きになっただけ、一緒にありがとって言うて素直に喜べるんだろうけどなあ。

それができないわたしは、曖昧に笑ってごまかすしかできない。うーん、日本人の哀しい習性だ。

……けど、わたしもあーん返し（？）を一応した方がいいんだろ
うか。

こうやってカレヴィがわたしの希望を酌んで夜桜見物をさせてくれているんだから、ちょっとはわたしもサービスした方がいいのかもしれない。

わたしは一大決心をして、ステーキをカレヴィが食べやすい大きさに切ると、フォークに刺した。

「カ、カレヴィ」

「ん？　なんだハルカ」

震えるわたしに疑問を覚えたのか、不思議そうにカレヴィが見てくる。

わたしはそんな彼の前に肉を刺したフォークを差し出すと言った。

「……はい、あーん、して？」

その直後、わたしは恥ずかしさで火を噴きそうになるほど真っ赤になった。

カレヴィは瞳を見開いて固まってるし、よっぽどわたしのこの行動がおかしかったんだ。

「カ、カレヴィ」

似合わないのは分かったから、とりあえずこの差し出したお肉を

なんとかかしてほしい。そうしてもらわなきゃ、いまさら引っ込みがつかない。

「あ、ああ……」

あまりに自分に似合わないことをやってしまつて涙目になっているところで、カレヴィが我に返つてようやくフォークに刺したお肉が回収された。

ああうつうつ、今の自分を思い返してみても鳥肌立っちゃたよ。わたし、寒すぎる。

「……まさかおまえがそこまでしてくれるとは思わなかったぞ」
「うつ、うつ……」

いたたまれなくてナイフとフォークを置いて俯いてみると、いきなりカレヴィにぎゅむっと抱き寄せられた。

え、ええ！？

「真つ赤になつて、本当に可愛いなおまえは」
そう言つと、カレヴィは食事の席にも関わらず、わたしを膝の上に乗せ、更にキスまでしてくる。

「カ、カレヴィ、食事中、食事中！」
何度もされるキスの合間にわたしがそう叫ぶと、カレヴィは少し残念そうにわたしを元の席に戻した。

なんというか、カレヴィの萌えポイント(?)の沸点が低すぎる。わたしのあの寒い「あーん」でそこまで感激できるなんて、ある意味貴重だ。

「おまえのために用意した席だが、俺は早くおまえを可愛がりたくて仕方ないぞ」

は、発言が危険なんですけど、カレヴィさん！

案の定、周りにいた侍女達がきやーっと歓声をあげた。

うつうつ、恥ずかしすぎる。

似合わないことをやってしまったわたしもだけど、カレヴィもある程度は自重してほしい。

その後。

恥ずかしさを紛らわすためお酒に逃げたわたしは、またも見事に酔っぱらってしまい、カレヴィにお姫様抱っこされて王宮まで戻った。でも、わたしが覚えてるのはそこまで。

翌朝、わたしはカレヴィと一緒にわたしの寝室で目覚めた。

けれど彼に「昨夜は楽しかったな」と言われても、それは夜桜見物のことなのか、それともアレのことなのか分からなくて、わたしはしばらく挙動不審になるのだった。

30話 献上品とその贈り主

「——実は、本日ハルカ様に献上品がございまして」

昼からの礼儀作法が終わった後、ソフィアが非常に言いにくそうに言ってきた。

「へえ、どなたから？ 貴族の方？」

「いえ……、貴族の方ではいらつしやらないのですが、王宮とは縁の深い方ですわ」

ソフィアは、なんとなく齒切れが悪い。

どうしたんだろ、と首を傾げると、モニーカが意を決したように言ってきた。

「実は、その方がハルカ様に直接お会いしたいと申ししてきました。身分的にそれは遠慮して頂くように申したのですが」

身分的に…… ってことは、あまりわたしには会うのははばかれる人なのかな？ それで、貴族でもないと。

「……でも、その方はわたしに直接会うことを諦めてないってことだよな？」

「は、はい……。あの、ハルカ様、差し出がましい口をきくようですが、その方とはお会いにならない方がよいかと思われそうですわ」

「わたくしもそう思います」

イヴェンヌもモニーカに同意して頷いた。ソフィアもそれに賛同するように頷いている。

「そんなにわたしに会わせたくない人って、誰？」

はつきりしない三人にわたしは切り込んで聞いた。

「あの……、実は、高級娼館の主なのですわ。そのフレイヤ様がハルカ様にお目通りを願っているのです」

「ああ、例のあれね」

非常に言いづらそうなイヴェンヌの言葉に、わたしは納得してポンと手のひらを拳で叩いた。

カレヴィがわたしとの婚約前にあっちの方面でさんざんお世話になった所の主なら、彼女達がわたしに会わせたがらないのも納得だ。

……ふーん、でもおもしろそう。

わたし、そっち関係は元の世界の知識とカレヴィ経由でしか知らないし。

ここらでカレヴィの弱みを探っておくのもいいかもしれない。

わたしは悪魔のようなことを考えながら、内心ニヤニヤした。

あ、でも一番のお得意様が減っちゃって、ここまでこぼしに来たってことも考えられるな。

……ま、いいか。その時はその時だ。

「——いいよ、お通しして」

「ハルカ様!？」

三人が信じられないと言うように叫んだ。

「その人に興味があるんだ。だから、会ってみようと思う」

一応、献上品には魔術師による検分が行われる。だから、それ自体には問題はないだろうし。

「……かしこまりましたわ」

諦めたようにイヴェンヌが待機しているであろうフレイヤを呼びに行くために礼をして下がっていく。

心配そうにわたしを見てくるソフィアとモニーカには悪いけど、わたしは娼館の主に興味津々だった。

やがて、謁見用の椅子に座ったわたしの前に高級娼館「月華の館」の主、フレイヤが現れた。

わたしのとしては、恰幅のよい厚化粧の中年女性を想像していたんだけど、実際の彼女は四十代くらいの上品な感じの女性だった。

ちなみに、あまりいい顔をしない三人を納得させるために、念の

ため部屋には近衛兵士を入れてある。

うん、これなら滅多なことは起こらないだろう。

「ハルカ様におかれましては、ご拝謁をお許し願えまして、欣幸の至りでございます」

わたしに対して正式な礼をして丁寧な挨拶をしてくるこのフレイヤという人物、いったいどんな人なんだろう。

第一印象としてはかなりいい感じなんだけど。

「本日はこちらを献上させて頂きにありがとうございました。月光蓮花香でございます。どうかお納めくださいませ」

使用人と思われる男性がずいとお出てきて、恭しくイヴェン又達が立ちはだかるわたしの前に、被せてある上等な布を外して、細長い繊細な細工のしてある綺麗な桃色の石の箱を差し出した。

……なにこれ？

「香を焚く香炉ですわ。少し焚いてお見せしたいのですが、よろしいでしょうか？」

わたしが頷くと、モニー力達が小さなテーブルを用意して、フレイヤはそこに同じ桃色の石の板にのせた香炉を乗せた。

もう一人の彼女の使用人が持ってきた細長い金の綺麗な入れものからからスティック型のお香と思われるものを取り出した。

あ、なんだか、向こうの世界の長い線香型のインド香みたいだ。

フレイヤの使用人がそれを香炉にセットすると、それに火をつけ蓋を閉める。

すると、やがて香炉の細工の隙間から僅かな煙と共に、爽やかな花の香りが立ちこめた。

「……まあ、よい香りですわ」

ソフィアが思わずといった様子で言ったけど、確かにいい香りだ。それにどこかで嗅いだような懐かしい香りも混ざっている。……

そうかベビーパウダーだ。

人によっては好き嫌いもあるかもしれないけれど、わたしはこの香りが気に入った。

「いい香りですね」

につこり笑って言うと、フレイヤも上品に微笑み返してきた。

「蓮の花の香りを主に調合した香ですね。ハルカ様がお気に召されたようで喜ばしい限りです。どうぞ、寝室等でお焚きくださいませ」

あー、直接には言っていないけど、カレヴィとのアレの時に焚けてことか。

「……カレヴィもこの香はよく焚いてたんですか？」

つい、わたしは単刀直入に聞いてみる。

するとフレイヤは少し面白そうな色を瞳に滲ませてわたしを見た。
「この香の元になったものは、焚いている時にお褒め頂きましたわ。これは、ハルカ様に合わせて調合させて頂きました」

ふーん、なら寝室で焚いてもカレヴィも大丈夫そう。

「まことに結構なものを頂きました、ありがとうございます。ありがたうございますわ」

イヴェンヌに代行してもらってわたしはお礼を言う。

王妃になる予定のわたしは、貴族相手でも直接軽々しく礼なんて言っちゃいけないらしいんだよね。

「もったいないお言葉ですわ」

恭しくフレイヤが頭を下げる。

でも、さつきから興味深そうにわたしの体とか顔とかちらちら見てるんだよね。

……やっぱり、彼女の真の目的は王妃となるわたしがどんな人物が見に来たんだらう。

わたしのその考えを肯定するようにフレイヤは微笑んで言った。

「——実は献上品をお贈りするというのは建前で、わたくし、ハルカ様がどういう方か是非拝見したかったのですわ」

王宮と専属契約しているとはいえ、王の婚約者であるわたしにこつもはつきり言うとは、フレイヤは肝の座り方が半端じゃない。

それとも、王宮専属の高級娼館の主ともなればやっぱり違うものなのだろうか。

……などと、わたしは妙な感心をしながら、フレイヤの次の出方を見守っていた。

はてさて、彼女の口からいったいどんな私に対する感想が出てくるんだろう？

31話 宝玉

「それで、実際に会ってみてどうでした？」

「ハルカ様」

フレイヤに訪ねたわたしを侍女三人が心配そうに見てくる。

「政略にも関わらず、陛下が熱烈に愛されている方ともつぱらの噂です。実際にハルカ様にお会いして納得いたしましたわ。とても素敵なお体をされていらっしやいますのね」

「え……？」

わたしはフレイヤの言葉に目を瞠った。

素敵なお体ってなに？

わたしはそんな風に言われるほどスタイルはよくない。ちょっとぽっちゃり体型だ。

ただ、胸だけは小学生の頃からやたらとあつて、男子に牛とかよくからかわれていた。

それは千花が全部撃退してくれたけどね。

そういう理由で、わたしはブラも実際より小さいサイズを無理矢理つけて大きすぎる胸を誤魔化していた。

千花に締め付けは体によくはないよとは言われたけど、昔からのコンプレックスがそうそう直るわけもなく、今まで来てしまったんだけれど。

「フレイヤ様、無礼ですわ」

ソフィアが苦情を言っただけで、肝心のフレイヤはあまり気にしたふうもなかった。

「ハルカ様は男性を虜にさせるお体をお持ちですわ。……もちろん陛下があなた様を溺愛されるのはそれ以外の要素もあるのでしょうけれど」

……まあ、確かにカレヴィに要約するとおまえはエロい体だとはさんざん言われたけど、フレイヤのその考えはなにかの間違いじゃ

ない？

わたしはついこの間まで喪女だったんだよ？

この世界に来てカレヴィみたいな物好きに会ったけどさ。

ひよっとしたらフレイヤのこれは、ただのお世辞かもしれないし、軽く流しておいた方がいいのかもしれない。

本気にするのも自意識過剰みたいで恥ずかしいし。

「そうなのですか？　わたしにはよく分かりませんが」

けれど、わたしの思惑とは裏腹にフレイヤは頷いた。

「はい、そうです。……ただ、そのお化粧はいけません。せつかくのお体の魅力を相殺してしまいます」

「まあ！」

フレイヤの言葉に、化粧担当の侍女三人が気色ばむ。

突然でてきて言いたいことを言うフレイヤに彼女達が文句を言いたいのは分かる。……でもここは少し落ち着いてほしい。

わたしは侍女達を目で制すると、フレイヤに尋ねた。

「化粧がいけないとは、どういうことですか？　わたしはこれですよと思うのですけど」

わたし自身は今のナチュラルメイクでいいと思うんだけどね。

たまに化粧を落とすと誰……？　ってレベルの人がいるけど、ま

さか顔が変わってしまうくらいの化粧をしろとか言わないよね？

「——無難すぎるのです。ハル力様にはそのお体にあった化粧をすべきですわ」

「お言葉ですが、厚化粧はごめんです」

皮膚呼吸できないくらい塗りたくったりするのはごめん被りたい。できれば化粧もあまりしたくないくらいだけど、いい大人がそういうわけにもいかないだろうから仕方なくわたしはそうしている。

「いえいえ、厚化粧などいたしませんよ。少し目と頬の周りに色を入れさせていただくだけですわ。……ハル力様、お疑いならぜひわたくしにお化粧直しをさせていただきます。もちろん侍女の方にもご覧になっていただきたいですわ」

そうまで言われて、わたしは断るのもどうかと考え、結局は了承した。

そんな経緯で、わたしは支度用の大きな鏡の前に座って、フレイヤに化粧を直されている。

……というか、色を足されているというか。

フレイヤはブラウンのアイシャドーをわたしの瞼から鼻にかけてささっと塗ってから、ブラウンのアイラインを上瞼にかいた後、暗めの紫のシャドーをその上に重ねるように塗って眉の下にハイライトを入れていく。

そうすると目が大きく見えて、自分で言うのもなんだけど、とても魅力的になったように見えた。

「まあ」

侍女達三人も鏡に映ったわたしを見て、感嘆の溜息をついた。

そして、瞼が紫ですから赤系統の頬紅にしましょうかとフレイヤは言って、頬骨の上にチークを軽くのせた。

これは顔色を健康的かつ華やかに見せるためらしい。

「ハルカ様、出来ましたわ。わたしが想像した通り、とても素敵に仕上がりましたわ」

フレイヤが満足そうに鏡の中のわたしに微笑むと、侍女三人もなぜか頬を染めながら頷いた。

「まったくですわね」

と、イヴェン又は鏡のわたしを見て溜息をついた。

「ハルカ様、とてもお綺麗です」

ソフィアは頬を両手で覆ってわたしの変わりように感嘆している。
「ハルカ様がこんなに素敵になれるなんて、わたし達はいいなになをやっていたんでしょう」

モニーカ、そんなこと言わないで。わたしは充分よくしてもらってるよ。

鏡の中のわたしは体の線も相まって、どこか艶やかな美人になっていた。でもけっして下品な感じではない。

「ハルカ様、いかがでしょうか」

「……驚きました。わたしでも変わるものですね」

言うなれば、お色気美人って感じ？

顔自体はわたしだって分かるのに、喪女だったわたしをここまで変えるフレイヤの技術は素直に凄いと思う。

「ハルカ様は素材は悪くないですよ。いえ、それどころか磨けば光る宝玉ですわ」

「え……」

フレイヤの明らかな賞賛に、そういう方面では褒められ慣れていないわたしは盛大に照れた。

「まあ、ハルカ様はともにお可愛らしいですね。そんなところも陛下に愛されるところなのでしょうね」

真っ赤になつたわたしを見て、フレイヤがくすくすと口元に手を当てて笑った。

「そ、そんな……」

わたしはそのフレイヤの言葉にさらに真っ赤になるしかない。

わたし、そんなに可愛げのある女じゃないよ。

「ど、どうもありがとう。とても綺麗にもらって、感謝します」
すっかり動転したわたしは、気安く礼を言うのはいけないということも忘れ果て、慌てて椅子から立ち上がった。

——その時だった。

「ハルカ！」

大きな音を立てて支度部屋のドアが開くと、カレヴィが慌てたように入ってきた。

「カレヴィ、どうしたの……？」

尋常でないカレヴィの様子に、わたしは驚いて彼に向き直った。けれど、カレヴィはわたしを見て固まり、瞳を見開いたままだ。……あれ、とても綺麗にもらったと思ったんだけど。

「まさか、ハルカか……？」

呆然とカレヴィが呟いたので、それまで舞い上がっていたわたしはちよつと不安に思ってしまった。

モニーカ達の評判はいいし、フレイヤは満足そうにしてるからおかしくはないと思うんだけどなあ……。

32話 理想の異性

「……なにか変だったかな？」

凝視してくるカレヴィにわたしは居心地の悪さを感じて、思い切って聞いてみた。

「い、いや、そんなことはないが……」

ようやくはつとしたカレヴィは、少し動揺したようにそう言ったけれど、うーん、なんだかはつきりしないなあ。

「それより、なぜフレイヤがここにいるんだ」

「ハルカ様にお会いするついでに、香を献上に参っただけですわ」
懇意にしていたつてのは聞いてたけど、二人とも結構親しげ。

「それがなぜハルカの化粧などしている」

あれ、カレヴィ見てないはずなのになんで分かったんだろ。

化粧の仕方がいつもと違うせいかな。

「ハルカ様はせっかくよい素材をお持ちなのに、そのままではもったいのうございましたから。その御身にふさわしい化粧をされているハルカ様はお美しいでしょう？」

蠱惑的な笑みを浮かべて、フレイヤがわたしを手で示した。

「よいいなことを。ハルカはそのままでもよかったのだ。こんなことをしたら他の男の目につくだろう」

「まあ、まだ見ぬ恋敵に嫉妬でございますか？ 陛下」

くすくすとおかしそうにフレイヤが口に手を当てて笑うと、不機嫌そうにカレヴィが「笑うな」と言った。

「……カレヴィは気に入らないの？ せっかく綺麗にしてもらったのに」

地味なわたしでも美人に見えるようにしてもらったのに、肝心のカレヴィの反応がこれだとなんだかしょんぼりしちゃう。

沈んだわたしに慌てたのか、カレヴィが勢い込んで言ってきた。

「違うぞ、ハルカ。今のおまえはとても美しい。俺も思わず見とれ

た」

「……本当？」

それならいいんだけど、カレヴィ内心はわたしのこの化粧が嫌なんじゃないだろうか。

「ああ。俺はおまえが美しくなりすぎて他の男の目に留まるのが嫌なだけだ。俺はそのままのおまえで満足してるし、それ以上は望んでいない」

冴えないわたしがいいなんて、カレヴィ変わり者過ぎ。……まあ、その言葉はちよつと嬉しいけどさ。

「まあまあ、陛下、殺し文句ですわね。ここまで愛されていらつしやるハル力様はお幸せですね」

「……そうですね」

確かにカレヴィはこれ以上ないくらいの待遇でわたしを婚約者として迎えてくれたし、わたしはものすごい幸せ者だ。

……ただ、それに王妃の責務としてしかお礼を返すことが出来ないのが心苦しいけれど。

ちよつと困りながら愛想笑いをしていると、カレヴィが苦笑してわたしを抱き寄せた。

「おまえはよくやってる。だから、気に病むことはない」

「……うん」

すらりとして見えるけど、意外と逞しいカレヴィの胸に顔を埋めてわたしは目を閉じた。

……ああ、本当にカレヴィを好きになればいいのに。

申し訳なさにちくちく痛む胸をぎゅつと押さえて、わたしはカレヴィのされるがままになっていた。

その様子を見ていたフレイヤが驚いたように尋ねてきた。

「まさか、陛下の片思いですか？」

うん、そのまさか。

カレヴィみたいな男前に愛されて、それもこんな地味なわたしが好きにならないなんてフレイヤも信じられないのだろう。瞳を見開

いてわたしを凝視している。

「ああ。だが俺はいつかハル力が想いを返してくれるように努力していくつもりだ」

「まあ」

フレイヤがさらにこぼれそうなくらい目を見開いた。

あうあああ、居心地悪い。

なぜにカレヴィ、わたしみたいな地味女にベタばれなんだ。

もう誰が見ても恵まれすぎなほどの待遇だし、その上、カレヴィはわたしのために離宮まで建てるって言っし。

本当にカレヴィって、ものすごい物好きだ。

「——こう申してはなんですが、ハル力様は男殺しですね」

「は？」

「おい」

信じられないことを聞いた気がして、わたしはカレヴィの腕から出てフレイヤをまじまじと見つめた。

男殺しっていったいなんだ、それどころかわたしは全くの逆を行っていた喪女だぞ。

カレヴィもそれに同意なのか、なにを言っんだという目でフレイヤを見つめている。

「それはあなたの勘違いでしょう。わたしは今まで異性にまったくモテませんでしたよ」

わたしがそう言くと、フレイヤは本当に驚いたようだった。

「ハル力様、それは嘘でしょう？」

「本当です」

力強くわたしが頷くと、フレイヤは片手で顔を覆って溜息をついた。

「ハル力様の世界の男性はどこがおかしいのですか？ それほどまでに魅力的なお体ですのに」

あ、フレイヤ、わたしが異世界人であることも知ってるんだ。

じゃあ、最強の女魔術師である千花繋がりってことも知ってるの

かな。

「どこかおかしいって……、普通だと思いますよ。わたしもモテる努力をしませんでしたし。……ただ、この大きすぎる胸はよくからかわれてましたけど」

「なんだと」

わたしの言葉に、なぜかいきなりカレヴィが気色ばんだ。
ど、どうしたの？

「それです。それが男性側のハルカ様に対する異性としての訴えだったのですわ」

「はあ？ ただのセクハラなだけじゃないですか？ それにこんなことは小学生……割と小さな頃から日常茶飯事でしたし。……ああ、そのせいか知らないおじさんに声をかけられるのもしょっちゅうでしたね」

「しょっちゅうって、それはおまえ危機感なさすぎだろう」
少し怒ったみたいにカレヴィが呆れた様子で言ってくる。

「うん、でもそれは全部千花が撃退してくれたから。千花はその頃からかつこよかったし」

「おまえはまた……」

途端におもしろくなさそうな顔になるカレヴィをおかしそうに見ながら、フレイヤが納得したように頷いた。

「そうですか、ティカ様が」

「うん、そう。千花はすごいんだよ。頭はいいし強いし優しいし綺麗だし」

あ、すっかりわたし王の婚約者らしくない、元の口調に戻ってるな。

「その上、最強の魔術師ですものね」

フレイヤはうんうんと頷きながらわたしの話を聞いてくれる。：

…うん、いい人だ。

「でしょう！？ 最初聞いたときはびっくりしたけど、でも千花ならそれもなんとなく納得できちゃうんだよね」

なんでも留学していたと思っていた一年間が、この世界で魔術を習っていた期間だったらしいけど、そんな短期間で最強とまで言われる千花はやっぱり並じゃない。

「ふふ、そうでしたか。では、もしティカ様が男性でしたらお好きになられてました？」

「……千花が？」

なんだか変なことを聞く人だなあ。

「おい」

不機嫌そうにカレヴィが声をかけてくるけれど、フレイヤは笑って受け流した。

うわあ、一国の王に対してフレイヤってば強心臓！。

ああ、でも聞かれたことに答えなきゃ。

「そうだね、千花が異性だったら好きになってたかもね。たぶんかなり理想かも」

そう言った途端、なぜか恥ずかしさがこみ上げてきてわたしは熱くなる頬を覆った。

——なぜ赤くなるんだ、わたし。

ああ、ここに千花がいなくてよかった。せつかく大切な友情を築いてるのに、変なやつだと思われちゃうよ。

「まあ、ふふふ。やはりそうなのですか。ティカ様は大変魅力的ですからね」

「うん」

わたしが頷くと、フレイヤはおかしそうに口元に手を当ててカレヴィを見る。

わたしもつられてカレヴィを見ると、苦虫を噛みつぶしたような変な顔をしていた。

……あれ、どうしたの？

「陛下、前途多難ですわね」

まるで吹き出すのをこらえるような表情でフレイヤが言うと、カレヴィは不機嫌な表情のまま、わたしを抱き寄せた。

「……時間はいくらでもある。必ず俺の方を向かせてみせる」
そう言つと、カレヴィはわたしに何度も口づけた。

……あのー、人前なんですけど。

そんなことを言つても、カレヴィが聞くわけないって分かつては
いるけどね……。

33話 説得、そして……

「……それで結局、この化粧はこれからしてもいいのかな？」

いつまでもキスしてくるカレヴィの腕からやっと思れて、わたしは聞いてみた。

「駄目だ」

「ええー、なんで？」

カレヴィだつて美しいつて言ってくれたじゃない。まあ、お世辞かもしれないけど。

「さつき言つただろう。他の男の目に留まるから駄目だ」

「目に留まつたつて、王の婚約者にいちいち声なんかかける人ないつて！」

それもわたしだよ？

とてもそんな勇者がいるとは思えない。

「甘いぞ、ハルカ。王の婚約者と分かつていて手を出す大馬鹿者はいるものだ。過去にはそれで婚約破棄になった例も僅かにだがある」

「え、そうなんだ。王の婚約者に手を出すなんて随分な豪傑だね」
わたしは正直言つて驚いた。

権力の頂点にいる王の婚約者を奪うなんて、カレヴィがさつき言つたみたいによほどの大馬鹿者か、大物かのどっちかだと思う。

「……それで、手を出した人はどうなつたの？」

「半年から一年程度の謹慎処分になった。なかには政務が滞るといふことで咎めなしという例もあるが」

「え、そんなに罰が甘いのか？」

よくて、鞭打ちとか国外追放とかだと思つてたから、カレヴィのこの言葉にはびっくりした。

「たまたまだろうが、それが侯爵や公爵の子息などだったんだ。いくら王とはいえ、身分の高い貴族をそうそう処分するわけにもいまい。王妃になつていればこうはいかないがな」

「そうなんだ。婚約者と妃では随分違ってくるんだね」

女としては、やることやってるのになんか納得できないけど。

「……だから、ハル力は以前のままでいい。惜しいが、ハル力はその化粧を落とせ」

「え、やだよ。王妃になるなら綺麗な方が国民受けもいいでしょ。大体実際にわたしを口説く人に会ってもいないのに、カレヴィ気にし過ぎ」

「そうでございますわねえ。ハル力様のおっしゃる通りですわ」

今まで楽しそうに傍観していたフレイヤが頷いて同意してくれた。

「いや、実際におまえに声をかけそうなやつがいるんだ。例えばリットンモア公爵家のアーネスとか」

「まあ、確かにあの公爵様ならハル力様にお声をかけそうですわね」
フレイヤ……、いったいどっちの味方なの？ てっきり一緒にカレヴィを説得してくれると思ったのに。

でも、わたしのその気持ちを汲んだように、フレイヤは言うてくれた。

「けれど、せっかく美しくなられる資質がありますのに、その機会を奪われてしまいますのはハル力様のおためにもなりませんわ。陛下はハル力様が美しくないという劣等感にこの先ずっと苛まれてもよろしいんですの？」

「いや、それは……」

カレヴィはフレイヤの言葉にうろたえている。……よしよし、いい感じだ。

「カレヴィはわたしが国民から不細工な王妃っていうそしりを受けても平気なの？ わたしはそれも仕方ないと思ってたけど、化粧で綺麗になれるならその憂いもなくなると思ってたのに」

「ハル力、おまえはけっして不細工などではないぞ。おまえは普通だ！」

「でも国民は多分そう見ないよ。カレヴィは男前だから、地味なわたしはきつと比べられて不細工って言われるよ」

「おまえが俺を男前と……っ」

……カレヴィ、わたしを説得してたんじゃないの？ なに感動してるんだ。

わたしとフレイヤが乾いた目でカレヴィを見ていたら、それに気づいた彼は咳払いをした。

「た、確かにそんな事態になったらおまえが気の毒ではあるが……」

「でしょ？ だからきちんとお化粧して、国民にお似合いのリップルだって分かってもらう必要があると思うんだ。カレヴィだってその方がいいと思うでしょ？」

「それは……、そうだが……」

カレヴィはすっかりさっきの勢いをなくしてる。よし、もう少しで説得できそうだぞ。

「そうでございますね。その方がハルカ様が国民に歓迎されますでしょうね」

フレイヤ、ナイスアシスト。

そこまで言われたら、カレヴィもわたしのこの化粧に反対できないだろう。

「く……っ、分かった。認める、認めればいいんだろう」

カレヴィが呻くようにそう言っていると、頭をかきむしった。

……なんだか、すごく不本意そう。

そんなに、わたしが男の人に口説かれるかもしれないというのが嫌なのかなあ。

わたしはカレヴィに寄り添うと、その片腕にしがみついた。

「わたしはあなたの婚約者だよ？ 少しは信用してよ」

「ハルカ……」

サービス精神からの行動だったけれど、カレヴィはなんだか感動してくれたようだ。

ぎゅむつとわたしを抱きしめるとカレヴィはわたしの顔のあちこちにキスをした。

……ああ、またこのパターンかあ。

わたしがそう思っているうちにもカレヴィの口づけは激しくなっていく。

「やはり、ハルカ様は男殺しですわね」

いや、フレイヤ、その認識は間違ってるから。

単に、カレヴィの好みが変わってるっただけだと思うよ。

「ハルカ様……素敵です。陛下とお似合いですわ……」

事の次第を見守っていた侍女達がほうつと溜息をついて、やはりカレヴィの暴走を見守っている。

……いや、見てないで助けてよ。

わたしは情性でカレヴィのキスを受け続けていたけれど、その後危うく寝室に連れ込まれそうになり、大いに慌てたのであった。

……野獣め、昼間っからいい加減にしろー！

34話 小悪魔

その夜はフレイヤから貰った月光蓮華香を焚き、カレヴィの希望でわたしはフレイヤから習ったお化粧をしたまま事に及んだ。

その結果、カレヴィは大盛り上がりでわたしは大変だった。

「いつもと違って新鮮だったぞ」

とかなんとかカレヴィはすっきりした顔で言ってたけど、わたしはぐったりだ。

どんなに疲れてても化粧は落とさなきゃいけないし、控えてた侍女を呼んでもよかったんだけど、閨の雰囲気のままそうするのはためらわれて、わたしは一人で洗面所に行って化粧を落とした。

「なんだ化粧を落としたのか」

幾分カレヴィはがっかりしていたみたいだけど、していた方がよかったのかな？

「カレヴィは普段のわたしじゃ嫌なの？」

「い、いや、そんなことはないぞハルカ」

……これで嫌だつていつたら口きいてやらないところだけど、カレヴィはどもりながらもわたしの機嫌を取りにかかってきた。

「化粧したまま寝ると、後でニキビとかできたりして大変なんだよ。」

……そういうわけだから、今後化粧してでは程々にしてね」

「……そうか、それはすまなかった。おまえの希望通り化粧している時は程々にする」

うーん、素直だなあ。

最近は前ほど無理なことしなくなってきたし、いい傾向だ。

「ん、じゃあ、今日はもう寝よつか。わたし疲れちゃった」

「俺はまだ疲れてないぞ。それにハルカは化粧を落としたのだから、もう少し可愛がりたい」

「……っ」

素直と思ったのは訂正。

やっぱりカレヴィは野獣だった。

「……だめか？」

そうやって、少し寂しそうに聞かれると、ものすごく困るんですけど！

わたしはカレヴィに愛されてて、そしてこれ以上ない待遇の身の上だ。

なのに彼の愛に応えられないわたしは、こういうところでお返しをするぐらいしか思いつかない。

「わ、分かった。少しならいいよ」

もしかして流されてるのかもしれないけど、これだけよくして貰ってるんだもの、そのくらいはしなきゃ駄目だよね……？

「そうか」

カレヴィは嬉しそうに笑うと、早速わたしにのしかかってきた。

でも、今回も少しどころじゃ済まなかったわけだけど。

そんなことがあって、次にわたしが気がついたのは朝だった。

「……もうどこが少しなのよ……」

「すまない。おまえがあまりにも可愛すぎて我を忘れた」

もう恒例となってきた共同の間の朝食時のやりとり。

治癒魔法をあまりかけられないわたしは、腰に湿布を貼って貰ってなんとか痛みをやり過ごしている。

「そこで思いとどまるのが人間でしょ。カレヴィってば野獣ーっ」
わたしがそう言うと、周りに控えていた侍女達が一斉に吹き出した。

「……野獣」

わたしの言葉にカレヴィはショックを受けたみたいだけど、これを野獣と言わなくてなんと言う。

「まあまあ、お二人とも仲のよろしいことで」

ゼシリアがにこやかに言ってくるけど、本当に仲が良いように見えるんだろうか？

カレヴィを見ると「そうか？」となんとなくにやけていて、満更でもなさそうだ。

「少し早いのですが、ハルカ様にお目通りを希望なさっておられる方がいらっします」

ゼシリアの報告にカレヴィがうんざりというような顔をした。

「……またか。ハルカはまだこちらにきて間もないのだ。あまり今から疲れさせるのは良くない。帰ってもらえ」

それ、一番わたしを疲れさせているカレヴィが言うこと？ なんとなく納得できないんだけど。

でもカレヴィは眉をちよつと顰めていて、わたしのことを本気で心配してくれているみたいだ。

「……それが、リットンモア公爵家のアーネス様なのですが」

そこでカレヴィは飲んでいたコーヒートを気管に詰まらせたらしく思い切りむせていた。

わたしは慌てて立ち上がると、カレヴィの背中をさすった。

「だ、大丈夫？」

カレヴィはひとしきり咳こんだ後、なんとかそれも治まったようだ。

「ああ、大丈夫だ。ハルカすまない」

肩に手をかけて覗きこんだわたしに、カレヴィは口づけしてきた。……ちよつと、そこキスするところ？

わたしがちよつと首を捻りながら席に戻ると、カレヴィは「アーネスがハルカに会うなら俺も立ち会う」と言った。

まあ、カレヴィやフレイヤが言うところによると、女癖の悪い人みたいだしその方がいいんだろうか。

それに随分と偉い人みたいだし、粗相のないようにカレヴィに付

いて貰った方が助かるかもしれない。

「うん、お願い」

わたしが頷くと、カレヴィは終わった食事を片づけさせ、リットンモア公爵を受け入れる準備をさせた。

「ねえ、その公爵様はおいくつなの？」

「俺と同じ年だ」

え、ということは二十四歳か。

「……いいか、ハルカ。絶対に奴に見とれるな。口車に乗るな。惚れるな」

がしつと肩を掴まれて真剣に訴えられたけど、その内容はなんだ。

「……ふうん、格好いいんだ」

カレヴィの言葉から総合して答えを導き出したわたしに、すかさず彼から「絶対に惚れるな！」とビシツと指を指されて言われた。

「……いや、そんなの会ってみないと分からないし」

なんとなく必死なカレヴィがおかしくてつい言ってみる。

「会うな！」

「……冗談だよ。カレヴィ、嫉妬も程々にしないと嫌いになっちゃうからね？」

「く……っ、分かった、認める！ ハルカ、おまえは悪魔か！」

えー、カレヴィの好意につけ込んでるのは本当だけど、悪魔はなインじゃない？

だけど、やっぱりこの嫌いになる攻撃は効果てきめんだ。

そんなことを思っていると、モニーカが言ってきた。

「まあ、陛下。それをおっしゃるのならハルカ様は『小悪魔』ですわ」

すると、ソフィアもちよつと興奮したように言ってきた。

「まあ、陛下のお心をこれほどまでに乱されるハルカ様にぴったり
の表現ですわ」

「まああ、本当ですわね！」

イヴェンヌも頬を染めながらそれに同意した。

……いや、それはわたしにもっとも遠い表現じゃないの？
わたしはこの間まで喪女で……、と思ったけど、段々自信がなくなってきた。

わたしがカレヴィを振り回しているのは本当だからだ。

「そうか、小悪魔か。……ぴったりだな」

だから、わたしを見下ろしながらカレヴィが言ったことにも反論はしなかった。

いや、言いたいことは山ほどあったけどね。

35話 公爵の宣言

目の前に現れたのは、金色から下の方へ次第に銀に変わっていく豪奢な髪を背中の中程まで延ばした男性だった。

瞳の色は青みがかった紫。

繊細かつ優美なんだけど、どこか男性的なところも持ち合わせている顔立ち。はつきり言って超美形。

すらりとして見えるけど、鍛えているのがなんとなく窺える体つきをしている。

……っていうか、全身から立ち上るような色気が凄い。

なるほど、ゴージャスっていうのはこういう人のことを言うんだなーとわたしはしみじみ思った。

漫画描きからしたら、ぜひデッサンさせてくださいと頼みたい人種であることは間違いない。

「ハルカ、見とれるな」

隣に座ったカレヴィがこっそり声をかけてきた。

いや、別に見とれてた訳じゃないけど。

単に人間観察をね……、と思ってたら、あちらもこちらを観察しているようだった。

ふうん、興味があるのはお互い様ってことだね。

「お初にお目にかかります、ハルカ嬢。アーネス・クレイル・レグ・リットンモアと申します」

恭しく手に口づけられて、貴婦人への礼を取られる。

「ハルカ・タダノです。よろしく願います、リットンモア公爵様」

この挨拶、普通すぎたかな？

でも目の前の公爵様は「はい」とにこやかに微笑んでいるので問題ないようだ。

「別によろしくなくていい」

隣に座っているカレヴィがむすつとして言った。……ちよつと態度悪いよ。

わたしがカレヴィにそう言おうとした途端、目の前の公爵様が口を開いた。

「おやおや、カレヴィは噂に違わず随分とハルカ嬢にご執心のようだ。こんな普通の挨拶でご機嫌斜めとは」

え、王であるカレヴィを呼び捨て？

それも毒舌付きで。

わたしが思わず瞳を見開くと、公爵様はわたしの戸惑いに気づいたらしく、ああ、と言った。

「彼とは母親同士が姉妹なんですよ。歳も同じですし、わたしはカレヴィの友人なのです」

「あ、そうなのですか」

わたしが思わず息をついてにつこりすると、目の前の公爵様もにつこりする。

……うーん、目に眩しいぞ。

彼のこの笑顔を目にしたら、ご婦人方がさぞかし騒ぐんだろうなあ。

「ハルカに色目を使うな、アーネス」

「……ちよつと、カレヴィなんなの？ 普通に話してるだけでしょ」

わたしはカレヴィの嫉妬深さに段々いらいらしてきた。カレヴィがこんな調子じゃ、異性には誰とも話せないよ。

「おまえが無邪気に笑いかけたりすると、こいつが調子に乗る。釘を刺しておいてちよつとよいくらいだ」

「あのねえ、さっきも言ったけど本当に嫌いになっちゃうよ？ わたし、嫉妬深い人嫌い」

「ハ、ハルカ……ッ」

いくらかうんざりして言うと、カレヴィはショックを受けたようだ。ちよつと大袈裟なくらい動揺している。

けど、カレヴィと一緒に会ったのは実は失敗だったかも。

いちいちこの公爵様に突っかかっているようじゃ、まともな会話が出来るとは思えない。

そう思ってたしがカレヴィを目で制していると、やがてくすくすという笑い声が聞こえてきた。

「本当にカレヴィはあなたに骨抜きなんですね。夜の習いからそうらしいですが、以前の彼からは想像もつきませんよ」

他人、それも男性から「夜の習い」のことを口に出されて、わたしは思わず赤面する。

いや別に赤くなることもないんだけど、侍女以外でこのことを言われたのは初めてだったんで妙に恥ずかしかったんだ。

「おや、女性個人には興味のなかったカレヴィを落とした方にしては随分と可愛らしい」

「おい、アーネス」

さらに真っ赤になったわたしをカレヴィが横目で見て、公爵様に文句を付けようとする。……が、この公爵様の言葉はここで止まらなかった。

「……本当に。昨夜あんな艶めかしい声でお啼きになっていた方と同一人物とは思えませんよ」

「え……」

おかしそうに笑う目の前の公爵様にわたしは瞳を見開くしかなくった。

まさかこの人、昨日の夜の習いのあんなことやこんなことまで聞いてたの？

控えの侍女や近衛兵士は仕方ないにしても、いくらなんでもやりすぎじゃない？

全身真っ赤になる思いで、わたしは公爵を睨みつけた。

こんなこと言ってくる人に、もう様付けなんかいるもんか！

「おやおや、そんな可愛らしい顔で睨んでも怖くありませんよ、ハ

ル力嬢」

憎たらしいほどにこやかに公爵は笑うと、再びわたしの手を取った。

……ちよつとなにする気？ 挨拶ならさつき済んだでしょ？

わたしはとつさに手を引つ込めようとするけれど、公爵にがつちり掴まれて無理だった。……ちよ、ちよつと！

公爵がふつと笑ってわたしの手に再び口づけたかと思うと、指と指の間の柔らかい部分をちろりと舐めた。

「ひゃんっ」

わたしは思わず変な声を出して、恥ずかしいほどびくりと反応してしまった。

ちよつと、なにをするのーっ！？

思わず涙目になって公爵を睨みただけれど、相変わらず目の前の男はにこやかに笑っている。

「ハル力嬢はとても敏感なのですね。正直ここまでとは思いませんでした」

……わたしもこんなに公然とセクハラされるとは思いもしなかったよ！

と叫びたいけど、肝心のわたしは真っ赤になったまま、あ、とかう、とか呻くだけ。

「おい、アーネス。ハル力の手を離せ。よくも俺の前でそんなことを」

忌々しそうにカレヴィが公爵の手をわたしから振り払ってくれた。

うう、カレヴィごめん。嫉妬深い人嫌いとか言っちゃって。カレヴィの言うことは正しかったよ。

わたしは速攻でカレヴィの後ろに回り込んでセクハラ公爵から身を隠した。

「……まあ、『冗談はこれくらいにしておいて」

こ、この心臓に悪いやりとりが冗談！

この公爵、ふざけすぎてる！

「あ、あなたねえ……っ」

ふるふると体を震わせて抗議しようとしたわたしは、公爵に「あ、夜の習いを外で聞いていたのは本当ですよ」と言われ、再び真っ赤になって口をぱくぱくするしかなかった。

「おい、やりすぎだろうアーネス。ふざけるのもいい加減にしろ」

カレヴィはわたしを背にかばって公爵に猛抗議する。うう、すっかり忘れてたけどカレヴィって頼もしかったんだね。

「……ふざけているのはカレヴィ、君もだろう。君はこの女性に溺れすぎてる。このままだと政務にも滞りが出てくるぞ」

え、とカレヴィを見ると図星だったらしく、彼は苦々しく顔をしかめている。

「婚約期間中なんだ。この期間くらい見逃せ」

「この期間中で済めばいいけどね。それに、まだ婚礼も挙げていないうちから婚約者のために離宮建築なんて聞いたこともない。カレヴィ、君はもう少し自重すべきだ」

そ、それは確かに自重すべきだね、うん。わたしにそんなお金かけないでほしい。

「カ、カレヴィ、わたし離宮なんていいよ」

思わずカレヴィにしがみついてしまいがら、わたしは彼に懇願する。

「なにを言う。ハルカ、俺は約束しただろう」

「わたしはそんな贅沢したいわけじゃないよ。今のままで充分良くして貰ってるし」

「それでは俺が納得しないと云っただろう。おまえは物を欲しながらさすぎる」

「え、でも貰ったじゃない。高そうなストールとか」

普段の衣装とかでも結構使っているみたいだし、婚礼でも相当お

金がかかるんだから、これ以上の散財は正直やめて貰いたい。

「……だが、おまえが実際に欲しかったのは腕力バーだ」

「……腕力バー？」

公爵はカレヴィの言葉に瞳を見開くと、次には体を折って大爆笑した。

「……ちよつと笑い過ぎじゃない？」

腕力バーのどこが悪いんだ。

「な、なるほど、ハルカ嬢に物欲がないのはよく分かったよ」

「分かったのならこれで引け、アーネス」

「……いや、でも引けないね。カレヴィが離宮を今から建てる気にいるのは本当だし。彼女に溺れすぎているのも事実だしね」

ようやく笑いを収めた公爵が真面目な顔になる。

そうすると、緊迫した空気がこの場に流れた。

公爵はその中で溜息を一つ付くと、カレヴィを真っ直ぐに見据えて言った。

「カレヴィ、君がこのまま政務をおろそかにするなら、わたしは彼女を君から奪うよ」

36話 言葉責め

あれからカレヴィはリットンモア公爵に半ば脅されるようにして執務に入ったけれど、テーブルに座ってコーヒーを飲んでいるわたしの目の前にはなぜかその公爵が居座っていた。

いや、一回追い出したんだよ？

だけど、公爵はうまく侍女を懐柔して（たらし込んで）再び私の前に現れるというしたたかさを見せた。

……わたしにこれ以上なんの用があるっての？

カレヴィはきちんと執務に入ったからもうわたしには用はないでしょ。

「ハル力嬢の世界の菓子はおいしいですね。甘い菓子しか知らないわたしには驚きですよ」

どこから貰ってきたのか、公爵はわたしが大事に取っておいたポテトチップスの袋を抱えてそれを勝手に食べていた。

……わたしが楽しみにしていたコンソメ味！

こんなことになるって分かってたら、もっと買っておいたのに。

「いいですから、その袋返してもらえます？ わたしも食べたいんですけど」

だいたい袋抱え込んで独り占めって、大貴族のくせして意地汚さすぎる。

すると、公爵はわたしの傍に寄ってきて摘んだポテチを目の前に差し出した。

「はい、ハル力嬢」

なに、差し出されたこれを食べると？

つまりこれは「はい、あーん」だよね？

そんなカレヴィが見たら激怒しそうなこと、できるわけないよ。わたし達のその様子をモニター力達がはらはらしながら見守ってい

る。

「……結構です。その袋さえ返していただけたら、大皿に盛って自分で取りますから」

「いやいや、遠慮せずに」

そう言うつと、公爵はわたしの口に無理矢理ポテチを当ててきた。

……ちよつと！

わたしは唇を引き結んでポテチを拒否。

「ハル力嬢は結構強情ですね。これを食べたら返して差し上げますよ」

甘ったるい笑顔と共に言われたけど、無視。

ああ、でもさっきからポテチのいい匂いがしてたまらない。ポテチの誘惑、恐るべし。

それでもわたしは頑張った。

「……仕方ないですね。それではこれはわたしが食べるということで」

そう言うつと、公爵はさっきまでわたしの口にあってていたポテチに意味ありげにキスすると、それをにこやかに食べた。

「これでハル力嬢と間接的に口づけたことになりますね」

……つて、間接キスカよ！

わたしは突然柄が悪くなりながら、公爵のあまりの気障さに鳥肌を立てていた。

「……わたしは間接キスごときでどうこう言うほど初じゃありませんよ」

いくら喪女だったといつても、それくらいの耐性はある。

こちらの純粹培養の姫君とかだったら真っ赤になってるかもしれないけどね。

わたしがすげなく返すと、公爵は眉を上げて元のテーブル席に戻っていった。……しっかりポテチの袋も持って。

ポテチに未練はあるけれど、仕方ない諦めるか。

わたしは溜息をつくつと、皿に盛られたチョコを口にした。

すると、口いっぱい高級チョコレートの風味が広がる。ああ、おいしい。

ポテチは公爵に奪われたけれど、ここのチョコもおいしいからまあいいか。

ポテチはまた向こうに行った時に多めに買っておけばいいし。

そんなことを思いながらコーヒーを飲んでいたら、公爵がまじまじとわたしを見てきた。

「……なんですか？」

「いや、ハルカ嬢はコーヒーにミルクとか砂糖を入れなくても平気なんですね。大抵の女性はその苦みが苦手なんですが」

……ああ、そういうことね。

「いつもは入れますけど、今回はカロリーの高いもの取ってますから」

チョコとか、食べる予定だったポテチとかね。

油断していると太るから、この後庭園へ散歩に出る予定だ。

「カロリー？」

公爵が不思議そうにわたしを見てくる。

あ、そうか。ここにはない単位だからか。

「熱量の単位です。えーと、力の源の単位の一つというか」

う、この辺りの説明はちょっと怪しいな。これで公爵が分かってくれるといいけど。

「ああ、そういうことか。大体分かりました」

どうやら公爵が理解してくれたらしいのでわたしは胸を撫で下ろした。

「理解していただけてよかったです」

ほっとした反動でわたしはすっかりポテチの恨みも忘れて公爵に笑いかけてしまった。

すると公爵は少し瞳を見開いてわたしを見た。

そして、色気のある笑顔で言ってくる。

「……ハルカ嬢は、そんな顔をするとても愛らしいのだね。とて

もよい笑顔だ」

「え、あ……？」

愛らしいなんて言われたことのないわたしは、思わずかっと赤くなってしまった。

いや、お世辞だろうから照れることはないんだろうけど、さすがに高級娼館の主のフレイヤが認める女たらしなことはある。

なんというか、この公爵ここぞというところの褒め方が凄くうまいんだ。

「あ、ありがとうございます？」

うつ、褒められ慣れてないと、こんな時にうまく流せなくてつらいなあ。

こっちに来てからカレヴィに可愛いとか言われるようになって、少しは耐性が付いたと思ったんだけど。

よく思い返してみると、カレヴィ割とあっさり言ってくるんだよね。

それでついわたしも流しちゃってるんだ。

よし、今度からカレヴィに熱烈に言って貰って練習しよう。

……もちろん、夜じゃない時にね。

そうじゃないと別の意味でカレヴィ盛り上がりそうだから。

わたしがそうだった時を想像して溜息を付いていたら、ふいに近くに人の気配を感じた。

このフェロモン溢れる気配は公爵に間違いない。

「……なんですか」

「いや、赤くなったかと思ったら考え込んでいるから、どうしたのかと思って」

「いえ、少し言葉責めについて考えていたんです」

そんなことをついすっかり口にしてしまったのはまずかった。

「ふうん？」

公爵はわたしの隣の席に座ると、わたしの両手を取った。

……ちよっと、塩味ならまだともかく、コンソメ味のポテチを食

べていた手で……と思ったけど、公爵はちゃんとおしぼりで綺麗に拭いていたようだ。

「ハルカ嬢はカレヴィではご不満かな？　なんなら、わたしが直にして差し上げてもいいが」

いやいや、夜のカレヴィの方は充分恥ずかしいですよ……って、なんでわたしの手を撫でてるんだあーっ。

絶妙なその感覚に、背中がぞくぞくして思わず身を振ると、公爵は目を細めて笑った。

「おや、ハルカ嬢はこんなことでそんなふうになるんですか？　カレヴィという婚約者がいるというのに他の男に手を撫でられたくらいではしたない方だ」

耳元でぞくぞくするような声で囁かれながら手を撫でられて、わたしはみつともなくそれに反応してしまう。

やばい、こいつはやばい！
今まで会ったこともない人種だ！

なんとか公爵から距離を取ろうにも、「ふふ、逃がしませんよ？　可愛い人」などという恐ろしいことを言つて、公爵はわたしを離さない。

そのうちに公爵は囁きと共に耳に息まで吹きかけてきて、わたしは飛び上がってしまった。

ちよっ、いやだあああっ！

というか、侍女の誰でもいいから見てないで助けてよーっ！

そのわたしの祈りが通じたのか、ゼシリアがこの公爵のおふざけを止めてくれた。

「いい加減になさいませ、アーネス様。あまりにお戯れがすぎますと、わたくしは陛下にこのことをご報告しなければなりません」

「……それは困るね」

そこでようやくわたしは公爵から解放されたんだけど、今まで翻弄してくれたお礼に彼の顎をグーで殴っておいた。

「……っっ」

そして公爵が怯んだその隙に、わたしは脱兎のごとく自分の居室から飛び出す。

「あ！ お待ちください、ハルカ様！」

イヴェン又達の叫びが後から聞こえてきたけれど、わたしは待たなかった。

だって、恥ずかしくて仕方なかったんだよ。

だからちよっと放っておいてほしい。

しばらくすれば立ち直ると思うから。……多分。

37話 モテ期到来

「ハルカ様、お待ちください！」

後ろから近衛兵士の声が追いかけてくるけど、わたしは止まらなかった。

全速力で廊下を駆け、最初の角を曲がろうとしたところで誰かにぶつかってしまった。

「あっ！」

「うわっ」

結局わたしはその人物に抱きつく形で止まった。

「ご、ごめんなさいっ」

……あ、れ……？

慌ててその人から離れようとして、わたしはあることに気がついた。

「……なにをやってるんですか、あなたは。仮にも王の婚約者だといつのに慎みのない」

色白な頬を染めながらわたしを怒る銀髪のその人は、見た目十代後半でカレヴィに似ていた。

「あ、あなた、ひよっとしてカレヴィの……」

「……弟のシルヴィです。それより、廊下を走るなど淑女としてはもつてのほかですよ」

「ご、ごめんなさい、シルヴィ君」

わたしは頭を下げて初めて会うシルヴィ君に謝った。

カレヴィには弟をそのうち紹介すると言われてたんだけど、こんな出会いは不意打ちすぎてわたしはついうろたえてしまった。

……でも、王族とかそれに近い人が住んでるフロアなんだから、いつ会ってもおかしくなかったんだよね。わたし、全く不用心だ。

「……シルヴィ君はやめてください。シルヴィでいいです」

「あ……、うん。こんな形でなんだけど、よろしくね、シルヴィ」

「はい」

領きつつも、まだ若干機嫌悪そうなシルヴィにわたしはちょっと小さくなってしまった。

ああ、兄王の婚約者がこんながさつな女だと分かって不満なのかなあ。

「シルヴィ、そんな態度じゃハルカ様に失礼だろう」

見かねたのかシルヴィと一緒にいた同じぐらいの少年というか金髪青年が咎めるように言った。

……あれ、この人も見たことのあるような顔してる。

「あの……、どなたですか？」

「……ああ、失礼しました。僕はリットンモア公爵家のイアスと申します。以後お見知り置きをお願いいたします。僕もイアスとお呼びください」

淑女への手の甲への口づけを受けながらわたしは思わず言ってしまった。

「リットンモア……あ、あの公爵の？」

「弟です。兄にはもうお会いになったんですね。兄はハルカ様にとっても興味があるようでしたから」

感じよく微笑みながらイアスが言うのをわたしは愛想笑いで受け止めていた。

……興味ねえ。

あれって、そうなんだろうか。

どちらかというと、政務を邪魔する女に嫌がらせをしにきたようにしか見えないんだけど。

それを彼の弟にそのまま言うわけにもいかないので、わたしは適当にお茶を濁して言った。

「……公爵の場合、ただ毛色の変った女が珍しいだけだと思うんだけど」

「それはあるでしょうね。異世界出身で最強の魔術師の友人、おま

けに国王を誘惑する女ですからね」

途中まではともかく、最後のシルヴィの揶揄するような言葉にわたしは思わずむっとしてしまう。

「シルヴィ、言い過ぎだ」

見かねたようにイアスがシルヴィを諷める。

「わたし、カレヴィを誘惑なんてしてない」

それに、どっちかって言うそれは逆なんだけど。

盛んに好きだ、愛してるって言うてくるのはカレヴィだし。

でもシルヴィはわたしに敵愾心を露わにしてるし、言っても信じてもらえそうにない雰囲気だ。

「兄王に政務を疎かにさせたり、婚礼前から莫大な金額を使わせたりすれば充分ですよ」

「それは……」

それを言われると、わたしは黙るしかない。

確かに傍目にはわたしがカレヴィをたぶらかしてるように見えるだろう。

「シルヴィ、ハルカ嬢にはそんな意思是全くないよ。今回の件は完全にカレヴィの暴走だ」

いつの間にわたしを追いかけていたのか、リットンモア公爵が不意に現れた。

あ、わたし思わず彼を殴っちゃったんだっけ。

……まさか、わたしに仕返しをしに追いかけてきたとかなないよね。殴られても仕方ないようなセクハラしたのはあっちなんだし。

思わずひきつった顔で公爵を見ると、彼はにっこりと笑って言った。

「女性に拳で殴られたのは衝撃でしたよ。……まあ、このお礼は後でしましょうか、ハルカ嬢」

ひいっ、完全に根に持たれてるよ！

わたしはムンクの叫びよろしく両頬を挟んで声にならない声を上

げる。

「……殴られた？ ひょっとして、兄の婚約者にもう手を出したのか、アーネス」

呆れたようにシルヴィが公爵を見たけれど、肝心の彼は肩を竦めてなんでもないことのように言った。

「ちよつとハルカ嬢に手を撫でさせてもらっただけだよ。……それに、あんな無防備な発言をされたらつい手を出したくもなるよ」

「……あなたは王の婚約者だというのに、誰彼構わず誘っているのか」

ちよつ、シルヴィに軽蔑したように見られたよ！ それ、もの凄い誤解だって！

「誘ってないっ」

わたしは声を大にして主張したけど、まだシルヴィは胡散臭そうにわたしを見る。

「おまけに、その時のハルカ嬢の反応がまた可愛らしくて……」

「ちよおつとおおー！」

わたしは恥ずかしさも手伝って涙目になって叫んだ。

「そんな可愛い顔で見ないでください。思わず抱きしめたくなくなってしまっじゃないですか」

そう言いながら公爵の手が伸びてきて、わたしは思わず後ろに飛びすさってしまった。

すると、わたしは誰かにぶつかって抱き止められた。

「兄上、ハルカ様をからかわれるのはそれくらいにして差し上げてください。ハルカ様が引いてますよ」

あ、ぶつかつたのイアスだったんだ。

「ご、ごめんね、イアス」

イアスの腕から出てわたしが謝ると、彼は首を横に振った。

「いいえ。今のは兄が悪いですし、ハルカ様が謝られる必要はありません」

「ハルカ嬢に飛び込まれて、おまえは役得だしな」

「な、なにを言っているんですか、兄上！」

真っ赤な顔で突然イアスが公爵に反論したのでわたしはびっくりした。

シルヴィも大袈裟なくらいの反応を返したイアスを驚いたように見ている。

「イアス、その反応はなんだ。まさかこの女のこと好きなのか」

「それは……」

イアスに赤い顔で見られて、わたしもついつられて赤くなる。

「しょ、初対面だし、そんなことがあるわけないでしょう？」

うう、いつたいなんだこれ。

喪女だったわたしには分不相応すぎる話題だ。

やつとのことですう言ったのに、公爵は笑って簡単にそれを否定してくれた。

「それはハルカ嬢が知らないだけだよ。イアスは結構前からハルカ嬢のことを気にしていたけれどね」

「兄上っ！」

更に真っ赤になったイアスが公爵に叫ぶ。

それをかわすように、実に楽しそうに公爵は笑った。

わたしはといえば、シルヴィと同じようにただ呆然とするしかない。

なんなの、この展開。

わたしはイアスと会ったのはこれが初めてだし、いつtainなにがなんだか。

それにイアスはどこでわたしを見たんだ。

あ……、それに公爵は以前からって言ってたけど、イアス、わたしの普通顔も見てたってことだよな？

それでこの反応ってなに？

もしかして、イアスってカレヴィ以上の物好き？

いきなりのモテ期到来にわたしは呆然としながらイアスを見る。
すると、彼は焦ったように早口で言ってきた。

「こ、これは僕が勝手にあなたを想っているだけです、ハルカ様はどうかお気になさらないでください！」

こ、これって、完全に告白っていうやつだよ……？

気にするなって言われても、やっぱり無理。イアスを意識しちゃって、自然と顔が熱くなっちゃうよ。

「う、うん、ごめんね。突然のことで驚いたけど、わたしを好きになってくれてありがとう……」

う、言いながら無茶苦茶恥ずかしくなってきた。

わたしはこの間まで喪女だったんだよ、こんな展開に慣れなくつても仕方ない。

そう思いながら、わたしは熱くなった両頬を押さえて俯いた。

38話 一番良い方法

「は、はい……」

そう言うイアスの顔は、わたしが俯いてるため見えないけど、たぶん彼も赤くなってるんだろうなあと予想。

なんだかお見合いのような空気の中、公爵はくすくす笑って、意味ありげにわたしを見た。

「ハルカ嬢は本当に可愛らしい。……カレヴィやわたしと三つも歳が上とはとても思えないな」

……だから、可愛いなんて言われ慣れてないんだからやめてほしい。

そう言おうとして、わたしははた、と気がついた。

今、公爵わたしの歳をさりげなくばらしたよね？

それって、わたしを好きだって言ってたイアスにはショックじゃないんだろうか。

と思っでイアスを見たら、特に驚いている様子はない。

あれ……？

「ひょっとして、わたしの本当の年齢を知ってたの？」

恥ずかしかったのも忘れてした問いに、イアスは真面目な顔で頷いた。

「はい、兄から聞きました。ティカ様と同年だそうですね」

それでわたしのこと好きって、イアスって物好きって言うよりも変人……？

いくらでも可愛い女の子が選り取りみどりそうなのに、歳がたぶん十は離れた冴えないわたしを好きになるって、どう考えても普通じゃない。

わたしがイアスに対して失礼なことを考えていると、公爵がたし

なめるように言った。

「イアス、あまり女性の歳のことを言うものじゃないよ」
いや、事の発端は公爵、あなただから。

「アーネスが最初に言い出したんだろうが」
呆れたように腰に手を当ててシルヴィが言う。

「ああ、そうだったね」

のほほんとそんなことを言っている公爵にわたしは呆れかえってしまふ。

「絶対わざとでしょ、公爵」

「公爵はよそそしいのでやめてください。アーネスでいいですよ」
まあ、特に親しくする気もないけど、本人がそう言っているんだし、わたしは頷いて了承した。

「アーネス、ひょっとしてわたしの歳のこと周りに言っただけなの？　いろいろと都合が悪いから、できればやめてほしいんだけど」
本当の歳が知れたら、夜の習いの前に身が清らかだったか周りに疑われかねないし、ちよつとまずい。

でもまあ、今となつてはカレヴィの習いを受けた身でもあるし、それなりの言い訳もできるだろうけど。

「カレヴィのごく周辺しか知らせてないから大丈夫だよ。ハル力嬢は安心してほしい」

……まあ、その範囲だったらずくはないだろうけど。そんなこと言うのなら、最初からばらすなつての。

「一応、二十歳ってことになってるから、その辺りは本当に気をつけてね。カレヴィにもそんな歳の女を王妃にするのかって追及が行くかも知れないし」

わたしが真剣に言うのと、アーネスはその眉を上げた。

「そんなことは、カレヴィには痛くも痒くもないよ。むしろそうだな、君がカレヴィの婚約者でなくなることの方が痛いかもしれない」
「え……、やっぱり、王妃にするにしては歳が行きすぎてるのがま

ずくて？」

年齢詐称は確かにいけないけれど、当のカレヴィがそんなに気にしている訳じゃなかったから、わたしもそのことはあまり気にならなかったんだよね。

元々、この婚約には政略的な要素が強かったし。

「いや、カレヴィが君に溺れすぎているのがまずいんだ。このままの調子で行くと、元老院から女に溺れて政務を疎かにした無能な王という烙印を押されてしまう可能性が高い」

「元老院……？」

なんか元の世界でも聞いた単語だな。

「頭が固くて、いろいろと難癖をつけたがる年寄り集団だ。……奴らの地位が無駄に高いのが厄介だな」

それまで黙っていたシルヴィが鼻の頭に皺を寄せて言った。

「うわ、本当に嫌そう。よっぽどその元老院での嫌ってるんだな。」

「その厄介な集団に早くも目を付けられてしまったのが、まずかったかな。今日辺り、カレヴィのところに元老院からその抗議書が回ってくると思う」

「え……」

わたしは愕然として、目の前のアーネスの顔をまじまじと見つめてしまった。

だから、アーネスはカレヴィにわたしを奪うとか、挑発的なことを言ったの……？

「婚約期間中の執務の滞りはある程度目を瞑られるけれど、今回の場合は婚約期間中に離宮建築の為に巨額が動いてしまったのが痛かったな」

アーネスから聞くことは、初めてのことばかりで、わたしはうろたえるしかない。

事態がそんな大事になってるなんて知らなくて、わたしは思わず震えてしまった。

「イアスが心配そうに「ハルカ様」と声をかけてきたけど、わたし

はアーネスから目を離せなかった。

「そ、それ、放っておいたらどうなるの……？」

「カレヴィが黙って抗議書を受けるはずはないだろうし、下手したら彼は元老院に王座から引きずり降ろされる可能性がある」

「う、うそ……」

わたしと婚約したせいで、カレヴィがそんなことになるだなんて、信じられない。

そんなに元老院の意見は王の地位も危うくさせるほど強力なんだろうか。

「嘘じゃない。あなたが現れたせいで兄王の立場が悪くなったんだ」
呆然とするわたしをシルヴィが睨んで責めてくる。

そうか、そういう経緯があるなら、彼はわたしに敵意を持っているんだ。

「シルヴィッ」

iasが諫めるように彼の名を呼んだけど、シルヴィはそれに反応しなかった。

確かに彼の言葉は真つ当だ。わたしは彼に詰られても文句は言えない。

いくらでもわたしはカレヴィを説得できる立場にいたのに、今までそれをほとんどしてこなかったんだから。

「……まあ、彼が今までこれ以上なくらいに政務に励んでいたのを知っているだけに、わたしはそんなことには絶対させないけどね」

アーネスが言うように、確かにカレヴィは今まで良い王様だったんだろう。

わたしに会うまでは執務に明け暮れてたっていうし、自分の結婚は政略でいいって割り切ってたくらいなんだから。

「……わたし、どうしたらいいかな？　わたし、カレヴィの邪魔になりにたくないよ」

今までの破格的な待遇を考えると、本当にわたしの存在自体がカレヴィに悪いとは思えない。

続けるような気持ちでアーネスを見ると、彼は少し溜息をついた。

「君には欲なんてないのに、本当に君は人がいいね。……カレヴィが君にそこまで入れ込むのも少し分かる気がする」

「……そんなことないよ」

そんなにいい人だったら、きつともつと彼の立場を考えてた。

カレヴィに申し訳なくて、泣きそうになるのを心の中で叱咤しながら、わたしはアーネスの次の言葉を待つ。

……多分、彼がこのことに対して一番いい解決方法を持っていると思うから。

皆の視線を受けたアーネスは顎に手を当てて少し考え込むと、やがて言った。

「さっきも少し触れたけれど、一番良い解決策はある。……君がカレヴィの婚約者を辞退することだ」

39話 花嫁争奪戦

わたしがカレヴィとの婚約を辞退する……？

わたしは半ば呆然としながら、目の前のアーネスを見た。

彼はふざけた様子もなく、真剣な表情をしている。

「で、でも、そうしたらこの国と千花との繋がりがなくなっちゃうよ。一応、政略のための結婚だし」

——そう。

カレヴィが最初なんとも思っていないわたしとの結婚に乗り気だったのは、そういった理由があったからだ。

わたしは過去にも比類無き最強の魔術師である千花のたぶん一番の友人だ。

そのため、わたしの政治的利用価値はかなり高い。

自分で言うのもなんだけど、それをみすみすこの国が見逃すとは思えない。

「その点なら大丈夫だ。君がこの国の有力貴族なりと婚礼を挙げれば、国益は充分にある」

「……そうなの？」

なんだ、結婚するのは王様以外でも大丈夫なの？

よく分からなかったけれど、そういうものなんだろうか。

「ああ。それなら、兄に次ぐ地位の俺があなたの相手としては一番いい」

「えっ!？」

いきなりシルヴィがそんなことを言い出したのでわたしはびっくりして聞き返してしまった。

「……なんですか、その反応は。俺じゃ不満ですか？」

どうやらわたしの態度が彼の機嫌を悪くさせてしまったらしく、

眉を顰めてシルヴィが尋ねてきた。

「う、ううん、そうじゃないけどー……」

「けど、なんですか」

言いよどむわたしはシルヴィにすかさずつっこまれる。

う、シルヴィに睨まれてるよ。

……仕方ない、正直に言ってしまうおう。

「だってシルヴィ、わたしのこと嫌いでしょ？ それにわたしよりだいぶ年下そうだし。……そんな女と結婚するの嫌じゃない？」

わたしがそう言ったら、シルヴィがちょっと驚いたように瞳を開いた。

「……別に嫌ってませんよ」

「嘘。わたしのこと、カレヴィを誘惑する女って言ってたじゃない」
あれはどう考えたってわたしのことを嫌っているようにしか取れないぞ。

「それは……」

わたしがむっとしてシルヴィを見ると、彼は少しばかりうるたえていた。

「まあ、ハルカ嬢、そんなにシルヴィを苛めないでくれないかな」

「ええ？ どっちかって言うと、苛められたのはわたしの方でしょ？」

なんで、わたしが苛めたことになるんだ。

アーネスに窘められるように言われて、わたしはまたむっとする。

「……申し訳なかった。俺が言い過ぎました」

プライドが高いとばかり思っていたシルヴィが謝ってきたのでわたしはびっくりして彼をまじまじと見てしまった。

シルヴィはわたしから目を逸らすようにそっぽを向いてたけど、その頬は赤く染まっていた。

あれ……、ひょっとしてシルヴィって、ツンデレ？

わたしがそう思っただけでシルヴィをじっと見つめていると、彼はその視線に耐えきれなかったようで赤い顔で叫ぶように言った。

「なんですか、そんなにじろじろ人の顔を見ないでください！」

「あ、ごめんごめん」

わたしはにへら、と変な笑いを返すと、内心で身悶えた。

うおお、ツンデレ萌ええ〜！

シルヴィの頭を今凄くグリグリしたいけど、実際やったら怒られるだろうから我慢我慢。

わたしが両手の拳を握ってふるふる震えていると、イアスはわたしが怖がっていると勘違いしたらしく、すまなそうに謝ってきた。

「すみません、シルヴィに悪気はないんです。ただ、少し感情表現が不器用なだけで」

「あ、うん、分かってるよ。シルヴィはただツンデレただけだよね」
わたしがそういうと三人はそれぞれ顔を見合わせた。

……あれ、ツンデレってここにはない言葉？

似た表現があれば、大体は千花の言語魔法でなんとか通じるんだけど。

「……俺が、ツンデレだと？」

シルヴィがさっきのわたしみたいにくるくる震えて言った。

ひょっとして、こつちの世界ではツンデレってまずい意味の言葉なのかな？

急に不安になったわたしは、別にまずい意味で言ったんじゃないよって三人に説明してみる。

「うん、ツンツンデレデレのツンデレ。こつちにはツンデレって言葉はないの？」

「いや、ありますよ。なんでもティカ様が広めた言葉だそうです」
「へえ、そうなんだ。千花が」

イアスがそう言うてくれたので、わたしはほっとした。
言っちゃいけないような言葉じゃなくて本当に良かった。

けど、なんだって千花はそんなピンポイントな言葉を広めたんだろ。

そう思って首を捻っていると、アーネスがおかしそうにくすくす笑いながら言った。

「なるほど、シルヴィはツンデレか。ハル力嬢はうまいことを言うね」

「俺はツンデレなんてものじゃない！ それにいつ俺がデレデレしたっていうんです」

相変わらず赤い顔でシルヴィはわたしに詰め寄ってくる。

「あー、うん。デレデレはしてないけど、ツンツンしてるのに照れ屋なところがツンデレ属性かなーと」

うん、こういうタイプはいずれ好きな娘にデレデレしちゃうんだよ、きつと。

「シルヴィにツンデレなんて言ったのは、たぶんハル力嬢くらいだね」

おもしろそうにアーネスがわたしとシルヴィをそれぞれ見て笑った。

まあ、確かに王弟殿下にツンデレなんていう人はまずいないか。

「うん、でもシルヴィがツンデレ属性なのはいいね。弟にしたい」
そう言ったら、シルヴィにあからさまにむっとされた。

「……俺は、あなたに結婚の話をしていたのに、弟とはなんですか」
「あ、そうか。そうだよな」

思わずツンデレ萌えして話が逸れちゃったよ。

でも、カレヴィと結婚していれば義弟になるはずだったのに実にもったいない。

けれど結婚するにしても歳が離れすぎてるし、元の世界だったらこれって犯罪じゃない？

それにこんな大事なことを勝手に決めちゃうのも、わたしを好きでいてくれるカレヴィに悪いし、正直わたしの頭の中はぐちゃぐちゃだ。

……他力本願だけど、誰かうまいことを話をまとめてくれないかなあ。

ああ、こうなってくると、千花にも話をしなきゃいけないんだ。

わたしがそんなことを考えていると、ふいにアーネスが言った。

「確かにシルヴィとは歳が離れているし、ハルカ嬢がいきなり男として見るのは難しいかもしれないな。それならわたしもこの争奪戦に参戦しようかな」

はい？ 争奪戦ってなんのこと？

ぐるぐる回る頭でわたしがアーネスを見ると、ふっと甘く微笑まれた。

が、枯れているわたしはそれくらいじゃびくともしない。

「兄上、ずるいですよ。それなら僕も参戦します。……歳は離れているかもしれませんが、ハルカ様に男として見てもらうように僕は努力しますよ」

冷静そうなイアスが少しむきになって言うのを聞いてわたしはやつと気がついた。

えええ、争奪戦って、花嫁争奪戦——つまり三人でわたしを奪い合うってことだよな？

カレヴィが知らないところでいきなりこんな話になっちゃって、なんかまずくない？

40話 泥沼

「ちょ、ちょっと待ってよ。そんなの、カレヴィに悪いよ」

わたしは勝手に盛り上がる三人を慌てて制止した。

自分で言うのも恥ずかしいけれど、わたしはカレヴィに溺愛レベルで好かれているし、そんな彼を無視する形でこんな重要な話を進めるのはとてもまずい。

「わたしはカレヴィにいろいろお世話になってるの。彼との婚約はまずいから後釜見つけてきた、みたいなのは嫌だよ」

それに、こんなこといったいどんな顔してカレヴィに言ったらいいわけ？

これじゃ、カレヴィが可哀想すぎるよ。

「だが、このままではカレヴィが退位することになる。君はそれでもいいのかい？」

「それは……」

そう言われてしまうと、わたしはなにとも言えなくなってしまう。

なんかわたしって凄く疫病神だ。

わたしが胸元をぎゅっと掴んで下を向いていると、ふいに聞きなれた声がした。

「……黙って聞いていれば、まったく勝手なことを」

——カレヴィ！

わたしがただ驚愕に瞳を見開いて彼を見つめていると、カレヴィはわたしを抱き寄せてきた。

「ハルカ、おまえもおまえだ。あんな言葉に惑わされるやつがあるか」

「うん、ごめんなさい。でも……、カレヴィ執務はどうしたの？」

わたしがそう言うと、彼は一瞬しまったという顔をした。

「……抜けてきた。おまえが部屋を飛び出した後をアーネスが追いかけていったということを聞いてな」

「カレヴィ駄目じゃない。仕事しなきゃ」

だから元老院に政務を疎かにしているなんて言われちゃうんだよ。むうっとわたしが軽く睨むと、カレヴィはひきつった笑いを浮かべた。

「だが、俺がここに来てよかっただろう。そうでなければ間違いくおまえはこの三人に流されていたぞ」

う、それを言われちゃうと当たりすぎているだけになにも言えない。

「——けれど、元老院からハルカ嬢との婚約を解消するようにと文面が行っただろう？ カレヴィ」

今まで聞いたこともないような冷ややかな声でアーネスがそう言う、カレヴィの体が少し強ばった。

「……ああ」

こうやってカレヴィが肯定するってことは、わたしの存在が彼の居場所を脅かしているっていうのは本当なんだ。

「カレヴィ。わたし、あなたの荷物になりたくないよ。わたしだったら婚約解消してもいいから」

「ハルカ、黙れ。俺はそんなことは認めない」

カレヴィが怖い顔で言うてくるけど、わたしは黙らなかつた。

「駄目だよ。このままだと、あなたが今まで積み上げてきたもの全部駄目になっちゃうよ。わたし……んうっ」

そこまで言ったところで、わたしはカレヴィに無理矢理唇で口を塞がれた。

そしてわたしは三人の前でさんざん唇を貪られ、息も絶え絶えになる。

本当にこんなことやってる場合じゃないのに、とわたしは恥ずか

しさも手伝って涙目になっちゃおう。

やっとカレヴィのキスから解放された時には、わたしはまともに立っていられなくなっちゃってた。

その場にぐずおれそうになるわたしを無理矢理奪う形でシルヴィが受け止める。

「あ……」

なにか言おうとしても頭の奥が痺れていて、言葉が出てこない。

「シルヴィ、なにをする。ハルカを離せ」

ぐつたりとシルヴィに寄りかかるわたしを見てカレヴィが顔をしかめたけれど、これはわたしの意思じゃなくてあくまでもカレヴィがキスしたせいなんだから誤解しないでよね！

「嫌です。このままだとあなたはこの人を寝室へ連れこんでよからぬことをするつもりでしょう？」

シルヴィのその言葉に、わたしは思わず目が点になる。

……いやいや、いくらカレヴィでもそこまでは……と思っていたら、当の本人が黙り込んだ。

なに、カレヴィ本当にこんな昼間っからやるつもりだったの？

——やっぱりカレヴィは野獣だ。

わたしが冷たい目で睨むと、カレヴィが焦ったように言った。

「ハルカ、そんな蔑んだような目で俺を見るな」

……いや、いくらなんでもそこまでは思っていないけど。

そう言おうとしたら、目の前にアーネスが割り込んできた。

「元老院から注意が行っているにも関わらず執務をさぼろうとするなんて、カレヴィいい度胸だね」

「おおかたハルカ様に八つ当たりをするつもりだったのでしょうか？
陛下、最低ですね」

うわあ、いい人そうだったイアスまでカレヴィ相手に毒舌を振るってる。

伊達にアーネスの弟やってないってことかあ。

わたしはびっくりしながらカレヴィが三人の反撃を受けるのを見ていた。

——と、止めるべきなのかな、これって。

でもカレヴィはわたしを寢室に連れこむ気満々だったらしいし、どっちに味方するのかちょっと考えてしまふ。

ただカレヴィの気持ちを考えたら、確かに可哀想だし、わたしは本当にどうしたらいいんだろう——。

そんなことを考えてシルヴィの腕の中でおろおろしていたら、涼やかな声が辺りに響いた。

「一体なにをしているのです、カレヴィ王。それに皆様方」

「——千花！」

凜として立つその姿は明らかに周囲とは隔絶された特別な存在で、相変わらず美女然とした千花の登場に、わたしは心の底から喜んだ。

うん、やっぱりこういう時に一番頼りになるのは千花だよね！

41話 劇薬

それから、わたし達はちよつとしたやりとりの後、とりあえず会議をする大部屋みたいなところに移動することになった。

そこには中央に重厚で大きなテーブルがドンと置いてあった。

ちなみにカレヴィのやるべき執務は、宰相の今マウリスが励んでいるということだ。さすがに決裁はさせないみたいだけど。

「結論から言います。カレヴィ王はここはひとまず引いておいて、はるかとの婚約解消をした方がいいです」

千花がはつきりと言ったことで、カレヴィ以外の三人の男性はそら見るといったような顔でカレヴィを見た。

けれど、カレヴィは惘然として、どう見ても納得していない。

「……ハルカはそれでいいのか」

「う、うーん。この場合、仕方ないと思う。わたしはカレヴィに退位してほしくないし」

「……そうか」

それを聞いて、一気に顔色が暗くなるカレヴィにわたしは慌てていった。

「で、でもね！ 婚約者ではなくるけど、王妃候補になることはできると思うんだ。……その間にカレヴィは政務に励んで元老院を見返してやればいいんだよ！」

わたしが必死になって言うと、それに千花が頷いてうまくフォロイを入れてくれた。

「そうすれば、ハルカが王の障害と言われることはなくなりますね。

……ああ、それから離宮建築の件は既にマウリス殿に言って着工を中止してあります」

千花、仕事が素早すぎる。

内心で惚れ惚れしていると、カレヴィは「そうか」と頷いた。

さすがにこうなつては、離宮には手を着けられないと諦めたのだろう。

「ハルカは王妃候補になつてしまふのか……。しかし、しばらくは王妃の間に留まるのだろうか？」

「それでは、元老院の意を疎かにしたと受け取られかねない。ハルカ嬢はなるべく早く居室を移動した方がいい」

「そうか……」

アーネスがはつきりとそう言ったことで、カレヴィが目に見えてしょんぼりしている。

あああ、慰めたいけど、こういう場合は止めておいた方が賢明なんだろうな。

「じゃ、じゃあ今日一日だけわたし、カレヴィと過ごすことにする。

……それくらいならいいでしょ？」

わたしが周りを見回すと、みんなも仕方なさそうに頷いてくれた。

「まあ、今日一日くらいなら」

「仕方ないですね」

もしかして反対を受けるかもしれないと思つていたから、これは本当によかった。

わたしはみんなの同意を受けられたことでほつとする。

さすがに、元老院に反対を受けたからいきなり態度を翻すような真似はしたくないし、それじゃあまりにもカレヴィが可哀想だしね。

「そうだね、それで別れを惜しむといいよ」

「別れじゃない！」

アーネスにからかわれて、カレヴィが憤慨して椅子から立ち上がった。

ああもう、こんな分かりやすい挑発に引っかかっちゃって。

してやったりと、くすくすとアーネスがおかしそうに笑っている。

「これで、カレヴィが我慢とか覚えてくれれば、いつか頭の固い元

老院もわたしとの仲を認めてくれるよ。……わたしが言うのもなんだが変だけど、カレヴィ頑張ってね」

「……ああ」

わたしはなるべく力付けるように言っただけで、対するカレヴィは寂しそうな顔で微笑んだ。

確かにすごく残酷なことを言ってるような気もするけど仕方ない。わたしは今現在カレヴィに恋愛感情はないし、これくらいしか言えないよ。……ごめんね。

「……それにしても、俺はそんなに辛抱が足りないか？」

カレヴィのこの言葉に周りの人間は思わず苦笑した。

なに、カレヴィ自分で自覚ないの？

なら、わたしがここで引導を渡しとこう。

「はつきり言っで、まったくない」

わたしの言葉に少しの間、落ち込んでいたカレヴィだけど、事が決まったことで覚悟が決まったらしく、結局は婚約解消を受け入れた。……ただ、わたしを王妃候補とすることは条件に入れていたけどね。

そこで一応会議はお開きとなってみんな退席していったんだけど、わたしは千花に呼び止められて、なにかと思ったら一応避妊薬を飲んでおくように言われた。

……なんでも、やけになったカレヴィが既成事実を作ること無理矢理わたしを王妃にかつぎあげることも考えられるからだそうだ。……でも、この期間中はカレヴィ避妊薬飲んでるって言ってただけだ」

「普通のは効力は一日だけで、今日飲まなければいつでもできるよ。

用心にこしたことはないから」

いくらカレヴィでもそんなことしないって！ と笑い飛ばそうとしたけれど、衣装採寸の時の暴走例があるからわたしは千花の言葉に素直に従っておくことにした。

わたしが今カレヴィの子供を妊娠しちゃったりしたら、それこそ元老院を刺激しかねないからだ。

「はるか、飲んで。それは三日くらいは効いている強力なやつだから」

千花がどこからか出てきた薬の包みを開けて、それを水で流し込む。

……これでひとまずカレヴィが暴走しても彼の子供ができることはない。

わたしはほつとして、薬の包みとグラスを千花に返すと、出てきた時と同じように千花はまたそれをどこかへとしまった。

「ごめんね、はるか。カレヴィ王はもうちょっと冷静な人だと思うんだけど」

千花がすまなそうに謝ってくるのをわたしは体の前で両手を振って否定した。

「うっん、千花が謝ることはないよ。カレヴィが実はああいう人で楽しかったことも事実だし」

「そう……？」

千花はまだすまなそうにわたしを見てくるけど、本当に気にしないではないな。

こんな事態になったのは千花の想像外の出来事だろうし。

「おい、ハルカ。そろそろいいか？」

女同士の話があるからと言って扉の前で待たせていたカレヴィが待ちくたびれたように顔を出した。

「あ、うん、ごめん。話はすんだから」
心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはカレヴィに返事をする。

とりあえずは、今日でカレヴィの婚約者という立場は終わりなんだ。

できるだけ、今日は彼の期待に添えるようにしよう。

わたしはこんな事態になったことへの申し訳なさに少し胸が痛んだ。

もしかしたら、カレヴィとずっと穏やかに過ごすことが出来るやりようがあったかもしれない。

でも、実際はそうはならなかった。

こんなことになった原因の恋という感情はわたしはまだ知らない。
でもこれはとんでもない劇薬なのかもしれないのかもしれないな、
と感じながらわたしはカレヴィの方へと歩きだした。

42話 選択肢

結局、本日のカレヴィは昼食から自由放免ということで、この後は四六時中わたしと一緒にいることになった。

わたしに求婚を申し出たシルヴィやアーネス、そしてイアスは「今日ばかりは退散しますよ」と言っ、居室までは付いてこなかった。

千花も「明日様子を見に来るから」と心配そうに帰っていった。

まあ、それは当然のことかもしれないけれど、わたしとしては彼らにいてもらった方が良かったかもしれない。

なにせカレヴィはわたしから離れたがらないから、悪いけど鬱陶しくてしょうがない。

「ほら、ハルカ。食べる」

食事を皿に取ってくれるのはいつものことだけれど、食べさせるのはさすがにやりすぎだと思う。

でもそれも今日一日だけのことだし、どことなく寂しそうなカレヴィを見ていると嫌とは言えなくて、わたしは流されるままカレヴィに食べさせられていた。

「……ハルカは俺に食べさせてくれないのか？」

——「うっ」。

期待に満ちた目で見られて、わたしは思わず変な汗を流してしま

う。そ、それは、わたしにまた「はい、あーん」をやれってことだよ

ね？ 正直恥ずかしいのでやりたくはなかったけど、さっきカレヴィに食べさせてもらった手前、断るわけにもいかない。

こ、こんなのは今回だけだからね！
晚餐は絶対に断るんだから！

わたしはそう心に決めると、切った鶏肉をフォークに刺し、カレヴィに食べさせた。

「……そんなに嫌そうな顔をするな。分かった、もうさせない」
う、そんなに顔に出たのかな……？

確かにもの凄く恥ずかしくはあったんだけど。

「ご、ごめんね」

嫌だという気持ちをカレヴィに気づかれたのがすまなくて、わたしは謝った。

「謝らなくていい。おまえがこういうことが苦手だということを知っていて無理にさせた俺が悪かった」

「カレヴィ、ごめん。ごめんね」

カレヴィのこんなわがままは今日で最後だっていうのに、自分が恥ずかしいからって理由だけで嫌がるなんて、わたし最低だ。

「だから、謝るな。おまえにそんなすまなそうな顔をされると俺がどうしていいか分からなくなる」

苦く笑うカレヴィの顔を見て、わたしは俯いてしまう。

ああ、でもこんなんじゃない駄目だ。

カレヴィと一緒に過ごす最後の日なんだからせめて楽しく昼食を取らなくちゃ。

わたしは顔を上げると、さっきの失礼なアーネスの所行についてカレヴィに告げ口してやった。もちろん、その後のわたしの手を撫で撫ではなしの方向で。

「アーネスって酷いんだよ、カレヴィと食べようと思ってたコンソメ味のポテトチップス、勝手にどこからか持ってきて一人で食べちゃったの。わたしも食べたかったのに！」

わたしが憤慨して言うと、カレヴィがちょっと笑って「そうか」と言った。

「今度買ってきた時は一緒に食べようよ。あ、執務に支障のない時間にだけ」

「そうだな。俺ももつとおまえの世界の菓子を味わってみたい」

カレヴィが嬉しそうに頷いたので、わたしも嬉しくなつて一緒に笑った。

ああ、だけど今度向こうに買いに行くときは荷物が大変そうだなあ。

シルヴィとかアーネスとかイアスとかにもお菓子振る舞わないといけないだろうし。

「おまえの向こうでの買い物が大変そうだな」

「そうなのっ。お茶菓子出す人数が増えたから……」

——いけない。

そこでわたしは自分の失言に気がついて、両手で口を覆った。

それに対してカレヴィはちょっと苦笑しただけだったけれど、内心はどうなんだろう……？

そう思つてカレヴィを窺っていると、ふいに彼が言った。

「俺も、あいつらと同じくおまえの求婚者という立場になるのだな」

わたしはカレヴィに言われて、初めてその事実気がついた。

「で、でもわたしはカレヴィの妃候補でしょ？」

わたしが慌ててそう言うと、カレヴィはちよつと肩を竦めた。

「あいつらにとつてもそうだ。シルヴィにとつてもおまえは妃候補だし、アーネスやイアスには正妻候補だ」

「え……」

信じられないことを聞いて、わたしは思わず目の前のカレヴィの顔をまじまじと見てしまった。

「わたし、もう清らかじゃないのに正妻候補なの？」

てつきりもう身が清らかじゃないから、愛人とかそんな感じにな

るとばかり思ってたんだけど。

「ああ。王の婚約者だった者を虐げるような地位に据える者などいないぞ。その点だけはおまえは安心していい」

「そうなんだ……」

とりあえず、誰の者になってもわたしの安定が脅かされることはないってことか。

これって、千花との繋ぎもあるし、どこでも安心して趣味の漫画が描けるってことだよな。

だけど、それでもわたしはカレヴィのところに戻るけどな。

こうなった最初っからそのつもりだったし。

「……元老院の嚴重注意が解けるのはいつくらいになるの？」

これが分かれば、わたしは一安心なんだけど。

「さあ、いつになるか分からないな。運が良くて一月後か、さもなくば一年か……。もしかしたら、解かれないままかもしれないな」

「えええ？」

カレヴィの無情とも思える答えに、わたしは両頬を覆って情けない声を上げてしまう。

だって、嚴重注意が解かれないままってなんなんだ。

そんなことになったら、わたし心だけじゃなく、身まで枯れちゃうじゃないよ。

「そんなんだったら、わたし、子供産めなくなっちゃうよ」

「だから、おまえの婿候補が他に三人もいる。俺に遠慮することもない、おまえは安心して好きな相手を選べばいい」

さっきまでわたしにベタベタしていたカレヴィとも思えない言葉に、わたしは思わず息を飲んでまじまじと見つめてしまう。

対する彼はわたしと目を合わさない。

好きな相手って……、無理だよ。

初めての相手のカレヴィですらそういう感情を持てなかったのに、
そんなの無理に決まってるじゃない！

43話 慟哭

「……なに言ってるの？ カレヴィ」

カレヴィの信じられない言葉にわたしは思わず席を立つ。

「……ハルカ、食事中だ。座れ」

「でも！」

納得できないわたしはもちろん座るつもりなんてなかった。

「——座れ」

有無を言わせない迫力で、カレヴィはわたしを無理矢理座らせた。こんな時に王様らしい威厳を見せるなんて反則だ。

「わたしは、あなたの妃になるためにここにいるんだよ。それなのに、簡単に他の人に鞍替えするみたいなことできないよ」

「すまない、ハルカ」

さっきの気迫とは一転して、急に下手に出たカレヴィにわたしはむかっとしてしまった。

さっきはさすが王様でちょっとかっこいいと思ったのに。

「謝ってもらっても困るよ。わたしだって一応覚悟つてものをもつてあなたに身を委ねたんだよ。わたしのその気持ちはどうなるの？」

わたしがそう責めると、カレヴィの顔が歪んだ。そして、わたしに頭を下げて謝ってくる。

「すまない」

「すまない、すまないって、王なら王らしく、元老院なんか黙らすくらいしたらどうなの？ それくらいしたら、いくらわたしだってカレヴィを好きになるよ！」

「……無茶を言っな。それに、そんな不確定なことも言っな」

「う……」

確かに、カレヴィが元老院をどうにかしたとしても、わたしが彼を好きになるかは分からない。むしろ今と同じ可能性の方が大きい。

わたしが俯いて唇を噛んでいると、ポンと頭にカレヴィの手が乗った。

「おまえがおれのために操を立てようとしてくれているのは嬉しく思う。だが、国のためにはこれが一番いいんだ」

「……そう」

カレヴィは王様だから一番にザクトアリアを優先するのは分かる。分かるけど……。

わたしはカレヴィの手を振り払うと、再び立ち上がった。わたしを気遣ってくれているであろうカレヴィに対して態度悪いけど、構ってなんてられなかった。

「ハルカ、食事中だぞ」

カレヴィがわたしの非礼に顔をしかめて見上げてくる。

「知らない。わたし、自分の部屋に戻る」

視界の端にカレヴィが傷ついたような顔が映ったけれど、もう知らない。

わたしはいつもカレヴィと一緒に食事を取っていた共同の間から走り去ると、一気に自分の寝室のベッドに沈み込んだ。

「カレヴィの馬鹿あつ！」

今まで我慢していた涙を流しながら、ここにいないカレヴィに悪態をつく。

ひどい、酷いよカレヴィ。

離宮建築やら、執務やらに対してあまり強く言わなかったわたしも悪いけど、こんな事態になったのはそもそもカレヴィのせいなのに。

わたしは王妃になる覚悟だっと思っていたし、その勉強もしていた

んだよ。それを……、彼は全部ぶち壊したんだ。

「カレヴィのばか、あほ、まぬけ！」

ぼすぼすとわたしは感情のままに羽枕を殴り続ける。

すまないけれど少し待っていてくれって言ってくれば、わたし待ったのに。

わたし、そう言ってくれるの待っていたのに――。

「ハルカ」

ふいにカレヴィの声とともに、肩に手を置かれて、わたしはびっくりしてしまった。

……お願いだから、放っておいてほしかったのに。

「なにしに来たの？ もう話は終わったでしょ」

わたしはいきなり現れたカレヴィを睨みながら泣いていた。ただし口元は笑っていて、自分で想像してもなかなか壮絶な笑顔になっていたと思う。

案の定、それを目にしたカレヴィはわたしの肩に置いた手を引き、息を飲んでいた。

「……俺はおまえのことが心配で……」

「心配？ 今更なんなの。わたしは明日この部屋を出て行って、この国と自分に有利になりそうな人を捜すから」

――なんだ、こう言つと婚活と変わらないな。

そう思うとなんだかおかしくて、わたしはくすくす笑った。

「ハルカ、俺は……」

「カレヴィはもうごちゃごちゃ言わないで。あなたは自分からわたしの相手をおりたんだから。もうわたしはわたしで、勝手にやるから」

だからもう出て行ってほしい――。

わたしは寢室のドアに視線をやって、無言でカレヴィの退室を促したけれど、彼は出ていかなかった。

「ハルカ、俺は――」

カレヴィは苦しそうに顔を歪めて、わたしの肩を掴んでくる。

お願いだからなにも言わないでほしい。

今はもうなにも考えたくなかった。

「俺はおまえを愛してる」

カレヴィに痛いほど抱きしめられたけど、浮かんだのは虚しさだけ。

――だけど、最初から諦めちゃうんでしょ。……だったら、もういい。

「今更そんな言葉言ってどうなるの？ 結局わたしのことを見捨てるくせに」

そう言って、それがことの外しつくりすることに気がついた。

――そうか、わたしはカレヴィに見捨てられたんだ。

「見捨ててなどいない！ ハルカ、信じてくれ」

そう、口ではそうとでも言えるよね。

完全に心を閉ざしたわたしは彼に冷たく言った。

「言いたいことは分かったよ。……でももう出て行って。わたしは

明日から忙しくなるんだから」

「ハルカ……ッ、なぜ分からない！」

……なぜ？ わたしの方が分からないよ。

要はわたしはいいように利用されたってことですよ。

無理矢理カレヴィに口づけられて、わたしはそれに抗おうと、必死に彼の胸板を叩いた。

それでやっと彼の腕から解放されて肩で息をする。

「ハルカ、好きだ」

こんな告白、聞きたくないよ。

わたしを選ばないくせにそんな勝手なこと言わないで！

「そんな言葉、聞きたくない。カレヴィ、もう出ていってよ。わたしはあなたの望み通り、明日から有力貴族の人と楽しくやるから」

——ああ、今のはもの凄く感じ悪いな。

言ってて自分でもそう感じたし、カレヴィの顔色が変わったことでまずいなと思った。

でも、止められなかった。

「カレヴィはザクトアリアのことだけ考えて、こんなつまらない女より王妃にふさわしい綺麗な姫を見つければいいんだよ！」

44話 はるかを選択

「なんだと……？」

「あ……っ」

カレヴィの形相がみるみる険しくなっていくのを見て、わたしは言い過ぎたことに気がついた。

当てつけみたいに綺麗な姫を後釜にしろとか、自分の口から出たとは思えないほど酷い言葉だ。

「あ……、姫のそこは忘れてっ。こんなゴタゴタの後に選ばれる姫が可哀想だし！」

いくらなんでも、これは人の一生にかかわることだし、カレヴィが万が一その気になっちゃったりしたらまずい。

わたしは慌てて顔の前で手のひらを振ってそれを否定した。

その両手首をカレヴィに掴まれて、わたしはそのままベッドに押し倒された。

少し長めのカレヴィの髪がわたしの頬にかかって少しこそばゆい。ちよ、ちよと待って、これって……っ。

「……それは嫉妬か？」

「え……？」

思ってもみなかったことを言われて、わたしは瞳を見開いた。

わたしは彼と少しの間見つめあっていたけれど、やがてカレヴィはくつと笑った。

「そんな訳はないな。おまえは俺のことなどなんとも思っていないしな」

「そんな……っ」

なんとも思っていないことなんてないよ。

少なくとも今回のことはショックだったし。

「だからおまえは俺以外の男とよろしくやるなんて残酷な言葉が吐けるんだ」

途端、カレヴィの端正な顔が苦しそうに歪む。

「う、ごめんなさい。わたし、言い過ぎ……っ」

謝罪の言葉はカレヴィに口付けされて止められた。

「もう、遅い。俺はこれ以上ないくらいにおまえに怒っている」

その冷たい表情に、普段はわたしに甘いはずのカレヴィの怒りの片鱗を見てわたしは愕然とした。

……でも、カレヴィだって酷いじゃない！

「離して……っ！」

わたしは両手を頭の上にまとめられて、カレヴィに押さえつけられているため、まともに身動きできない。

——こんなの卑怯だ。

好きな相手を選べたっていつたくせに、カレヴィはこうやってわたしを束縛する。

「おまえは、俺が他の男におまえを渡したいなどと本気で思っているのか」

そう言いながら、カレヴィがわたしの衣装を引き裂く。

「カレヴィ、やめてっ。こんなのやだ！」

——カレヴィはわたしを抱く気だ。

わたしから手を引こうとしているのに、こんな扱ってないよ。

こんなの……、まるでわたしの体だけ惜しまれてるみたいで嫌だ！

「おまえの大抵の願いなら叶えただろうが、これだけは聞けないな」

そう言うカレヴィはわたしから衣装を引き剥がすと、わたしを滅茶苦茶に抱いた。

あれから、カレヴィの逆鱗に触れたらしいわたしは、どんなに泣いて懇願しても許してもらえなかった。

カレヴィは本当にわたしを壊す気なんじゃないかと思えて、わたしは初めて彼が本気で怖いと思った。

カレヴィはやろうと思えばこんなに非情になれるんだって今更ながら思い知らされた。

だからわたしを今、物みたいに扱えるんだ……。

そして何回目に気を失ったところでようやくわたしは彼から解放された。

遠くなっていく意識の中で浮かぶのは一つだけ。

……ひどい、ひどいよ……カレヴィ……。

ほの明るい部屋の中で、はっと気づけば時間はもう夜中だった。

「う……っ」

カレヴィに滅茶苦茶にされたせいで、腰といわず、全身が痛い。

これは侍女の誰かを呼んで、処置してもらわないといけないレベルだ。

……でも、寝てれば問題ないか。

あんまりモニター達の手を煩わせるのも嫌だし。

だれかがいつの間にか着替えさせたのか、わたしは寝間着を着てたし、このまま寝ちゃおう。……そうしよう。

そう思って、シーツを引きかぶって息をついていると、ふいに聞きなれた声があった。

「あ、はるか気がついた？」

あ、千花だ――。

そう思った途端に、涙がボロボロと頬を転がり落ちた。

「はるか……」

「千花、痛いよ。治してよ……っ」

綺麗な眉を寄せる千花にわたしは子供のように訴えた。

「うん、分かった……」

千花がいつかやってみたに、わたしに軽く触れた途端、全身の

痛みと倦怠感がなくなった。

「体の痛みはこれで取れたと思うけど……、問題は心の方だね。

……本当にごめんね、はるか。わたしが余計なことしなければこんな目に遭わずにすんだのに」

千花がわたしの傍に縋りついて、すまなそうに謝ってくる。

……でも、ことの発端の千花には不思議と憎しみとかは湧かなかった。

「……千花は悪くないよ」

「でも……」

千花はカレヴィと結婚について、本当に申し訳ないと思っているらしく、なおも食いついてきた。

だから、もう一度言う。

「千花は悪くない」

「はるか……」

大きな瞳に涙を浮かべて千花はありがとうと言った。

うつん、わたしの方がありがとうだよ。いつもお世話になってるし。

「……でも、ちょっと疲れちゃったかな。向こうで少しゆっくりしたい」

わたしがベッドに横になったままそう言うと、千花が全て分かってるかのように頷いた。

「うん、そうだね。それがいいよ。向こうでゆっくりと温泉に浸かりにでも行こうか」

「うん、行きたい」

千花に向こうに行く、と言われて、わたしはなぜか凄く泣きたくなってしまった。

「温泉、行きたい……な」

涙が頬を伝う。

それを心配そうに見る青い瞳も、拭う浅黒い指も今はない。

そしてこれからも。

心配そうな千花の視線を受けながら、再び盛り上がってきた涙を無理矢理擦ると、わたしは空元気だけど、ベッドから飛び起きた。

「ね、温泉どこにする？　楽しみだなあ」

——「ごめんね、カレヴィ。」

わたしは今だけここから逃げる。

失って気づいた初めての恋は、今のわたしには苦しすぎるんだ。だから今だけは無性にあの世界に帰りたい。

あなたは怒るかな。

きっと、怒るよね。役目を放棄したって。

でも、この傷が癒えて再びあなたに会った時、苦しくて仕方なかったんだって言ったらあなたは許してくれるかなあ……。。

45話 療養

千花に連れられて元の世界に戻ってきたわたしは、とある温泉に療養しに来ていた。

それはわたしの傷ついた心のために、千花が用意してくれた宿だった。

そこはちょっと小さめだけど綺麗な宿で、お風呂も素敵だったし、わたしは大満足だった。

「このアワビおいしいーい！　こんなおいしいもの初めて！」

それで今現在、わたしは贅沢にも黒アワビのバター焼きなんかを頂いている。

うーん、肉厚なのに柔らかくて、なんとも言えないうまみが絶品。そう、はるかが気に入ってくれてよかった」

わたしの向かいには、浴衣姿の千花がにこにこしながらビールを飲んでいる。

ちなみにわたしは、アワビの肝を千花に食べてもらっちゃった。

千花は「おいしいのに、もったいない」って言うけど、見た目グロテスクなんだもん、ごめんね。

わたしもアワビをつまみにビールを一口。

あまりビールは好きじゃないけど、なぜかこういう時はおいしく感じるから不思議だ。

あー、お刺身はおいしいし、こんなの絶対ザクトアリアじゃ味わえないね！　向こうの人からしたらゲテモノ食いに見えるだろうし。王様のカレヴィなんか、きつと引いちゃうと思う。

そこまで考えた途端、わたしを熱っぽく見つめる彼の瞳を思い出して泣きそうになってしまい、わたしは慌てて俯いた。

――失恋の痛みはそんなに簡単に癒えるわけじゃない。

その気持ちを紛らわすように、わたしはグラスをあおる。
無理矢理飲んだビールはことの外苦かった。

「はあ……」

——草木も眠る丑三つ時。

わたしは誰もいない露天風呂に一人で入りに来ていた。

隣の布団の千花がよく眠っていたのは、考えごともしたかったの
でちょうどよかった。

もし、千花がわたしがいないことに気がついてても、彼女はわたし
の魔力を辿れるし、問題ないだろう。

さすがにこの時間だと、お風呂に入ってる酔狂な人はいなかった。
……大きなお風呂を独り占めできる穴場な時間なんだけどね。

そんなわけでわたしは近くにバスタオルをおいて、石造りのお風
呂に身を沈めた。

疲れた体にお湯が染み込むようでとても気持ちがいい。

こんなお風呂を独り占めなんて贅沢すぎる。

けれど、人心地ついてからわたしの心の中に浮かぶのはあちらの
世界のことだった。

——今頃、ザクトアリアはどうなってるんだろう。

カレヴィはわたしに怒ってるよね……。

激高させたばかりだったのに、更に怒らせてどうするんだって感
じだけ。

カレヴィはいい加減わたしに愛想つかしたかもね。

役目もろくに果たさないで、逃げだしちゃったんだから。

そこまで考えが行くと、みるみる瞳に涙が浮かんでくる。
わたしはそれをごまかすように湯をすくって顔を洗った。

千花が設定してくれた温泉旅行は二泊三日。

それが終わったら、わたしはおとおかんにカレヴィとの結婚
が実質なくなっただけを報告しに行かないといけない。

二人とも怒るだろうなあ……。

それを考えると今から気が重い。

千花が説明に一緒に来てくれるって言うてくれてるけど、何から
何まで千花まかせで本当に悪いなと思う。

その後は、千花が設立した会社の事務所で漫画を描きまくる予定
だ。

ついでだから、この療養期間に本を作っちゃおうという話も千花
とした。

……うん、時間は有効に使わなくちゃね。

それに忙しい方がわたしも気が紛れていいかもしれない。

大好きな趣味三昧なんだし、わたしは恵まれすぎているんだろう。

——この世界にいる予定期間は一ヶ月。

それまでにわたしは失恋の傷を癒して、再びザクトエリアに戻る
つもりだ。

引き受けたからには役目を放棄するつもりはない。最初に予定し
ていたカレヴィとの子はもう産めないだろうけどね。

けど、あの三人の中から選ぶとしたら、やっぱり一番地位が高い
シルヴィが第一候補になるんだろうな。

歳が若すぎるのが気になるけど、あちらでは成人してるってこと

だしザクトアリアでは問題はないだろう。

……だけど、シルヴィはこんな年増相手に本当にいいんだろうか。その辺り、本人にしっかり確認した方がいいのかもしれない。

王族の責任でわたしと結婚するって言ってるけど、まだ若い彼にはあまり無理はしてほしくない。

すると、第二候補のアーネスだけど、一応彼と結婚することになれば、わたしは公爵家に嫁に行くことになり、カレヴィと顔を合わせる確率はぐっと減ることになる。

カレヴィはいずれ妃を娶るだろうし、わたしが王宮にいれば、必ずその姫を目にしてしまうだろう。

その時にわたしが取り乱さないとはい切れない。……うつん、きつとわたしは取り乱してしまうことだろう。

その点、公爵家に籠もっていれば王宮に行くこともないから、カレヴィの新しい結婚相手と顔を合わせることもない。

第三候補のイアスは王宮に住み込んでいるらしいから、カレヴィと遭遇するのは王族のシルヴィを選んだ場合よりは少ないだろうけど、皆無じゃないかもしれない。

だけど、イアスがこんなわたしを好きでいてくれているというところが気になる。

わたしはカレヴィが好きなのを気づいたばかりだし、そんな状態でイアスに嫁ぐのは彼に悪い気がする。

それと、歳が若すぎるというのはシルヴィと同じくだ。

そういうわけで、私の都合で選ぶならアーネスが一番適任ということになる。

一応カレヴィの従兄弟だし、王族とも血も近い。

それに彼がわたしに恋愛感情がないっていうのは気が楽だ。

それこそ政略結婚として割り切ることができるし、王妃になるよりも趣味に没頭できるだろう。

アーネスがわたしと結婚した後に愛人たくさん作っても、彼なら

仕方ないと苦笑いして終わりそうな気がするしね。

国一番で考えれば、やっぱりシルヴィかな。

でも彼と結婚すれば王族なんだし、カレヴィと新たに選ばれた姫との結婚式に確実に参列することになるんだろっな。

そんなこと、わたしに堪えられるんだろっか。

……少なくとも今はとも考えられない。

わたしはそこでぼろぼろと涙をこぼすと、顔を覆った。

——本当はあなた以外を選ぶなんてしたくない。ずっと一緒にいたい。

けれど、それはかなわないことだ。

わたしはカレヴィへの恋に身を焦がしながら、湯船に浸かったまましばらく泣き続けていた。

46話 哀しみの共有

「はる……、はるかっ！」

いきなり千花に大声で呼ばれてわたしはびっくりして目を醒ました。

え……、なにごと？

千花のあまりの剣幕にわたしが瞳を見開いていると、千花はほと息をついてわたしに抱きついてきた。

しかし、わたしは裸。

えええ、いったいなにが起こったんだ。

それに頭がガンガンするし、体のだるさも半端ない。

「え、千花、なに？」

「なに、じゃないよ、はるか！ あんまりびっくりさせないでよね！」

見ると千花は目に涙を浮かべている。

それで、わたしがどうにかしたらしいと気がついて、自分の記憶を手繰ってみる。

えつと、露天風呂で泣いてたらのぼせて、それであがろうとしたら目の前が真っ暗になって……。

……あれ、その後の記憶が全然ない。

「あんまりはるかの帰りが遅いから見に行ったら、湯船の中に沈んでるんだもん、びっくりしたよ！」

えええ、それってつまり、わたし死にかけてたってこと！？

それは発見した千花もさぞ肝を冷やしたことだろう。

幸い見つけたのが早かったのがよかつたらしく、千花がわたしの

肺の中のお湯を吐き出させてわたしは息を吹き返したらしい。

「ご、ごめんね、千花。迷惑かけて……」

そうか、それで体の調子が悪いんだ。

どうにかして起きあがろうとしたら、千花に制止された。

その時に千花がわたしに治癒魔法をかけたらしく、さっきまであった頭痛や倦怠感がすっかりなくなっていた。

あ、ありがとう千花。

「ほんとだよ、はるか。あんまりびっくりさせないでよ。わたし、はるかが死んじゃったんじゃないかと気が気じゃなかったんだからねっ！」

とにかく、はるかは温泉に一人で入浴禁止！ とビシッと千花に指を指されてわたしは申し訳なさに小さくなる。

「う、うん。本当にごめんなさい」

完全無敵だと思っていた千花がこれだけ焦るということは、もしわたしが死んでいたら、蘇生させる術はなかったのかもしれない。もしくは、実行が極めて難しいとか。

「ごめんね、千花」

さすがのわたしも、じわじわと死の恐怖が襲ってきて、思わず涙ぐんでしまった。

それに、さんざん千花に気を遣わせて、千花が決めた温泉で死にかけるとか最悪すぎる。

「本当にごめんね、ごめんなさい」

もしわたしが溺死していたら、千花は絶対に自分自身を責めるだろう。

悪いのは自己管理の甘いわたしなのに。

「……無事だったから、もういいよ。それよりはるか、部屋に戻るっ？」

千花が軽く手を振るとわたしの体はふわんと浮き上がり、温かい

風に包まれた。

あ、これ、湯冷め防止なのかな？

それに濡れていた髪や体が一気に乾いていつてるし、すごいなあ、これ。

そんなことを思ってたら宿の和室部屋の布団の上に帰ってた。

そして、千花が脱衣所から拝借してきたらしいわたしの着替えが入った籠も一緒に近くに置いてあった。

「はるか、着替えられそう？ 無理なら、わたしやるけど」

千花が心配そうに聞いてきたので、わたしはそろそろと身を起こしながら自分の調子を確認した。

うん、とくに目眩もしないし、大丈夫そうだ。

「大丈夫。わたし着替えるよ」

上半身を起こしてわたしは籠から着替え一式を出して着替えた。

わたしが着替え終わったのを確認した千花は空になった籠を魔法で元の場所に戻したらしい。

うん、いつ見ても便利そうな魔法だ。

だけど、千花には千花の魔術師であることの苦労もあるんだろうし、そのことについては特に口に出さない。

その代わり、わたしは千花に心からのお礼を言った。

「千花、本当にありがとうね。あと、ごめんなさい」

それから、びっくりさせちゃったことの謝罪も。

もし、あそこでわたしが死んでいたら、千花は一生そのことを悔やんで、自分自身をなじっていただろう。

わたしは恩人の千花にそんな辛い思いをさせるところだったんだ。わたしが布団の上に正座して千花に深く頭を下げると、やがて深く息をつく音が聞こえた。

「……もういいよ。はるかが悩んでるのを知ってて一人にさせちゃったわたしにも非はあるし」

「え、千花に非なんてないよ！」

千花の言葉にびっくりして、わたしは思わず大声を出してしまっ

た。

あ、しまった夜中だったつけ。

わたしは慌てて口元を覆うと、辺りを窺ってしまった。……幸い、辺りは静まったままだ。

「……はるかとは本当に人がいいね」

「そんなことないよ。今も千花にすごく心配かけさせちゃったし。カレヴィも……」

すごく怒らせちゃったし、と言おうとして、カレヴィのあの時の顔を思い出してしまい、わたしは言葉に詰まった。

あ、やばいな。また泣きそうだ。

そんなわたしを千花が哀しそうに見てきた。

「はるか、今日はもう眠ったほうがいいよ。体にこれ以上負担かけない方がいいし」

千花がこう言うつてことは、治癒魔法で今は元気だけど、かなりわたしは体力的に衰弱してたんだろな。

うん、と頷く前にわたしは眠くなってきて、こてん、と布団の上に横になってしまった。

あれ、千花がなにかしたのかな？

「ごめんね、はるか」

哀しそうにそんなわたしを見つめて千花が言う。

お願いだから、そんなに気に病まないでほしい。

千花がいたから、わたしはここまで来れたんだよ。

それで、あの世界であの人に会え、たん、だ……。

朝目覚めると、わたしはちゃんと布団の中にいた。

きつと、千花が魔法かなにかで移動させてくれたんだろう。

わたしは溺死しかけたわりにすっきりした目覚めで、わたし丈夫すぎるだろ、と心の中で溜息をつく。

でもまあ、健康なのはいいことだね。

「はるか、支度して朝ご飯行こう？」

千花が昨夜あったことが嘘みたいに明るく声をかけてくる。
だから、わたしもそれに合わせて返してみる。

「あ、うん。ご飯、なにかなあ。楽しみーっ」

47話 手紙と恋情

結論として、死にかけた後のご飯はとてもおいしかった。

香ばしく焼けたあじの開きとお新香、出汁巻き卵、味海苔に納豆、そして炊きたてご飯に味噌汁という旅館の朝食としてはごくオーソドックスなものだったけれど、日本食に飢えていた身としてはそれがとても嬉しかった。

朝ご飯にすっかり満足したわたしは、それから千花と二人で温泉街をぶらぶらした。

途中で温泉饅頭を外で蒸かしている和菓子屋さんがあったので、千花と興味深く見ていると、その主人らしき人に声をかけられた。

「別嬪さん二人に特別サービスだ！ 食べてってくださいな！」

……って、ただで出来立てはやはやの温泉饅頭を貰ったけど、いいんだろうか？

「ありがとうございます」

千花が和菓子屋の主人につこり微笑むと、彼は盛大に照れていた。

千花、和菓子屋の主人を悩殺しすぎだぞ。

「ありがとうございます、いただきます！」

わたしも彼にお礼を言つて、茶色いお饅頭にかぶりつく。

お饅頭は、皮はしつとりと柔らか、中のあるがこれまた絶品で、わたしと千花は口々に絶賛した。

「わあ、このあんこおいしーい！」

「本当、この皮もおいしいです」

そこでご主人は我が意を得たりとばかりに、これはどこそこの大納言小豆を使っている……等々、材料の話が始まったけど、わたし達はお饅頭を味わって食べるのに夢中であんまりよく聞いてなかった。

た。ご主人、ごめんね。

あーでも、本当においしいよ。このお饅頭。カレヴィにも食べさせたい。

そこまで考えて、わたしははつとする。

わたしは一ヶ月はあの世界に戻らないんだっただけ。

それにカレヴィとはあんな別れ方して、この世界に逃げ出してきたのに、おみやげなんか渡せるわけじゃないじゃない。

わたしが現実を思い出してドーンと落ち込みかけていると、千花が突然和菓子屋の主人に向かって言った。

「すみません、これを三十個ください」

「え、千花、まだ最終日じゃないのに買っちゃうの？」

わたしが小声でこっそりと聞いてみたら、千花は向こうの世界の家族にいち早く届けるつもりでいるんだって。

……そっか。

じゃあ、わたしも千花に届けてもらおうかな……。

「あ、すみません。わたしは二十個ください」

「あいよっ！」

和菓子屋のご主人が威勢のいい声で返事してくれて実に気持ちがいい。

「はるか？ まさか……」

わたしの意図を察したのか、千花が眉を寄せた。

ごめんね、千花が今、わたしのためにカレヴィに怒っていることはよく分かってはいるんだけど。

「うん、悪いけど後でカレヴィに送ってくれるかな。黙って出ていっちゃったことは、やっぱり謝らなきゃ。後で手紙を書くから」

千花は納得できないように、不機嫌そうな顔になる。

……うう、これはザクトアリアに届けてくれないかなあ。

「……はるかがそう望むのなら、わたしはあの王を許せないけど届けるよ」

「あ、ありがと、千花。ごめんね？」

千花が承諾してくれたので、わたしはほっとして笑顔になった。
「まあ、はるかの頼みだからね。仕方なくだよ」

そう言くと、千花は和菓子屋さんの中に入っていつてしまった。

……うーん、これは相当怒ってるなあ。

まさか血の雨は降りはないだろうけど、千花とカレヴィを会わせるのはまずいかもしれない。

これは、ゼシリアか侍女三人組の誰かに仲介してもらったほうがいいかなあ。

わたしはそう考えた後、慌てて千花の後を追って店の中に入った。

千花は和菓子屋の主人に後で取りにくると言って、既にわたしの分まで精算をすませていた。

「ごめん、千花。後で払うから」

「いいよ、わたしの奢り」

「いや、わたしばかり奢られて悪いよ。今回は絶対払うから！」
カレヴィに渡すものだし、それまで千花の奢りなのはまずい。

「……分かった。じゃあ、後で精算しよ」

「うん」

千花が渋々承諾してくれたので、わたしはほっとする。

千花はお金持ちだから、やたら奢ってくれるけど、やっぱりそれじゃ心苦しい。

ちなみにここに来る時の服も千花がどこかのブランド物らしいのを何着も持ってきてくれた。あと、靴やバッグも。

胸のせいで服選びが難しいわたしに合わせてあったから、やっぱりわたしのために買ったんだろうな。

わたしも千花になにか奢れたらいいんだけど。

……よし、この後の昼食は絶対わたしが奢るぞ。

それからわたし達は、土産物屋をいろいろ物色して回った後、お昼にすることにした。

ただ、千花が入りたいって言ったのは、お好み焼き屋で、すっかり彼女に奢る気でいたわたしはがっかりした。

千花だったら、お好み焼きくらい向こうでも作れるんじゃない？

……それがなぜお好み焼き屋。

そう思ったけど、千花がどうしてももんじゃが食べたいと言つので、わたしはものすごく納得してしまった。

もんじゃ焼きって見た目アレだものね。

それは確かに向こうで作れなそう。

それでわたし達はお好み焼き屋に入って、もち明太もんじゃと魚介類のお好み焼きを注文した。

昼間からお酒はまずいので、飲み物は二人ともウーロン茶で。

……そういや、わたしもお好み焼き屋自体久々だわ。

温泉旅行でもんじゃとか食べるっていうのも不思議な気分だけど、こういうのも悪くないかもしれない。

そんなことを千花とおしゃべりしていると、もんじゃのどんぶりが運ばれてきた。

「じゃあ、わたし焼くね」

千花が張り切って手を挙げる。

うん、ここはうまい人にお任せするよ。

千花はどんぶりから具材だけを油を引いた熱した鉄板の上に出すと手際よく炒め、それで土手を作った。

そしてその中央にウスターソースを入れた生地を流し、ぐつぐつ煮立たせると、わたしには分からないタイミングではばっとかき混ぜ、薄く丸い形を作った。

そしてその上に青海苔を散らしていく。

それにしても、こんなとこまでさすが千花。

相変わらずの手際の良さに感心しながらわたしは漂ういい匂いに思わず生唾を呑み込む。

「そろそろいいかなー」

そこでようやく千花の許可が出たので、早速わたしはもんじゃ用のへらで縁をかきとり、鉄板に押しつけて焦げ目をつけた後、ふーっと息を吹きかけ、そのままぱくり。

「あ、おいしーっ」

「でしょ？」

千花ももんじゃをおいしそうに食べながらにこにこする。

あー、これは確かに向こうじゃ食べられないや。こんなにおいしいのにもつたいない。

第一、あつちには明太子やお餅自体ない。もち米はあるらしいんだけどね。

わたしと千花はあつという間にもんじゃを完食して、次のお好み焼きに取りかかる。

もちろん、焼きは千花担当。

これも見事な出来映えで、わたしは久々のお好み焼きに舌鼓を打つ。

二人で見事に完食してお腹がいっぱいになったところで、わたしは千花に言い張ってここの代金を支払った。

それでも、お好み焼き屋だから代金なんてたかがしれてるんだけどさ。

わたしだって、たまには千花に奢りたいんだもの。

「おいしかったね。はるか、ごちそうさま。……さ、お饅頭取りに行こう」

千花に言われてそのことを思い出したわたしは、慌てて彼女の後を追った。

それからわたしは宿に戻って、カレヴィへ手紙を書いた。
千花は気を遣ってか、ちょっと離れたところで荷物の整理をして
いる。

『カレヴィへ

もう知っているとは思うけど、突然こっちに帰ってきてしまつて
ごめんなさい。

何度謝つても、あなたに許してもらえないと思うけれど、わたし
にはごめんなさいとしか言えません。

わたしはあのままザクトアリアにすることが苦しかった。

だから、わたしはその辛さから逃げてしまったんです。ごめんな
さい。

カレヴィ、本当に自分勝手ですけど、一月ほどわたしにお休みを
ください。

帰ってきたら、わたしは自分の役目をきちんと果たします。

そしてザクトアリアの発展のために尽くします。

こちらのお菓子をそちらに送ります。

わたしが持ってきた緑茶を淹れて食べてくださいね。

はるか』

書きながら、本当に自分勝手だな、とわたしはくすりと笑った。

これを読んで、カレヴィはまた怒るだろうな。

その途端、カレヴィの怒りの表情が浮かんで、わたしは思わず胸
元を掴んだ。

——胸が苦しい。だけど、これは自業自得だ。

さんざん良くしてもらったにも関わらず、わたしは今恩知らずなことをしているのだから。

せめてカレヴィがお土産だけでも食べてくれたらいいと思ってたけど、虫が良すぎたかもしれない。

「う……」

いけない、涙が出てきた。

こんなところで泣いたら、千花に心配かけちゃうよ。

わたしは慌てて目を擦ると、自分の署名の後にこう付け加えた。

『これは最初からの契約ですから、わたしも己を捨てて覚悟を決めます。』

——そう、初めてカレヴィに身を任せた夜のように。

そう考えれば、少しは気が楽になる気がした。

ただ、あの時のわたしは知らなかった。

……こんな、恋という激しすぎる感情なんて。

48話 克服への決意

なんとかカレヴィへの手紙を書き終えたわたしは、お土産の温泉饅頭にそれを添えて、侍女長のゼシリアを仲介してカレヴィに渡してもらうように千花へ頼んだ。

「わたしもあの王の顔を見たら罵倒くらいはしそうだったから、それなら大丈夫かな」

……千花、カレヴィを怒鳴りつけそうだったのか。

千花がわたしを大切に思ってくれているらしいのは嬉しいけど、一国の王に対してそれはちょっと過激じゃない？

わたしは内心冷や汗を流すような気持ちで千花を見る。

すると、千花はこちらの不安が分かったのか、ぽんぽんとわたしの肩を叩いた。

「大丈夫、はるかが心配するようなことはしないよ。だから、安心して」

「う、うん。千花、いつも悪いけどお願いします」

わたしは頷くと、千花を真剣に見つめて頭を下げた。

「やだ、はるか。そんなことやめてよ。ちゃんとザクトアリアに行ってくるから、はるかは安心して待っててよ」

「うん」

わたしが頷くと、千花は短い詠唱の後、あちらの世界への空間を開いた。

この向こうには異世界が広がってるんだよね。

いつ見てもすごいなあ、これ。

わたしが感心していると、千花がわたしを見て言った。

「じゃあ、行ってくるよ」

「うん」

そんな短いやりとりの後、千花の姿は消え、やがて空間は閉じられていった。

それをわたしはなんとなく苦しく思いながら見つめていた。

……本当はお土産、カレヴィに直接渡したかったな。

けれど、逃げ出したわたしが今更どの面下げてカレヴィに会えるんだ。

それに、その前にわたしはカレヴィをこれ以上ないほどに怒らせたかったし、既に彼に嫌われていることも考えられる。

そこまで考えて、わたしは部屋に誰もいないこともあり、ぼろぼろと涙を流してしまった。

考えたくもないけれど、可能性としては充分あり得る。

今現在もわたしは彼を怒らせるようなことをしているのだから、嫌われて当然だ。

でも、それでいいのかもしれない。

カレヴィはわたしよりも王としての道を選んだんだ。

それで、他の男を選ぶという発言になったんだろうしね。

とにかく、これでカレヴィはわたしに関わることもなく賢王として皆にかしずかれることになるだろう。

それが、彼の本来あるべき姿だ。

わたしはそれを離れたところで見守って、自分の責任を全うしよう。

けど、理性ではそう思っても、感情はまだそこまで付いてこない。わたしはみつともなくしばらくぐすぐすと泣いていたけれど、これじゃいけないと思って、洗面所で顔を何度も洗った。

うん、目は腫れてないし、これなら千花が帰ってきてても大丈夫だ。

とりあえず、わたしはこんな後ろ向きな考えをやめて、なんとかこの失恋から立ち直る方法を考えないとな。

考えてみると、千花が立てたこの後の漫画三昧のスケジュールは良かったのかもしれない。

趣味に没頭していれば、いろいろ浮かんでくる雑念に囚われずにすむしね。

……けど、その前におとんとおかんを説得するという難題が待ち受けているんだよね。

正直気が乗らないけど、カレヴィを目の前にしているよりはましかもしれない。

そう考えたら、目の前の重苦しい空気が少しだけ晴れたような気がした。

……うん、そうだよ。

わたしに求婚している三人はザクトアリアでも有数のお金持ちだし、その点ではおとんとおかんは文句は言わないだろう。

とりあえず、明日お土産を買って、家に直行してなんとか二人を説得しよう。

二人はゴネるかもしれないけれど、わたしもザクトアリアでただその日を過ごしていた訳じゃない。

趣味の合間に貴婦人の教養を身につけるための勉強をそれなりにしていたし、おとんとおかんくらい説得してみせる。

そう考えてわたしがぐつと拳を握っていると、千花が戻ってきた。

「あ、千花。おかえりー！」

わたしが先程の決意のまま元気良く千花を迎えると、千花がどうしたんだと言う目で見てきた。

う、確かにわたし、最近感情の波が激しすぎるよね。

「はるか、カレヴィ王に渡してくださいって、侍女長に頼んできたよ」

「あ、ありがとう、千花」

本当は行くの嫌だったろうに、すまなかったな。

「本当にありがとう」

わたしは千花に深々とお辞儀をすると、千花にやめてよ、と言われた。

あれ、しつこかったかな……？

でも本当にありがたかったし、素直なわたしの気持ちだったんだけど。

まあこれで、わたしが城から逃げちゃったことの謝罪はカレヴィに伝えるようにしたわけだけど、それを彼がどう受け取るかまではまだ分からないんだよね。

それを思うと、ちょっと怖い気がする。

でも他になにを書いたらいいか分からなかったし、まさか、わたしの正直な気持ちを書くわけにもいかないしね。

そんなの今更書かれても、王としてあるべき道を決めたカレヴィには困るだけだろう。

そんなことを考えて、わたしが深い溜息をついていると、千花にぽんと肩を叩かれた。

「はるか、お風呂行かない？ わたし、今日は歩き通しでちょっと疲れちゃったし」

「あ、そうだね」

それに、ザクトアリアまでのお使いも頼んじやつたしな。

これだけ働けば、千花もさぞ疲れたろう。

「うん、じゃあ行こうか。千花、後でマッサージしてあげるね」

大きすぎる胸のために肩こりが酷かったわたしは、それなりにマッサージも研究している。

それを聞いた千花は綺麗に微笑むと、大きく頷いた。

「うん、じゃあ、久しぶりにはるかに頼もつかない」

——本当に千花がいてくれてよかったな。
それでどうにか、わたしは笑っていられる。

とりあえず今は、残り少ないこの旅行を気心の知れた千花と二人で楽しもう。

それで少し落ち着いたら、誰もいないところで思い切り泣くのもいいかもしれない。

そうやって、少しずつ失恋の痛みを癒すんだ。

失恋なんて、誰もが通って来た道なんだから、わたしもきつと克服してみせる。

わたしは決意を新たにすると、わたしは千花とお風呂に行くべく慌てて準備を始めた。

開いた傷はまだ痛みを訴えていたけれど、わたしはそれに目を瞑って、無理矢理やり過ごすことに決めた。

49話 戦いの前に

二泊三日の温泉旅行から帰ってきたわたしは、家に帰る前に千花の家に寄り、久しぶりにおばさんと話に花を咲かせた。

残念ながら、おじさんは会社に行っていて会えなかった。まあ、平日だからそうだよ。

千花の弟の啓太君にいたっては、家から離れた大学に行っているのですと会えずじまい。

小さい時から可愛がって来たから、もうそうそう会えないと思うと寂しいけど仕方ない。

「まあ、それは……、はるかちゃん、ごめんね」

事の顛末を聞いていたおばさんは、わたしがカレヴィと分かれることになると思うと言うと、千花に似た顔をすまなそうに歪ませた。

「ほら、千花も謝りなさい」とおばさんが言う、千花が「ごめんね」とすまなそうに謝ってきた。

「え、そんな、謝られることじゃないです。だいたいあれは、千花の予想外の出来事でした。それに、わたしはあの国でも良い思いをしましたし、千花にはすごく感謝してます」

おかげでカレヴィにも会えたしね。

……失恋したけど彼に出会わなければよかったとは思わない。

彼のおかげで、今まで知らなかった感情をいろいろ味わえたんだ。それまで狭い人生を送っていたわたしには、まさに奇跡のような出会いだったよ。

だから、その出会いを作ってくれた千花には感謝こそすれ、恨むなんてとんでもないと思う。

「それに三人も求婚者がいますし、今までのわたしからしたら夢みたいな話ですよ」

カレヴィみたいに、あの三人には恋はできないかもしれないけど、

誰を選んでもそれなりに幸せな人生は送れるかもしれない。

もちろん、選んだ人にはきちんと妻として尽くすつもりでいないと駄目だろうけどな。

「……はるかちゃんがそう言ってくれて、おばさん嬉しいわ。はるかちゃん、これからも千花の友達でいてね」

おばさんがどこか哀しげにそう言う。

なんだか、わたしに負い目を感じてるみたい。やだな、そんな顔しないでほしいのに。

「千花は昔からわたしの大切な友達ですよ。わたしの方こそ千花にはお世話になりっぱなしで悪いと思ってます」

「はるかがわたしに悪いなんて思う必要ないんだよ。ここでははるかみたいな人の方が貴重なんだから」

「え……？」

わたしが貴重？　なんだそれ？

わたしがきょとんとしてると、千花は寂しそうに笑った。

「わたしがはるかのおじさんやおばさんに力見せたら怯えてたでしょ？　だいたいあれが普通の反応なんだよ。はるかみたいに全然動じないのは珍しいの」

「え……」

そういえば、おとんとおかんが千花が移動魔法使っているのを見て、そんな感じで千花を見てたっけ。

……でも。

「千花は、千花だよ。魔法が使えても使えなくても、昔からお世話になってるし、わたしの大事な友達だよ」

「はるか……」

千花との友情は、わたしの中では大切な宝物だ。

おとんやおかんに出来の悪い子供とさんざん言われ続けて育ったけど、とくにグレもせずいられたのは、千花やおばさん達のおかげとも言える。

だから、千花がちょっと人と違う能力を持っていたって、怯える

なんてわたしには考えられないんだ。

むしろ、そんな千花が誇らしいくらいだ。

「わたしはそんな千花の苦勞なんて全然分かってなかったし、むしろ、いろんな魔法使えるだなんて、すごいなあと思っただけだった。千花がそんなこと思ってるなんて全然気がつきもしなかったよ。ごめんね」

わたしが千花に頭を下げると、千花が瞳を潤ませながら首を横に振った。

「はるかが謝ることなんてないよ。わたしはそんなはるかに救われてるんだよ。……だから、今回のことははるかに悪くしようがないんだよ」

千花、本当に今度のこと気に病んでるんだなあ。

でも、わたしとカレヴィがうまくいかなかったのは、カレヴィの暴走やわたしの鈍感さのせいなわけだし、全然千花のせいじゃない。

「……わたし、前にも言ったよね。こうなったのは千花のせいじゃない。悪いのはわたしとカレヴィだよ。だから、本当に千花は気に病まないでほしいんだ。……じゃないと、わたしが千花に申し訳なくて仕方なくなるから」

わたしがそう言うと、千花の大きな瞳から涙がこぼれ落ちた。

千花がこんな風にあからさまに泣いてるのを見るのは本当に久しぶりで、わたしは驚いてしまった。

——最強の魔術師なんて言われてるけど、千花もいろいろと辛かったのかもしれない。

わたしは強い千花の一面ばかり見ていて、それに今まで気づいてあげられなかった。

ごめんね、千花。

わたしはバッグからハンカチを取り出すと、千花の涙をそっと拭いた。

すると、千花がさらに泣き出した。

「わ、泣かないでよ、千花」

千花の泣き顔を見ていたら、なんだかわたしまで泣きたくなくなってしまつて困つてしまつた。

……そして、結局千花と二人して抱き合つて泣いてしまつた。

そんなわたし達をおばさんが微笑ましそうに見ながら「ありがとう」とわたしに言つてきた。

うつん。違うよ、おばさん。

「ありがとう」はわたしの言葉なんだよ。

千花に出会えて、本当に良かった。

これからも、どんなことになつても、千花は大切な親友だよ――。

それから、涙で顔中グチョグチョになつたわたしと千花は、お互いの顔を見てひとしきり笑いあつた後、顔を洗つて化粧を落とした。腫れぼつたい瞼も、おばさんが氷嚢を持つてきてくれたので、それでなんとか治まつてくれて一安心だ。

「それで、はるかちゃんは今これから報告に行くのね？」

「はい」

おばさんの確認にわたしは神妙に頷く。

おばさんが言つたのは、わたしの両親のこと。

おばさんは小さい時からわたしがおとんとおかん、特におかんにいい扱いを受けていないのを知っている。

でも体罰とかは受けたことはないの、お母さんに注意できなくてごめんね、とおばさんから何度も謝られたことがある。

それを子供心に優しい人だなあ、心配かけてすまないなあと思つた覚えがある。

「はるか、大丈夫だよ。わたしがなんとかおじさんとおばさんを説得するから」

千花が頼もしくそう言ってくれてるけど、でも。

「うん。わたし、今回は自分一人で二人を説得するよ。自分の家族くらい、自分で説得出来なきゃ駄目だと思うんだ」

「はるか……」

千花とおばさんは心配そうに見たけれど、わたしの心が変わらな
いと知ると、やがて微笑んで言った。

「そうね、その方がいいのかもしれないわ。はるかちゃんはいつまでも支配できる子供じゃないってことをあの人達も知るでしょう」

「そうだね。はるか、頑張って」

「うん」

わたしは二人の応援を受けて、大きく頷いた。

わたしはいつまでも狭い世界で小さくなっている子供じゃない。
そのことをわたしはあの世界の人達に学んだ。
だから、必ずあの二人を説得してみせる。

その戦いの前に、わたしは念入りに化粧をし、千花から貰ったブランド物の服装に合っているか姿見を借りてチェックした。

うん、これなら以前のわたしと大違いだ。

——大丈夫、わたしは戦える。

さて、そろそろおとんが会社から帰ってくる頃だろう。

いきなり突撃するのもなんなので、わたしはケータイで家に連絡を入れておく。

「あ、わたし、はるか。今からお土産持って帰るね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323r/>

王様と喪女

2011年10月10日03時12分発行